

NO. 72
WINTER
1981

英語展望

ELEC BULLETIN

特集：英語教師の海外留学



英語展望

NO. 72
WINTER
1981

ELEC BULLETIN

Edited by Natsuo Shumuta and Akira Ota
The English Language Education Council, Inc.
3-8, Jimbocho, Kanda, Chiyoda-ku, Tokyo



【特集】英語教師の海外留学

英語教師の海外留学.....	大石五雄	6
アメリカの大学教育の現状.....	阿部 一	8
アメリカにおける英語教員養成プログラムの現状.....	石田雅近	10
海外留学の心得.....	田中 博	14
ある英語教師の とある小さな夢	佐藤栄一	19
英國語学留学.....	合田さつき	21
ハワイ大学留学記(1)：消えたホームシック	日野信行	23

【国際展望】

中ソの英語教育.....	小川芳男	2
Reflections on a Trip to Sri Lanka	Sherman Lew	4
Two English Difficulties.....	Archibald A. Hill	36

【連載】

アメリカの人種と民族 (Ⅲ)	國弘正雄	25
漱石のロンドン (その8)	伊村元道	32
アメリカン・フォークロア (5).....	倉田好子	37
日常英語の常識 4 : Harry Houdini と John Hancock...	矢野文雄	40
トークショー 一考	木戸英晶	42
英語の謬 (その13)	戸田 豊	43

【英語教育の情報と資料 13】

Communicative Approach とその適用	玉崎孫治	46
------------------------------------	------	----

【E.T.F. ダイジェスト 3】

Silent Way は今....	瀬川俊一	50
-------------------	------	----

【新刊書評】『日英語表現辞典』

鹿野 力	51
------	----

『異文化間コミュニケーション』

刀根健誌	52
------	----

新刊紹介.....

53

新刊案内.....

55

展望通信.....

56

表紙デザイン

太田英男



中ソの英語教育

小川芳男

本年の8月中華人民共和国へ主として日本語教育の視察に行った。現在中国における日本語教育熱はいわゆる四人組追放以来急激に高まり、日本語学習人口は2百万とも3百万とも言われている。また36の大学が日本語科をもっており、この数も年々増加している。しかしこの日本語学習熱も英語学習熱にはかなわない。英語学習者は100名に対して日本語学習者は20名、すなわち10対2位の割合である。しかも日本語学習の目的の一つが日本を通じて西欧文化を輸入することだというは興味深い。

訪中の主目的は日本語教育の視察であったが同時に外国語教育（主として英語教育）も視察調査の対象とした。ただ、暑中休暇中のため教室における実際の授業の視察ができなかったのは残念であるが、北京外語学院の許教授その他英語教育の指導的立場の人々に逢って話を聞いた結果、10年前訪れたソ連の英語教育と共通点が多いのに気付いた。その共通点を中心として社会主義国家における英語教育の一端をのべてみたい。

まず根本的な姿勢としては、英語教育の目的は実用中心だということである。従ってわが国のように、英語の学習は教養のためか実用のためかというようなことは問題にならない。英語の学習は*tool「道具」*としての学習だと教科書などにも明記してある。従って生活に即した英語を指導している。

わが国の英語教育は当初は西欧文明を輸入することが大きな目的であったために、英語をそのための道具として学習した。従って、学習する英語の内容は英米の文物に関するものであった。特に初期の英語教育は英米の教科書をそのまま用いた。明治時代に外山正一氏が日本では日本人向きの教科書の必要性を説いたが、それは英語を語学として学習する技術面のことである。内容は依然として英米が中心であった。戦後の教科書で一世を風靡したのは表紙にイギリスの王冠のついた*Crown Readers*であり、戦後の中学の教科書では英米の子供の一般的な名前をとつつけた*Jack and Betty*であった。ところが中

ソの英語教科書には英米を象徴するような名前をつけたものはない。例えば今回訪れた中国では教科書の題名は単に*English*となっている。

最近では英語が国際語となって *international means of communication* と呼ばれるようになったので、英米以外のことでも日本の教科書にあらわれるようになつたが、依然として、日本の紹介的なものは殆んどない。中ソの教科書には英米のことよりむしろ自國のことが多い。自分のことからはじめて自分の住んでいる社会、そして自分の国のことと話題にしている。日本の英語の教科書では、London や New York や Washington、更に Paris とか Rome のことは載っていても、Tokyo や Osaka や Kyoto などをのせている教科書は殆んどないと言つてよい。

ところがソ連の教科書には Leningrad や Moscow の紹介記事があり、中国の教科書には Peking や Dairen や Shanghai のことが載っている。また同じ London にしても Lenin in London のような題で、London を舞台に Lenin を紹介している。また名前や話題にしても身辺の生活を中心としている。English 1巻の20課の一部を紹介すると；Your League secretary works very hard, doesn't he? Does Comrade Feng speak English or French? When does Comrade Chao get up every day? Comrade Chen is now working in a steel plant with his classmates. They're learning from the workers there. となっている。

ソ連や中国を訪問するまでは基礎の英語教育に思想問題ははいってこないと思っていた。しかしすでに見てきたようにソ連の教科書では Lenin の徳を称え、中国では毛沢東 (Mao Tsetung) の話題がでてきて Long Live Mao Tsetung! となり Premier Zhou Enlai の話が出てくるとなると、知らず知らずの間に中国思想やソ連思想ははいってくる。また身近な話であるから学習者に強い印象を与えることになる。実用としての英語を身に

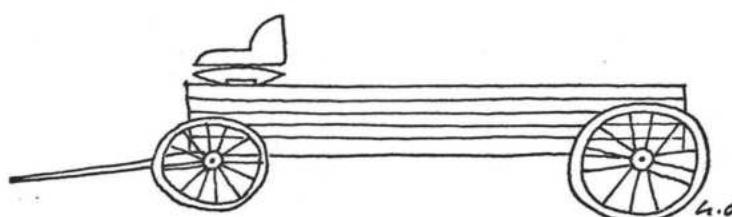
つけるためには、身辺のことを題材にしなければならぬことは言うまでもない。日本の教科書は英米のことが中心であるから、London is one of the biggest cities in the world. のような文が本文にあれば、英語の力をつけるためにはそれを身辺に移して Tokyo is one of the biggest cities in the world. とか、Mr. A is one of the tallest boys in our school. とか、Miss B is one of the tallest girls in our school. のような drill が必要であろう。このように身辺のことを訓練しておけば会話の材料が豊富になる。日本は明治以来入超の国で give and take ではなく take and take を続けてきた。日本人の会話下手も單に口が重いということだけでなく、自分のことや自分の国のことと話を訓練が英語教育に欠けていたことにもその一因があろう。

すでに述べたようにソ連や中国の英語教育は国策の一環として強く押し進められているので、そのやり方は戦時中のアメリカの Army Method に似ている。学習の初期には朝晩大声で基本文を暗誦させる。中国の教育のやり方には大別して填鴨式と啓発式の二通りがある。填鴨式というのは中国料理で有名な鴨に無理矢理に餌をつめこんで早く大きくしようとする飼育法からきた表現で、いわゆる詰込み式教育で、啓発式はその反対に学習意欲をひきだそうとする文字の本来の意味の education であるが、英語教育の初期には填鴨式で必要最底限度の基礎は無理矢理に覚えることが必要だとしている。語学教育には訓練が必要だということを考えれば、ある程度強制的に教える填鴨式は大いに参考になる。但しこれは初期の段階でのことで、大学の語学教育にそのままは適用されない。例えば北京大学では後期になると translation を学科目としてとりあげている。そして北京大学の教授はそれを第5の能力と言ってその重要性を強調していた。これは印欧系の言語を、ウラルアルタイ系やスラブ系の言語を母国語としている者が学習する際に大い

に参考になる。外国語と等価をもつ母国語を発見することは、外国語ならびに母国語に対する認識を深めるのに役立つ。それは単に bilingual ばかりでなく bicultural な知識を必要とする。それと同時に translation を第5技能と認めることによって reading を本来の正しい位置におくに役立つ。正しい意味の reading は言うまでもなく読んで意味をとることであって、わが国で從来よく言われてきた直読直解である。ところが從来わが国の学校教育では直読直解でなくて直読直訳の如く理解され、実行されてきた。すなわち日本の英語教育では読んで訳すことが読むことと混同されてきた。横の英語を縦の日本語に訳してみなくては読んだことにならない。しかし中ソでは翻訳は理解するためでなくて、理解を深めるためである。それは実用を重んじる社会の要求と無関係ではない。中ソで驚いたことの一つは、外国語を学習したものが一番あこがれているのは翻訳をする人と通訳である。外国語の教師よりも訳や通訳をする人の方が社会的地位も高く従って待遇もよい。外国語の教師はもちろん外国語に優秀なことが求められるが、それ以上に教育者としての人柄が大切である。広中博士がアメリカへ留学して数学を専攻する青年の選考に際して、第1に健康、第2に性格、第3に才能と言っていることと思い合せて興味深い。英語教師の資格は第1に教育者としての人柄、第2に学生への愛情と教えることへの情熱、第3に英語の学力ということになるであろうか。

最後に中等学校における英語の教え方の質問に対しては、ソ連では direct、または oral method と言い(10年前)、本年の中国訪問では異句同音に audio-lingua を中心とした eclectic method だという返事が返ってきた。教え方も同じだが教授法に関しても同一の紋切型の返事がかえってくるのもいかにも社会主義国家らしい。

(東京外国语大学名誉教授)



REFLECTIONS ON A TRIP TO SRI LANKA



As a teacher of English in Japan, I'm always eager for new ideas that will help me in my work. Last summer I visited Sri Lanka. It was a holiday trip, and I enjoyed the clean, unspoiled beaches, visits to Buddhist temples and other historical places, a ride on an elephant, and so on. As it is so often said, however, one learns more about one's own country and customs on a trip abroad than one does of the country visited. In this case, I came back to Japan with a better understanding of the problems and, perhaps, best ways of teaching English in Japan.

One of the reasons I chose to visit Sri Lanka was that I knew I should be able to get around using English. Although English may have been introduced to Japan in the Edo Period, it has been taught on a large scale only in this century; and the need to communicate in spoken English has, I would say, only been recognized

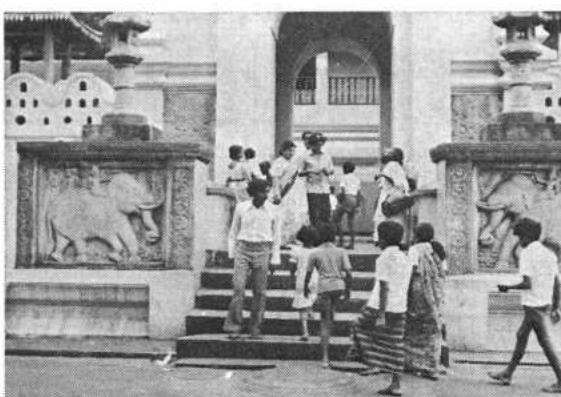
Sherman Lew
Instructor, The ELEC Institute

recently. Time, or tradition, does make a difference.

Interestingly enough, many people in Sri Lanka feel that there has been a decline in the standard of English since independence. I visited the University of Colombo where I had a long talk with the head of the English department, Miss Chitra Wickramasuriya. Many of her problems are distressingly familiar: large classes, unmotivated students, lack of good texts, etc. Is there a solution?

We school teachers, I think, should accept these things as constants, unpleasant to be sure, and direct our energy more to thinking of ways to deal with large classes, motivating our students, and writing good texts.

Why was it that the majority of the freshman students at the University, I asked myself, needed refresher courses in English while barefoot country boys as young as six or seven



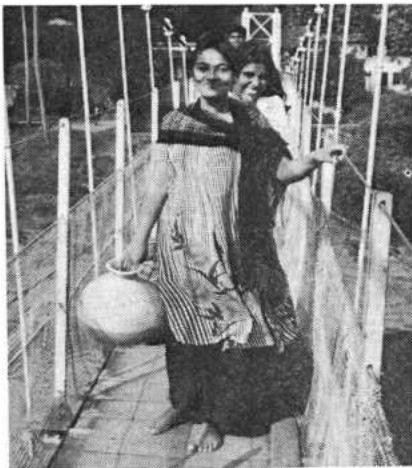
Temple of the Tooth, Kandy



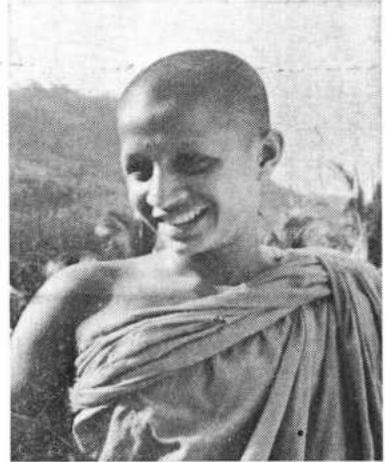
Japanese gift of TV Station



Street scene, Kandy



Sri Lankan girls
on suspension bridge



Young Monk
at Dambulla Rock Temple

dogged my steps everywhere I went, offering to guide me with explanations in fluent Japanese, French, English, German and even Polish? Perhaps the time we spend admonishing our students to study and to use English could be better spent in devising ways to make English a necessity in the classroom, as well as in the lives of our students.

I noticed that in the bookshops of Sri Lanka

there were a number of local writers working in English. Punyakante Wijenaike is among the top novelists in her country. I have observed the same thing in the Philippines, Taiwan and other places but not Japan. Do we as teachers have too narrow a view of the ways that English can be used by our students? It can be more than a passport to a good school, good job, or pleasant ten-day trip abroad.

LIFE

Life is real.
I found this
When I came back
To life again,
Though I had been buried
Underground by an enemy bomb
During the War.

Life is a dream.
I found this
When a blooming youth
Had been killed instantly
By an enemy bomb
During the War.

THE BRIEF TRIUMPH

Summer is here.
The burning sun is there.
Mt. Rokko is higher
In its waving green.

Sitting in the shadowy corner
Of life, I am listening
To the brief triumph
Of a cicada.

by Tsutomu Fukuda

英語教師の海外留学



大石五雄

私は1978年4月から1年間、アメリカに留学しました。この留学でよかったですと思う点は、(1)短期の旅では得られなかった、アメリカ生活の体験ができたこと、(2)アメリカの学問の動向がつかめたこと、(3)各地の図書館から資料を集めることができたこと、(4)今まで名前だけ知っていた著名な学者(ホケット、チョムスキー、トラッドギルなど)の講演や講義を聴くことができたこと、などです。ここでは、私の経験に基づいて、若干の留学アドバイスをしたいと思います。何かの参考になれば幸いです。なお、私の経験は、アメリカに限られていますので念のため、お断わりしておきます。

〈現地人と生活とともに〉

留学の目的は人によって異なりますが、共通している目的は、外国の文化を知ることだと思います。専門的関心は異なっていても、学問の背景となる文化を知ることは、諸研究に重要な手掛りを与えてくれるからです。その文化を知る上で、有意義なことは、現地人と生活をともにすることだと思います。私の場合、大学の寮で、1年間に2人のアメリカ人学生と一緒に生活しました。ことばの面で、それほど得たことはありませんが、アメリカ人を知る上ではいろいろ参考になりました。例えば、彼らの白人優越主義、ユダヤ人その他有色人種への偏見、猛烈な自信、共同生活の中でも徹底した個人主義、夜を徹しての学習、などは実感として認識することができました。同時に、今まで気付かなかった自分の中にいる日本人としての習性、(例えば、相手にことばで表現しないで、自分の気持ちを察することを期待することなど)を知る上で有益でした。外国人と同じ部屋に住むことは、時につらいこともありますが、一度はやってみる価値のある荒療治だと思います。

〈インフォーマントを雇う〉

何か調査したり、細かいことを質問したり、確かめるためには、インフォーマント(またはチューターでもよいですが)を雇うのがよいと思います。私の場合、語法・方言調査のためインフォーマントを公募で雇いました。

大学の placement center へ行って「インフォーマント求む。大学院生に限る。時給5ドル」の掲示を出してもらいましたら、5人の応募者がありましたので、面接によって、美人(?)のインテリ大学院生を採用しました。時給5ドルは悪くはなかったようです。サラリーを出す以上、かなり強く希望が出せますので、好都合です。

このほかに、相互教授もしました。大学卒のアメリカ人に、日本語を1時間教え、1時間英語を教わったわけです。このアメリカ人には、発音の矯正、大学の講義テーマの不明個所の確認などをしてもらいました。アメリカ人と普通に話していると、少々の発音や語法のミスなど看過してしまいますので、このアメリカ人には、何でも unnatural なものは厳しく正してくれるよう頼みました。相互教授は無料ですし、それに日本語を教えることは、自らの日本語力の向上にも役立ちますので有益です。

〈冒険的一人旅を〉

英語教師はとかく、例えばアメリカについて熟知していると思いがちですが、実際に見るアメリカは、未知のことの方がはるかに多い国だと思います。広大なアメリカでは、日本のマスコミに乗らない様々な現象も、次々と起こっているからです。この未知の国アメリカを知るためにには、一人旅に限ると思います。

例えば、3月17日のセント・パトリック・デーのパレードで見たホモ・グループの行進(サンフランシスコ)、ユニフィケーション・チャーチ(原理運動)の大集会(ボストン)、国境に坐る乞食の群(テキサス州エルパソ)、日本空爆に活躍したB29を保存するアメリカ最大の空軍博物館(オハイオ州ディトン)、17世紀ヨーロッパの農民生活の伝統に生きるアーミッシュの人々(ペンシルベニア州バード・イン・ハンド)、江戸の名を留めるYedo(インディアナ州イエド)、など私の乏しい旅の経験でも、アメリカ文化の多様性がわかりました。

また、旅によって、アメリカ国内に存在する言語差、つまり方言の違いに接することができます。例えば、ボ

ストンからナッシュビルへ、オースティンからサンフランシスコへ飛べば、方言差は歴然です。これらの事実を知ることによって、方言に対する偏見を是正し、方言差を容認する寛大さも生まれてくるのではないかと思います。地域に根づいた各方言は、それなりの伝統と歴史を備えた文化遺産であることがわかるからです。

〈進んでショックを受ける〉

折角留学のチャンスをつかんだら、進んでショックを受け、ショック療法を自らに課するのがよいと思います。ショックには、語学ショックやカルチャー・ショックがあると思われますが、ショックを受け易い立場に自分を置いてみることを勧めたいと思います。

自身の語学ショックといえば、日本でアメリカ人やイギリス人と何とか付き合える程度の英語力では、アメリカ人と生活をともにしたり、大学の講義を理解するには極めて不足だ、ということがわかったことでした。特に大学の講義の中で起こる教授と学生の議論や、学生同士の議論にはついていけずショックを受けたのです。しかし、このショックを通して、日本と現地における英語のスピードの違い、生活に根ざさない語学力のもうさ、聴取能力の重要性を痛感できました。

カルチャー・ショックでは、例えば人種差別の実態を知りたかったら、自ら実験してみるのもよいと思います。私は、東大の國廣哲彌教授がジョージア州アトランタのホリデー・インの食堂で、差別されたことについて書かれた記事を読んでいましたので、アトランタへ行った折、実験してみました。案の定、私が案内された席は、真中に空席があるにもかかわらず、すみの料理場近くの所で、まわりは黒人の客ばかり。メニューをしばらく見てから、食事せずにおもむろに退席しました。

各国から集まっている留学生と話してみるのもショック療法のチャンスです。例えば、私はアフガニスタンのカブル大学講師という留学生から、「なぜ白人とばかり付き合うのか」と聞かれて、初めて白人べったりの自分の姿勢に気付きました。この留学生の意見は、白人はしゃせん白人、彼らとの付き合いには限界がある、ということでした。またインド人の留学生から「日本人は、印度で、アメリカ人と同じような振舞い方をしているが、あれはどうしてか」と聞かれ、初めて海外での日本人の行動は、共同責任だということを知りました。つまり、自分だけはよい、と思っていても、他に望ましくない日本人がいれば、自分自身も例外とは見なされない、ということを知ったわけです。というわけで、積極的に行動すれば、ヒヤヒヤのショックも受けますが、同時にそのショックからいろいろ学ぶことが多いと思った次第

です。

〈ホームステイの経験を〉

現在では、ツアーやホームステイを含めるなど、ホームステイは、一般化してきていますが、外国を理解する上でやはり貴重な経験だと思います。ホームステイを斡旋している団体には次の2つがあります。

International Student Service

291 Broadway, New York, New York 10007

U.S. Servas Committee, Inc.

11 John St., Room 406, New York
New York 10038

大学の International Student Office へ問い合わせると、申し込み用紙をもらうことができます。

〈図書館の利用を〉

アメリカの大学図書館は、極めて優れたサービスをしています。夜遅くまで開いていること(11時まで開館の所、オールナイト開館の所さえありました)、土・日も開館すること、開架式が多いこと、inter-library loan の制度によって、全米の大学図書館の蔵書を利用できることなどがその特徴です。

私は、留学の意義は図書館の利用にある、と極論したいくらい、その重要性を認識しました。日本で得られない資料をコピーし、それを製本するサービスもあることから、相当な量の資料を本の形にして持ち帰ることができます。その意味では、研究の面からは、いくつかの図書館を利用するのに好都合な地理的条件にある大学を選ぶことは、留学の一つのポイントになると思っています。

〈原点に戻る〉

留学とは、もう一度まじめに、原点に戻って、教育とは何か、教師とは何か、といった基本的問題について考えるチャンスだと思います。背広にネクタイの上下に身をつつんだ日本の教壇から、外国へ行ってジーパン着用の一学生に戻れば、ものの見方も純粋になると思います。多忙な日常生活で得られない、静かな一時を与えてくれます。つまり留学は、われわれの帰属する社会の紺から逃れ、自由な思考のための場所と時間を与えてくれるわけです。砂漠の中のオアシスのようなものだ、といつてもよいでしょう。その意味で、留学は貴重な経験であり、理想的には、数年に一度繰り返すことが望ましいと思います。

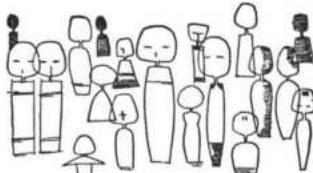
(成蹊大学助教授)

*

*

*

アメリカの大学教育の現状



阿 部 一

筆者は1975年の夏に渡米して以来、夏期講座も含める
とペンシルベニア大学、テンプル大学、プリンストン大
学そしてアイオワ州立大学と短いながら実に4つの大学
生活を経験したことになる。最初の3校は東部、しかも
私学、そして言うまでもなくアイオワ州立大学は中西部
の州立総合大学である。

ちょうどフィラデルフィアの学業も終え帰国準備を
している時、かねてより公私両面で世話をなっているA
教授より電話があり遊びに来いの由。筆者も色々な教授
と知り合い、教わったが彼女ほど学識も深く人間的に温
かみがあり、教職においては文字通り born teacher で
ある人を知らない。英語教育の分野では全米のみならず、
世界的な学者で著書も多く、筆者も日本に居た頃、その
数冊を読み、もちろんその名は知っていた。しかし實際
会ってみると飾らないところがいい。もちろん話してい
ると、その教養が会話の端々にほとばしり出る。

彼女とともにやま話をしている時、談たまたま『アメリカとアメリカ人』に触れ(ついでながら、この同じトピックがかの文豪スタインベックの著作のひとつをなす)、「ミスター・アベはここ1年ばかり東部でくらしてみて、色々な感想を持ったと思うが、ここももちろんアメリカだがもうひとつのアメリカ——中西部を見ずに帰るのは惜しい」というようなことをもらされた。このことばが自分のアパートに帰っても頭の中に残り、「せっかく來たのだから、これも勉強だと思い、中西部に1年程行ってみるか」という結論に達した。思えば単純な“滞米延期”であった。中西部のカンサス、アイオワ、ミネソタ等数校に願書を出したが、時期的に遅く、結局アイオワに行くのが決まったのは、ほぼ7月の中頃であったと記憶する。

中西部は“アメリカの良心”と言われている。日本の英語教育も米語としては、中西部のものを General American として、中・高校では教えている。旧 New Prince English Readers に出てくる Jane は Colorado 州 Denver 出身(ということになっている)だし、New

Prince English Readers の Tom は Wisconsin 州 Madison の出身である(現在の New Prince English Course は California 州の Oakland に舞台が変っている)。いずれも GA のメッカとでも言うような地区である。思えばアメリカは広大な農地中心の社会であった。アイオワのトウモロコシ、カンサスの小麦、いずれももちろん全米一の収穫量である。

「しかし」とテンプル大学の同級生ジョン・バッキンガムは言う、「やはり東部こそアメリカのペースセッターよ。」これもそうであろう。ニューヨーク、フィラデルフィア、ボストン等、色々な問題は抱えるにせよ、やはりアメリカをリードしている地区であることは否めない。彼の地に住む大部分の人々にとりアイオワ、カンサス、ネブラスカ等の地はやはり frontier であり、そこにある大学は、アメリカ人が呼ぶところの hick, あるいは cow college にしか過ぎぬのである。この侮辱はこれらの cow college と呼ばれた大学自身が一番感じていることである。当然「東部に負けるな!」「ひとアワ吹かせろ!」の掛け声と共にカリキュラムの刷新、教授陣の充実、設備の拡大と手を打って来た。東部の名門大学も不景気と学生減のあおりを受けて閉鎖・休校に追い込まれる所も出ている。ハーバードなど ivy league 系はいずれも年間 \$5,000級の tuition である。中流階級では家でも売らない限りとてもやれないと親がなげく。一方の州立大学は、もともと授業料やら必要経費が私大に比べてかなり安いのが取柄だったが、これも最近値上がりして来た。しかも“州立大学”であるが故に州内住民から「州民を優先的に入れろ」の圧力もあり、質の悪い学生も“大学生”になれる風潮が出て来た。情報通で国際関係論専攻のK君によると、オハイオ州の某大は GPA 1.5 以上(GPA とは Grade Point Average の略でアメリカの大学で使われる成績評価基準。全科目で A を取れば 4.0 となり約 2.5 くらいで平均と言える)であれば、悠悠入学という事態まで発生した。これでは日本の三流大学どころではないだろう。

スワースモアと言えば東部でも指折りの名門単科大学であるが、そこのある係官がなげいた、「最近うちもメチャクチャですね。昔はやはり学業成績が絶対だった。A, B 2人の学生がいて、ほぼボーダー・ライン上にいる。どちらを取るかという時、例外なく、彼らの家庭環境などは関係なしに、学業で良い方を取ったものだった。それがスワースモアの名を高めていた。ところが最近では同じようなケースの場合、学業以外の要素（例えば父親の職業など）が判定の基準になることが多いのですから…。」もちろん父親の寄付を見込んでのことであろう。一流のスワースモアですら、こんなことばがささやかれているのである。二、三流の大学は推して知るべしであろう。

「いや必ずしも、そうじゃないぜ」といったのは、プリンストンのロバート・プロムキンである。「Princeton in One Nation さ。皆誇りを持っているんだ。しぐきが厳しいし、もし楽に入れたとしても 1 学期と持たないぜ…だから入りたいやつは入れてもいいんだよ…本当に力のある、勉強をやりたいやつだけが Princeton の学位を手にする…それでいいんじゃないかな。」そうだろう。正にアメリカ的合理主義か。

中西部はどうであろう。東部に追いつき追い越せでやって来たということは前に述べた。中西部主要大学連盟やら五大湖岸大学連盟といった同盟（？）を結んで、質的向上を目指している。しかし樂觀は許されないようである。大学院レベルはいいとして学部はかなり甘い。大学入学者は SAT (Scholastic Aptitude Test) といった全国テストを受け、その平均が大学格差を大まかに示しているが、州立大学は一部を除き、全般に平均点が低

い。これは大学全体に程度が悪いというより、学生の学力におけるバラツキが激しいことを示している。極端な例で言えば、ある程度まともな（つまり意味の通じる）英文が書けない学生がいる。一昨年、話題になった Newsweek 誌の、“Why Johnny Can't Write?” という特集記事を想い起こされる方もいるだろう。

そういった学生の質といった問題に加えて、大学自体の運営も問題になっているところが多い。いずれの大学も言ってみれば、設備を拡げすぎたのである。その広大な施設・設備を管理・運営するのである。大変なことは明らかである。ニューヨーク市立大学が長年の授業料無料を有料化に切り換えたのはごく最近である。オハイオ州立大学がここ何年にもわたり、学生数が定員を大きく割っているのは関係者間の常識である。一時は州のマジョリティーであるドイツ系州民の要望（？）で、解決策として、故国ドイツで留学生斡旋もやったと聞いた。

そして南部もある。現大統領カーター氏は南部出身である。しかも deep south と言われている Georgia。一昔前は考えられなかったことである。まさに「アメリカは東部、中西部だけじゃないぜ、南部もあるんだぜ」という声が聞こえて来そうである。中西部が東部に追いつき追い任せをスローガンにしたように「中西部、東部に負けるな」の掛け声もすさまじい。南部のしかも黒人が多いと言われている。モア・ヘッド大学に日本語学科ができた。黒人の有能な日本語学者が出る日も近いだろう。アメリカの大学はその社会と同じように転換期に来ている。どうすれば生き残れるか…が課題だろう。

（米・アイオワ州立大学外国語教育研究所在外研究員）

English Teaching Forum

年間購読料 1,600円

お申し込みは直接 ELECへ

アメリカ合衆国一流の言語学・英語教育の専門家の協力を得て編集された、外国语としての英語教育の専門誌。世界百ヵ国以上で読まれており、英語教育に関する世界的最新情報が得られる情報源として高く評価されている。通常年4冊発行。なお本誌の内容等の解説が「E.T.F.ダイジェスト」と題して『英語展望』に毎号掲載されているので、参考にされたい。バックナンバー在庫有。各400円。

FORUM バックナンバー案内

No. 4 October, 1980

Joke Telling as a Tool in ESL/Graded Interviews for Communicative Practice/Activities for Communication Practice

No. 3 July, 1980

What We Learned by Using the Silent Way/Destroying the Teacher: The Need for Learner-Centered Teaching

No. 2 April, 1980

Techniques for Teaching Reading/English for Specific Purposes: A Mexican Case Study

ELEC (〒101 東京都千代田区神田神保町 3-8)



アメリカにおける英語教員養成 プログラムの現状——自己研修をめざしている人のために

石田 雅近

教師となり教壇に立つようになってから自己研修をどのように続けるかは、その後の英語教師としての資質を大きく左右するものだと言われている。ひと口に自己研修と言っても、その内容は幅が広く、毎回の授業準備を通して積み重ねていく個人的なものから、同僚と協力して行う校内研修、その枠を広げて他校との接触を求めて行われる地域研修、教育研究団体などの主催による各種の研修、また内地留学と呼ばれるものや、さらに海外研修、留学に至るまで、実に様々である。この中で、海外研修や留学は、英語教師なら一度は自己研修の finishing touch として、果たしてみたいと願うものの一つであろう。しかし、現実には、国内での1,2週間の夏期研修会にもなかなか思うように出られず、ましてや海外研修や留学は、よほど恵まれた者でない限り、まず無理であるというのが残念ながら実状である。従って、手軽にできる自己研修と言えば、やはり日本で入手できる書籍や文献を頼りに自分なりの計画を立てて自己学習を続けると言うのが、最も一般的な形となろう。そこで、ここでは英語教授法について自己研修をめざし、将来の海外研修の布石としたいと願っている読者を想定して、アメリカにおける英語教員養成の内容を、特に TESOL (TESL/TEFL)¹⁾ の MA (修士課程) プログラムを中心に紹介してみよう。そして筆者が1976年1月から1979年3月まで留学したハワイ大学マノア校 (Univ. of Hawaii at Manoa) とテキサス大学オースティン校 (Univ. of Texas at Austin)，さらに夏期休暇を利用して訪れたカリフォルニア大学ロサンゼルス校 (Univ. of California at Los Angeles) で集めた資料を基に、講座の種類、その内容、使用テキストを御案内かたがた、アメリカの「第2外国語としての英語」の研究分野を概観し、御参考に供したいと思う。

× × ×

70年代前半のアメリカでは、完全に独立した MA プログラムとして TESOL (TESL/TEFL) を持つ大学の数

は20前後であったが²⁾、それから10年を経た現在では、それが30を越え、いわゆる MA in Applied Linguistics with emphasis on TESOL や MA in English with concentration in TESL とか MA: Specialization in Bilingual and Bicultural Education と呼ばれているものまで含めると優に60を越えている³⁾。

それらの大学の TESOL 関係のプログラムを見てみると、比較的伝統があると言われている MA プログラムには、概ね prerequisite (基礎必修科目) と呼ばれているコースが2~3つ用意されており、そのプログラムに初めて籍を置く学生は最初の学期に必ず履修することが義務づけられている。これらは required (必修科目) と言われているコースを取る場合に必要となる基礎知識を与えるというのが建前になっているのだが、それと同時に、そのプログラムに登録した学生が本格的に MA の学位をめざして十分にやっていけるかどうかを審査する役目も果たしている。従って、これらのコースでは最低でも平均Bの成績を維持することが要求されているし、また少なくとも MA を修了するつもりで入学してきた学生なら、すべてAを取ることが望ましいとされている。多くの場合、この段階では一般言語学の初步的なものや、あるいは英語を中心とした音韻論や統語論を学ぶのが普通である。ハワイ大学では、English Phonology と English Syntax の2コースが基礎必修科目となっている。筆者が在学していた時は、English Sentence Structure (Univ. of Michigan Press) の著者として有名な Dr. Robert Krohn が English Phonology を担当し、P.

1) TESOL=Teaching English to Speakers of Other Languages, TESL/TEFL=Teaching English as a Second/Foreign Language

2) Editorial Staff, "Higher education and TESOL programs in the United States," *English Teaching Forum*, Sep.-Oct., 1972, pp. 32-45.

3) Charles H. Blatchford, *Directory of Teacher Preparation Programs in TESOL and Bilingual Education*. 1978-81, Washington, D.C.: TESOL, 1979.

Ladefoged 著 *A Course in Phonetics* (Harcourt Brace Jovanovich), S. Schane 著 *Generative Phonology* (Prentice-Hall) および D. Nilsen & A. Nilsen 著 *Pronunciation Contrasts in English* (Simon & Schuster) をテキストとして使用し、発音記号の書き方や調音音声学などのごく初步的なことから始まり生成音韻論の入門までを正味 4か月の 1 学期間で終了した。English Syntax の方は、毎学期違った教授が担当し、テキストもその都度変わったようだが、いずれにしろ練習問題が沢山載っている変形文法の入門書が必ず 1, 2 冊使われ、それと並行して代表的な prescriptive grammar の本も読むことが要求された。クラスでは演習を中心として授業が進められ、テキストとしては R. Whitman 著 *English and English Linguistics* (Holt, Rinehart & Winston), R. Jacobs & P. Rosenbaum 著 *English Transformational Grammar* (Blaisdell), および J. Algeo 著 *Exercises in Contemporary English* (Harcourt Brace Jovanovich) であり、生成変形文法は標準理論の範囲にとどまっていた。このコースを担当するどの教授も R. Quirk & S. Greenbaum 著 *A Concise Grammar of Contemporary English* (同上) を reading list に入れており、実際筆者もすべての MA コースを終えるまで瞬時も手離すことのできない重要な本のひとつであった。

一方、ハワイ大学と違ってクォーター制を探っている UCLA では、1978年に TESL の Ph. D. コースが設置されたのに加えて、MA プログラムの入学定員が 24 名に限定されているために、年々入学が厳しくなっているようである。入学条件は、まず第 1 に TESL 教員免許取得のための特別プログラム (Certificate Program) で 36 単位の全課程を終了していることが必要であり、さらにそこでの平均点が B よりやや高い 3.25 を維持している者だけが正式に MA プログラムに入学を許可されている。

いずれにしろ、入学希望者は誰でもしばらく provisional な身分の時期を経験し、無事にそれを通過の後、必修科目と本格的に取組むということになるのだが、ハワイ大学の場合、その必修科目は次のように分けられる：1) Advanced English Syntax, 2) Psycholinguistics, 3) 通常 Sociolinguistics と呼ばれている Language, Culture, Society, and Language Education という長いタイトルのコース、4) Practicum と称して包括される英語教授の実践的な 5 コース (TESL, Problems in TESL, Materials Selection & Adaptation, Second Language Testing, Bilingual Education)。最初の 3 つは MA プログラムの “core” コースと言われ、ごく最近学界で問

題になっている諸論文をはじめとして多量の文献を読まれ、1 コースにつき 20 頁前後の論文を 2, 3 編書かされるので、これらのコースで躊躇する学生も少なくない。

“core” コースの 1 つである Advanced English Syntax は、長い間 Dr. Roderick Jacobs と Dr. Ruth Crymes がそれぞれひとクラスずつ担当していた。このお 2 人は JACET などの招きに応じて何回か講演に来ており、日本でもなじみの多い学者である。とりわけ Dr. Crymes は *TESOL Quarterly* の editor を長らく務め、アメリカ TESOL 学会の重鎮であったが、昨年 10 月 31 日メキシコに向う途中飛行機事故に遭い不帰の客となってしまった。学問的厳しさと暖かい人柄を偲ばせるその講義は、今でも昨日の如く鮮かに想い出される。心から先生の御冥福をお祈りしたい。

Dr. Crymes の Advanced English Syntax は、J. Richards 著 *Error Analysis* (Longman) と G. Leech & J. Svartvik 著 *A Communicative Grammar of English* (同上) がテキストとなり、前にも挙げた *A Concise Grammar of Contemporary English* は副テキストであったが、この方は何度も読み返し熟知しておくことが求められた。学期の前半は、error analysis (誤謬分析) を扱い、その妥当性や応用の可能性を contrastive analysis (対照分析) と比較し、interlanguage (中間言語) の最近の統語的研究や問題点、さらにその実際の分析法などを中心に授業が進められ、error の “資料集” のひとつとして M. Burt & C. Kiparsky の *The Gooficon* (Newbury) が使われた。後半は、言語学の主要論文を 30ほど取上げ、それらが英語の syntax を教える場合にどのような implication を持ち得るのかについて、学生の報告と討論が中心であった。

Psycholinguistics も Dr. Masanori Higa と Dr. Steinberg によって担当されていた時期が長かったが、筆者が 1976 年 1 月に入学した時には、Dr. Higa はすでに筑波大学に移った後であり、また Dr. Steinberg も sabbatical leave で大学を離れてしまっていた。その代わりに、Chomsky の下で Ph. D. を終えたばかりの Susan Fischer 女史が来ていた。彼女は、すでに確立されたとはいえ、まだまだ若い学問分野で極めて多岐に渡るこの難解なコースを、実際に手際よくまとめておられたのだが、成績評価の厳しさには定評があり、学生も恐れをなしてこのコースをなるべく後回しにしていたようである。テキストは H. Cairns & P. Cairns 著 *Psycholinguistics* (Holt, Rinehart & Winston) と P. Dale 著 *Language Development* (同上) が使われ、また副テキストとしては、P. Denes & E. Pinson 著 *The Speech Chain* (Anchor)

と J. Fodor, T. Bever & M. Garrett 著 *The Psychology of Language* (McGraw-Hill) が指定された。Dr. Fischer がそのコース・シラバスの中で, Linguistics, Psychology, Psycholinguistics の関係を実際に簡潔に示しているので, それを抜書きしてみよう。

Linguistics is concerned with trying to account for our knowledge of language, or our grammar. Psychology is concerned, depending on which theory one believes, with behavior, thinking, information processing, and/or learning. Psycholinguistics, then, is the study of language behavior, the relation between language and thought, language processing, and language learning. In this course, we shall examine alternative theories and attempt to build up a model of how human beings produce, comprehend, use, and learn their first and second languages.

このコースは, "What is psycholinguistics?" という大きな問い合わせから始まり, この学問の歴史的な流れを握んだ上で, 各論に入りこの分野における第2言語獲得に対する一応の位置づけまでを, 1学期間でカバーするために, 猛烈なスピードで数多くの topic を次々に片付けて行く。従って, 心理学, 言語学, 言語教育学に関する予備知識が不足していると, 授業について行くことだけでも困難になってくる。失語症などの言語障害と大脳生理学, 意志伝達行為の仕組み, 言語習得臨界期 (critical period) 仮説と神経言語学, 幼児言語の発達過程, 記憶・模倣・理解に関する各種の実験結果と言語学習理論 (認知学習理論と習慣形成学習理論) 等々の興味ある問題が扱われた。

Psycholinguistics と同様, まだ歴史の浅い学問であるが, 言語教育の領域に深く関わっているものに Sociolinguistics がある。この両者は外国語教育を軸として, いわば, 車の両輪の関係にあり, これらを併設する MA プログラムが増えている。ハワイ大学では Sociolinguistics という名称こそ用いていないが, 内容の点でちょうどこれに相当する Language, Culture, Society, & Language Education というコースがある。その名の通り, 言語教育を言語やそれを取巻く文化および社会との因果関係において考察するもので, 非常に広範に渡る諸問題を取扱う。学生の中には, 1回履習しただけではとても理解できないということで, 卒業するまでに 2度3度聽講したり, また履習する前の学期から予めテキストや関連文献を読み始める者もいるぐらいで, この科目を履習する頃には, すでに term paper のテーマを決めてしまっているような学生も何人かいた。担当教授は

Dr. Richard Schmidt で, 彼はブラウン大学で Ph. D. を取得の後, カイロのアメリカン大学でしばらく教鞭を取っていたが, 1976年9月にハワイ大学に招かれ, それ以来この講座を担当している。テキストは, J. Cazden & D. Hymes 編 *Functions of Language in the Classroom* (Teachers College Press, Columbia Univ.) と P. Giglioli 編 *Language and Social Context* (Penguin) で, 特に後者は, テキサス大学の Dr. DeCamp 担当のコース Sociolinguistics にもテキストとして使われていた。副テキストは, P. Trudgill 著 *Sociolinguistics* (Pelican) と J. Gumperz & D. Hymes 編 *Directions in Sociolinguistics* (Holt, Rinehart & Winston) であった。その他に *International Journal of the Society of Language, Language in Society Topics in Culture Learning, Social Forces* などの専門誌から関係論文が30編ほど reading assignment に加えられた。topic は4つの大きな分野に別けられて, 次のことが取り上げられた。

Area A : speech acts, speech events, & discourse analysis, Area B : language variation, stratification, & dialectology, Area C : speech communities—multilingualism, bilingualism, bidialectalism, & diglossia, Area D : language policy, standardization & modernization, & language attitudes.

上に挙げた Advanced English Syntax, Psycholinguistics, Sociolinguistics は, 最新の文献を中心に, 理論面から外国語学習や教授の問題点を解明していくとするもので, 当然のことながら理論的色彩の濃いコース内容となっているが, 一方これらと対照的に, 第2外国語としての英語を実際に教える場合に必要となってくる実践的な知識や経験を与えるのを目的として用意されているコースが数多くあり, これらは Practicum と総称されている。教授法論, 教材論, 評価論, グループ・ダイナミックスを含む語学習者論, 語学教育目的論, 教育行政論, 教師論を中心テーマに, 授業参観, 教材・教案作成, 教育実習, テスト作成, 授業評価, カリキュラム編成, 視聴覚教材の作成と利用などについて実際指導が行われている。

ハワイ大学では, 前に挙げた5つの Practicum 必修科目の他に MA の卒業単位として認められているコースに, Bilingual Material Development, Unconventional Approaches in TESL, Teaching of Writing, Teaching ESL Reading, Instructional Media, Historical Antecedents of ESL Methods がある。この他に11の undergraduate コースがあり, graduate コースを履習する際の準備となるように配慮されている。これらの

Practicum コースを担当する教授の中で、1978年メキシコで行われた第12回 TESOL 国際大会で大会委員長を務めた Dr. Charles Blatchford が TESL と 1 年置きに開講される Unconventional Approaches in TESL を担当していた。彼は Silent Way, Counseling-Learning/Community Language Learning, Suggestopedia, Total Physical Response Approach, Drama Method, Transactional Engineering, Labo といった新しい教授法を研究しており、国務省語学研修所の Earl Stevick と共に、これらのいくつかを実践に移している数少ない一人である。彼の TESL のコースでは、C. Paulston & M. Bruder 著 *Teaching English as a Second Language* (Winthrop) と F. Billows 著 *The Techniques of Language Teaching* (Longman) が選ばれた。このコースでは、いくつかの代表的教授法を教材と共に取上げ、教師と学習者の遭遇する問題に中心を置き、解説、検討、評価を加えた。また 4 技能のそれぞれに焦点を合わせた peer teaching や practice teaching を学生に行わせその授業を VTR に撮り、合評という形で問題分析を行った。course requirement は、20枚程度の research paper を提出することと、与えられた reading list の中から 2 冊 book review をすること、それに特定のテーマを決め、関連文献を 15編選び annotated bibliography を作成することなどが主であった。また、このコースでユニークなのは、受講期間中に自分がどれだけ学び進歩したと感じたのかを報告する self-evaluative report を毎月 1 回提出させられたことである。

この他に Practicum のコースはどれを取ってもその名の通り、教壇に立ったその時からすぐ活用できるものばかりを盛り込んでいた。たとえば、Instructional Media というコースでは、テープレコーダー、VTR、オーバーヘッド・プロジェクター (OHP)、スライド映写機、LL 装置の操作方法を実地に学んだし、また 10~15 分の教材を各自で作りながら視聴覚教材の選択や利用法についても実際指導を受けた。

最後に総合試験と言われている一種の卒業試験である comprehensive examination について簡単に見てみると、ハワイ大学では、この試験は 3 時間に及び、Practicum, Linguistics & English language, Language acquisition の 3 分野において、それぞれ合格点を取らなくてはならない。ここ 4, 5 年に出題された問題から典型的なものを 3 つだけ選んで挙げてみよう。

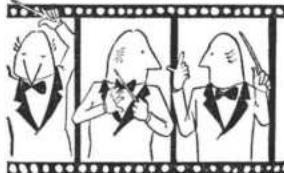
- 1) The audio-lingual method in teaching adults foreign languages was justified by a psycholinguistic theory that said that language was a set of habits to be acquired largely by imitation and practice. It is now widely believed that language is more than just a set of habits and that language learning involves more than imitation and practice. (a) How could a more cognitively-based theory explain that the audio-lingual method works (to varying degrees for different people)? (b) What would the implications of a more cognitively-based theory be for language teaching methodology?

- 2) Compare and contrast any three of the following methodologies : Grammar-translation, Direct, Audio-lingual, Suggestopedia, Community Language Learning, Silent Way, Drama. In your discussion, consider the following: classroom activities, role of the teacher, role of the student, skills emphasized, role of materials, psycholinguistic considerations, sociolinguistic considerations.
- 3) Compare the structure of relative clauses in English with that of some other language that you know well. Be sure to include different kinds of relative clauses and make reference to all grammatical processes (optional and obligatory) which apply to these structures. On the basis of your comparison, what 'mistakes' do you think speakers of the other language might make in using relative clauses in English? Do you think these mistakes would be important enough to be worth spending time on? If not, why not? If so, how would you help them to overcome these mistakes?

× × ×

以上、英語教員養成プログラムの概要を述べたつもりであるが、紙面の都合で触れることのできなかったことも少なくない。たとえば、最近 psycholinguistics 研究に目ざましいものがある「読解指導」、英語以外の外国语を少なくともひとつは学ぶことが義務づけられている foreign language requirement、それに卒業論文のテーマや内容についてである。特に卒業論文については過去 10 年間に書かれたものをひとつひとつ追って行くと、「第 2 外国語としての英語」研究の力点が変っていく様子が分り興味深い。これらについては機会を改めて御紹介することにしよう。
(ELEC英語研修所講師)

海外留学の心得



田 中 博

はじめに

本稿では、できるだけ具体的な資料や事例を掲げ述べることと致しますが、各大学による多少の差異は、あらかじめご了承下さい。

なお以下の各項目は、主にアメリカの大学について、私のカウンセリング経験、自分自身の留学体験及び外国人留学生担当のアメリカ人教授などの意見を参考にしたものですが、特に欧米人は、日本人に比べ独立心や自我意識が強いので、留学生の方は、「なぜ」「何のために」といった目的意識を持つようにしてほしいものです。

大学の選択

アメリカには、短大も含めて3,000校以上の大学があります。ここでは、地域別に分けほんの一部の紹介になりますので(別表1)なども参考として下さい。

東部の大学

全米の雄ハーバード大学、英國風伝統のエール大学、全米最古のビジネス・スクールを有するペンシルバニア大学、ホテル科などに留学生の多いコーネル大学などのアイビー校、それに対抗するM.I.T.は世界的な名声を誇っており、ニューヨーク市内では、コロンビア大学とニューヨーク大学が双壁でビジネスや芸術、ファッションの分野で都市機能を生かし特に有名です。州立大学としては、ニューヨーク(S.U.N.Y.)とペンシルバニア(ペン・ステイト)が組織も大きく内容も充実しております。

中西部の大学

世界初の原子炉運転及び一大経済学派のシカゴ大学とシカゴ隣接のエバンストンにあるノースウェスタン大学が中西部の中心です。またノートルダム大学はフットボールばかりでなく勉学との両立校として有名です。語学教育のミシガン大学やウィスコンシン大学、イリノイ大学もレベルの高い州立大学です。ピッツバーグにあるカーネギー工科大学は大富豪カーネギーの寄付設立だけに

すばらしい施設です。

南部の大学

人種差別や方言等の理由で敬遠されがちですが、今日アメリカで最も発展しつつある地方です。ナッシュビルには歴史の古いフィスク大学、アトランタにはジョージア工科大学があり、セントルイスにはワシントン大学、オースチンにはテキサス大学、ヒューストンではライス大学が特に有名です。全米でベストテンに入る大学も少なくなく、今後ますます伸びると思われますので見直してほしいと思います。

西部の大学

西部の代表的大学は、パークレイに本校を持つカリフォルニア大学です。西部私学の雄はスタンフォード大学で多くの学部でハーバード大学と対抗しております。またカリフォルニア工科大学(C.I.T.)もM.I.T.に対抗する実力を備え米宇宙開発の研究部門となっています。その他カリフォルニア州以外では、シアトルのワシントン大学が工学、海洋学などで有名です。またハワイ大学は日本ともなじみが深く日米文化の接点として期待されております。

大学の内容

各大学、学部にそれぞれ特色がありますが、日本と比較し有益と思われる学部及び特徴の著しい学部を幾つか示します。

(1) TESL (Teaching English as a Second Language)

現在、将来とも英語教師をなさる方には最適プログラムの一つです。詳しくは他の方が述べられると思いますので代表校のみ(別表2)に示します。

(2) MBA (Master of Business Administration)

近年アメリカにおいても非常に人気があり競争率も高い学部です。卒業学部を問わず入学でき、アメリカならではの学問と言えましょう。(別表1)

(3) SOCIAL WORK

アメリカにおいて社会福祉は専門職としてかなり發

達しております。日本ではまだまだのようですが将来性のある学問と思われます。(別表2)

(4) WOMEN'S STUDY

これも特徴のある学問の一つで各種の事象を女性の立場から見るとというものです。主に学部レベルです。

(別表2)

(5) JAPANESE

多くの場合、Asian Study Language の中に入っています。他とは異なり、学部としてはほとんどなく一部を除き講座がある程度です。比較的充実している大学を(別表2)に示しました。

(6) REHABILITATION

事故や病気による身体障害や言語障害に対する機能回復及び社会復帰を目的とした医学の重要な学問の一つで、アメリカはかなり進んでいるようです。(別表2)

そのほかでは、生化学、宇宙工学、図書館学、映画、看護学、秘書学などあればきりがありません。

奨学金

留学生の奨学生といふとすぐフルブライト奨学生やハワイ大学東西センター奨学生が考えられますが、これらを得ることが大変難しいのはご承知の通りです。しかしながら各大学にはそれぞれ独自の奨学生があり、上記のものよりはるかに可能性が高いのです。一般に Fellowship, Scholarship, Assistantship の3つがありますが他にも種々あるのが普通です。

- I Fellowship: 大学院生対象。学費と生活費の双方。
- II Scholarship: 学部・大學生対象。授業料の免除など。
- III Assistantship: 大學生対象。助手として何らかの仕事をすることにより授業料免除と生活費の一部支給など。

具体例としてミシガン州立大学を掲げて示します。全部で約280の奨学生があり、金額・条件ともかなりバラエティに富んでいます。以下に Scholarship, Fellowship, Assistantship の一例を示します。(現文のまま)

SCHOLARSHIP

There are the major scholarships for beginning freshmen. Applicants are automatically considered for all of these programs, except the Creative Arts Scholarship, when being considered for financial aid.

*Alumni Distinguished Scholarships

The Michigan State University Development Fund has set aside a sum of money derived from alumni contributions for the purpose of granting scholarships. Students must rank at the very top of

their graduating classes and demonstrate superior talent and achievement at a high school level. The most outstanding applicants for this award are selected to take a competitive examination at Michigan State University. The awards apply to freshmen, and are renewable until graduation. The stipend is \$2,600 a year for Michigan residents and \$3,600 a year for non-residents(to allow for the higher fees for non-residents). There is no financial need requirement.

FELLOWSHIP

More than 900 graduate fellowships were held by Michigan State University graduate students for the academic year 1975—76. Stipends and sources of support vary widely. In addition to applying for fellowships offered by the University and through the University by outside agencies, students are encouraged to apply for any outside sources of funds for which they may be eligible.

*Grosse Pointe Garden Center Scholarship

For graduate students in horticulture. The stipend is \$500. Preference is given to doctoral candidates in financial need. Nominations are made by the Department of Horticulture and the final selection by the Grosse Pointe Garden Center.

*Latin American Research Fund

For graduate students specializing in Latin American research in the Department of Geography. Recipients are designated by the Secretary-Treasurer of the Fund.

ASSISTANTSHIP

More than 2,500 assistantships in various fields are available to eligible graduate students. Assistantships are often available in certain departments during the summer months, but most appointments are made initially on a nine-month basis. Graduate assistants must be actively pursuing degrees.

The following levels of assistantships are available:
***Graduate Assistants, Level 1**

These graduate students have the bachelor's degree and less than one year's experience as graduate assistants. They teach, do research, or are assigned such supervised assistant's duties as reading and grading paper.

*Graduate Assistants, Level 2

These graduate students have the master's degree and/or one year's experience as graduate assistants. They teach, do research or perform administrative tasks with moderate supervision. Advancement from Level 1 to Level 2 is usually routine upon completion of the master's degree, or one year of experience at Level 1.

ミシガン州立大学の奨学金で日本人が対象のものは限られますぐ、自分に合ったものを申請すれば許可される場合もあります。

また、アラスカパシフィック大学から私に来た手紙の一部を示しますので参考として下さい。

Here at Alaska Pacific University students from abroad have an unique opportunity. This university has scholarships available which reduce tuition to about \$800.00 per year. In addition, it is possible for a student to earn most of their tuition (\$800.00) and living expenses (about \$3,400) through employment in practical training. This type of part-time degree related employment is approved by the U.S. Immigration Office. The University also has two full tuition scholarships available per country. Since the university offers its own English as a Second Language program, an applicant is not required to submit a TOEFL Test score.

コミュニティ・カレッジ

前文までは、大学・大学院について述べましたが、ここではアメリカの短大とりわけコミュニティ・カレッジについて述べます。

日本の各種学校と短大とを併せた内容を持つコミュニティ・カレッジは、大体「職業コース」「進学コース」「成人コース」の3コースより成立っており、留学生は「職業コース」か「進学コース」に入ることになります。どちらの場合も費用は安く、内容も充実したものが多く、見直してみる価値があります。外国人留学生の入学を制限している場合もありますが短大の多くは、種々の制約・困難を越え留学生を歓迎しております。進学の場合、多くは同州内の大学に編入するようです。

留学希望者で4年制大学では長過ぎる方や、実用的専門知識を望んでいる方には、一考の余地があると思われます。

通信教育

アメリカの大学の通信教育は、その国土の広さと相まって非常に発達しております。必要単位数の何%かを認めている大学からほとんどの単位数を認めている大学まで多種多様です。通信教育の利用にも賛否両論があるようですが、過大評価することなく利用すれば価値あるものと考えられます。

次に、代表的通信教育の一つであるユタ州のブリガムヤング大学のプログラムを示します。同大学の通信教育部は、アメリカ有数のものの一つです。コースは Col-

lege, High School, Adult High School, Leisure Learning の4つに分かれています。College Courseでは、BA や AA の取得も可能ですが主眼は各科目的勉強にあります。科目も300以上ありほとんど履修可能です。また授業料は、1 単位 \$28.50 で 1 単位増す毎に \$26.50 加算されます。1 教科 3 単位とすると航空便とテキスト代を含め約\$100です。また、大学院のプログラムもシラキュース大学をはじめ幾つかあり、それぞれの目的に合せて選択・利用されれば有益だと思います。

大学集中英語講座

近年日本人の生活向上の反影で、英会話修得や外国生活体験や単なる旅行まで含めて留学が盛んです。これらの多くは、カリフォルニアでの英語集中講座に参加しているようです。一部疑問もありますが長い目で見た場合、日本人の国際性の向上に役立てばと期待しております。しかし日本人ばかりの中で生活していたのでは無意味なのは言うまでもありません。一口に英語集中講座と申しましても内容、構成など千差万別ですので、自分に適したものを有効に利用すればかなりの効果が期待できると確信いたします。下記に具体的に示しますが、なにぶんにも紙面に制限がありますのでご了承下さい。

(A)英語講座終了後、短大に編入したい方……

Gadsden State Junior College, Kirkwood Community College, etc.

(B)英語講座と並行して大学の正規授業を聴講したい方…
University of Southern California, Webster College, etc.

(C)英語講座終了後、同大学の学部・大学院に編入したい方……

Arizona State University, Utah State University, etc.

(D)英語講座終了により単位取得を希望される方……

University of Denver, Tulane University, etc.

(E)英語講座だけをより集中的にやりたい方……

Southern Illinois University, Ohio Wesleyan University, etc.

(F)気候のいい西海岸でじっくりやりたい方……

San Francisco State University, University of California, Davis, etc.

(G)有名大学の夏期英語講座を受けたい方……

Harvard University, Yale University, etc.

(H)すでに入学先の大学が決まっている方で入学前に英語の brush up をしたい方……

本人の希望により決定する。

大学の名のみにとらわれず、日本人の少ない良心的プログラムを持つ大学を選ばれることをおすすめします。半分以上が日本人（極端な所では80%以上）では、英語修得さえ厳しいと言わざるをえません。

アメリカの大学における外国人留学生は、原則として留年が許されないため、特に最近では英語集中講座と学部出席の併用を許可している大学へ行く人が増えております。自信がつくまでこの方法で一部単位を取得するには、英語ばかりの勉強をするよりも良いと思います。

ま と め

本人に能力・やる気があるのに誤解などでの失敗は、

(別表 1)

AGRICULTURE & FORESTRY

1. Cornell U.
2. U. of Wisconsin, Madison
3. Iowa State U.
4. Michigan State U.
5. Purdue U.

BIOLOGICAL SCIENCES

1. Harvard U.
2. U. C. Berkeley
3. U. of Wisconsin, Madison
4. Stanford U.
5. Yale U.

CHEMISTRY

1. Harvard U.
2. U. C. Berkeley
3. Stanford U.
4. C. I. T.
5. M. I. T.

ECONOMICS

1. Harvard U.
2. M. I. T.
3. U. of Chicago
4. Yale U.
5. U. C. Berkeley

EDUCATION

1. Stanford U.
2. Ohio State U.
3. Indiana U.
4. U. of Illinois, Urbana
5. U. of Wisconsin, Madison

ENGINEERING

1. M. I. T.
2. Stanford U.
3. U. C. Berkeley
4. U. of Illinois, Urbana
5. U. of Michigan

ENGLISH & LINGUISTICS

1. Yale U.
2. Harvard U.
3. U. C. Berkeley
4. U. of Chicago
5. Princeton U.

FOREIGN LANGUAGE

1. Yale U.
2. U. C. Berkeley
3. Harvard U.
4. U. of Wisconsin, Madison
5. Princeton U.

HISTORY

1. Harvard U.
2. Yale U.
3. U. C. Berkeley
4. Princeton U.
5. U. of Wisconsin, Madison

LAW

1. Yale U.
2. Harvard U.
3. U. of Chicago
4. Stanford U.
5. U. of Michigan

MATHEMATICS & STATISTICS

1. U. C. Berkeley
2. Princeton U.
3. Harvard U.
4. Stanford U.
5. U. of Chicago

MEDICINE

1. Harvard U.
2. Stanford U.
3. Yale U.
4. Johns Hopkins U.
5. U. C. L. A.

MUSIC

1. Indiana U.
2. U. of Rochester
3. The Juilliard School
4. U. of Michigan
5. U. of Illinois, Urbana

PHILOSOPHY

1. Harvard U.
2. Princeton U.
3. U. of Michigan
4. U. of Pittsburgh
5. U. C. Berkeley

PHYSICS

1. U. C. Berkeley

2. C. I. T.

3. Harvard U.
4. M. I. T.
5. Stanford U.

POLITICAL SCIENCE

1. Harvard U.
2. Yale U.
3. U. C. Berkeley
4. U. of Michigan
5. Stanford U.

PSYCHOLOGY

1. Stanford U.
2. U. of Michigan
3. Harvard U.
4. U. C. Berkeley
5. Yale U.

SOCIOLOGY

1. U. of Chicago
2. U. C. Berkeley
3. Harvard U.
4. U. of Wisconsin, Madison
5. U. of Michigan

BUSINESS

1. Stanford U.
2. Harvard U.
3. U. of Chicago
4. U. of Pennsylvania
5. Northwestern U.
6. U. of Illinois, Urbana
7. U. of Texas, Austin
8. M. I. T.
9. U. C. Berkeley
10. U. of Michigan
11. U. C. L. A.
12. Columbia U.
13. Michigan State U.

*これは大学教授による分野別評価の結果で4,000名以上の大学教授が各自の専門分野で最も優秀と判断した大学をあげたものです。よい教授をもつ大学・学部が必ずしも良いとは言えないまでも、一つの基準にはなると考えられます。

(別表 2)

TESL

Boston State C.
Columbia U.
Georgetown U.
Lehman C.
Rutgers U.
St. Michael's C.
San Francisco State U.
Southern Illinois U.
State U. of New York
U. of Arizona
U. C. L. A.
U. of Hawaii
U. of Illinois
U. of Minnesota
U. of Puerto Rico
West Chester State C.

REHABILITATION

Auburn U.
Bowing Green State U.
Calif. State U., Fresno
Cornell U.
Eastern Montana U.
Emporia State U.
Hofstra U.
Kent State U.
Mankato State U.
New York U.
Northwestern State U. of Louisiana
San Diego State U.
Seton Hall U.
Stanford U.
State U. of New York, Buffalo
Syracuse U.
U. of Arizona
U. of Arkansas
U. of Central Arkansas
U. of Cincinnati
U. of Northern Colorado
U. of Pennsylvania
U. of Pittsburgh
U. of Tennessee at Knoxville
U. of Texas at Galveston
U. of Wisconsin, Madison
U. of Wisconsin, Milwaukee
Virginia Commonwealth U.

Wayne State U.
West Virginia U.
Wright State U.

SOCIAL WORK

Adelphi U.
Catholic U. of America
Columbia U.
Howard U.
Ohio State U.
Rutgers U.
Smith C.
U. C. Berkeley
U. C. L. A.
U. of Illinois, Chicago
U. of Iowa
U. of Missouri
U. of Pennsylvania
U. of Pittsburgh
U. of Southern Calif.
U. of Utah
U. of Wisconsin, Madison
Yeshiva U.

JAPANESE

Brigham Young U.
Calif. State U., Los Angeles
Columbia U.
Earlham C.
Georgetown U.
Indiana U.
Monterey Inst. of Foreign Studies
Ohio State U.
San Francisco State U.
Stanford U.
U. of Arizona
U. C. L. A.
U. of Chicago
U. of Colorado, Boulder
U. of Hawaii at Manoa
U. of Iowa
U. of Kansas
U. of Massachusetts, Amherst
U. of Michigan
U. of Minnesota
U. of Oregon
U. of Pennsylvania
U. of Pittsburgh
U. of Texas at Austin
U. of Washington

U. of Wisconsin, Madison
WOMEN'S STUDIES

Barnard C.
Douglass C.
Goddard C.
Governors State U.
Henderson State U.
Hobart and William Smith C.
Hunter C.
Illinois State U.
Indiana U.
Jersey City State C.
Mills C.
Mundelein C.
New England C.
Northeastern Illinois U.
Quinnipiac C.
Richmond C.
San Francisco State U.
State U. of New York
Towson State U.
U. of Alabama
U. C. Berkeley
U. C. Davis
U. C. L. A.
U. of Colorado
U. of Georgia
U. of Hawaii
U. of Illinois
U. of Kansas
U. of Kentucky
U. of Maryland
U. of Massachusetts
U. of Michigan
U. of Minnesota
U. of Nebraska
U. of New Mexico
U. of Pennsylvania
U. of South Carolina
U. of South Florida
U. of Utah
U. of Washington
Wichita State U.

(フリーダム・プランニング

チーフ・カウンセラー)

OUR ENGLISH SONGS 1, 2

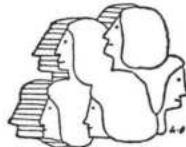
ELEC 編 テキスト各 1,100円
教師用書各 1,600円
録音テープ 1—全 3 卷, 2—全 4 卷
各巻 2,000円

アメリカ・イギリスでよく歌われ、世界中にひろく知
られている歌の中から、英語を学ぶ日本人に必要な歌
156 曲を厳選し、楽譜と美しいさし絵をふんだんに入
れた楽しい歌集。

なお英語の歌の指導をする方のために、伴奏楽譜と詳
しい歌詞の注釈・背景知識・指導手順についての解説を
付した教師用書が用意されています。

ELEC (英語教育協議会)

ある英語教師の とある小さな夢



佐 藤 栄 一

1976年暮から1977年春にかけて、カナダの平原を一気に吹き抜けた北極からの冷たい風は猛威を振った。オンタリオ湖、エリー湖の上で更にその冷気を募らせ、ニューヨーク州西部は、まさに氷に閉ざされ、なす術を知らなかつた。バッファローの町は2月に入って周辺都市から3週間にわたり、完全に孤立させられた。凍死者6名を数え、ついに運転禁止令さえ出されたのである。

朝のうちは一寸先も見えない吹雪が町全体を襲い、重苦しい北の街の空気が私の部屋を圧した。日中はきまつて眩いばかりの太陽が、幾層にも積み重なった雪の上に照り輝き、僅かばかりの淡い希望を与えていた。何事にも大味なかの国のこと、午後ともなると、たちまちにあの希望の陽は分厚い灰色の雲の彼方に去り、再び冬将軍の世界となってしまう。この無気味なじまを時折破るのはユニバーシティ・オブ・バッファローの日本語の学生、あるいは、私の指導したバレーボール・チーム、デラウェア・パー7男女チームの若者達の訪来で、彼らは数キロの道を、髭を凍て付かせてやって来る。彼らのポケットには、きまつてバーボンやワインがしのばせてあった。お陰で、私の部屋もサントリー・オールドやキリンビール、はては月桂冠の中ビンまで、きらすことはできなかつたし、時折妻の送ってくれる「さきいか」は、彼らのお目当ての一つでもあった。

日本語教師として渡米したのは1976年6月。ヴァーモント州、プラットトロボローの国際体験学校のキャンパスで、ケニアから、フランスから、あるいはルクセンブルグ、スイス、アルゼンチンから来た若い教師達と研修を重ね、着任地ニューヨーク州バッファローに着いたのは8月の末。ハンガリー人修道士達の経営するカラサンクチャスという私立学校が私の主たる着任校であった。修道院の一室を与えられ、食住に金を費やす必要もなく、月々渡される450ドルの金は、かなり楽な生活を保障してくれた。しかし、私の場合は恵まれた例であり、他の仲間達は、450ドルで部屋代その他を支出せねばならなかつたという。

恵まれたということに触れるならば、私の滞米に対する学校当局（聖ドミニコ学院）の措置そのものであつた。1年間、海外研修取り扱いであり、ボーナスを除く給料の80パーセントは月々私の留守家族に支払われた。中学・高校の教師にとっては6か月から1年に亘る研修となると、極く稀な例を除外して大半は休職、最悪の場合は退職しての実現であると聞いている。更にしばしば私が耳にするのは、よしんば理想的な形で海外研修が行なわれたとしても、帰国後、学校の事情から、あるいは本人自身の事情から転職を余儀なくされているという事実である。

国際社会の一員として、むしろ指導的な役割さえ果たしているわが国の英語教員養成の施策としてはあまりにもお粗末だといわなければなるまい。少なくとも最低6か月の海外研修に対して、学校もしくは教育委員会は、しかるべき積極的な配慮をなすべきであると思うし、研修後の教師自身、自らの研修の成果がある程度の定着をみるまでは当該校で職責を果たすべきであると考えるのである。

こうした実情を基として、1年間の海外生活を経験した一英語教師が、わが国の英語教育の中で指導的役割をはたす関係者に、ささやかな見果てぬ夢を提言したいのである。

昨今、諸事情を考慮して、文部省は、英語教員の海外派遣の枠をかなり拡げたと聞く。これはまことに結構なことであり、関係者の大英断に惜しみなき拍手を送りたい。問題はその人選である。私は諸般の事情から、公私立を問わず、国内に多数の英語教師の仲間がいる。海外研修に推せんされたという喜びの手紙に接する半面、自分は地方の、その筋の人とは折り合いが悪く、おそらくそうした機会は与えられないと嘆く人の数も思っている以上に多いのである。しかも、惜しむらくは、かかる人々の中にこそ、時代を荷う英語教師としての資質高い人々が多く居る事実を何とすればよいのであろうか。折角の英語教員再教育のプログラムである。日本の、あまりに

も日本的人脈による推せんは極力これを排し、文部省直轄の全国共通第一次選考（ペーパーテスト及び面接）を実施し、しかる後に最終選考がなされるべきであると思う。各都道府県の全英語教師に等しく機会が与えられるべきと思う。

一方、私学の立場であるが、これも又、私学研修所を中心として、以前に比べ、かなり積極的な方策が打ち出されてはいるものの、全国私学への情報伝達の面で未だしの感がある。しかも、幸にインフォーメーションに接したとしても、正直のところ、金がなければ参加は出来ないというのが実情ではあるまい。文部省のそれに比して、かなり困難は予想されるが、もう一つ、財源の確保と工夫が必要と思われる所以である。

以上述べたことは、現状の海外研修に関しての意見であるが、これは主として中堅教師のためであって良い。研修の主力は若手教師、就職後1年ないし3年位の教師達に対して向けられなければならない。彼らに対しては6か月から1年間の海外研修の機会を与えるべきである。これを実現するためには、文部省を中心として、公私立の共通の場となる機関の設立が望まれる。この機関によって、慎重に選出された若手教員は英語を母国語とする國の、しかるべき大学で *Teaching English as a Foreign (or Second) Language* に関する再学習の講座、自らの英語力を改善する講座、そして、外国人に日本語を外国語として教える機関のパートタイマー、この3つの柱を通じた研修を体験するのである。一見困難な計画のようであるが、アメリカ、あるいはカナダの日本語教育に目をやる時、決して実現不可能な夢物語りではない。特に日本語を外国語として教えるという体験は、やがて、自らの英語教育に与える影響大なるものがある。私自身、その体験をなし、今なお、自らの英語教授法改革と確立への熱意は大きい。更に教師であることの立場は、特にアメリカにおいては、甘やかされた生活は出来ないことを意味する。日本的な modesty が、やや困惑を与えるながらもなお容認されるのは、学生もしくは研修員である限りであり、いったん教師といふ社会的立場をとれば、かの地の人々と全く同格である。sense of competition に支えられた一般市民の中で生活をするには、「発言しなければ損をする」「わからなければ聞く」ことの重要性を実感することが出来よう。自ら、生ぬるい英語を捨て、生きるための英語を身につけなければならなくなる。そこでは、英語とはまさしく“Language is one of the most effective tools of communication that man has ever created.” なのである。「文学作品が読める英語で良い」とか「新聞が読めて、手紙が書ければ良い」といった主張が如何に片寄りの英語教育論であるかが理屈ぬきで実感されるというものである。

バッファロー滞在中、かなり多くの研修旅行に来た日本人教師のお世話をした。残念ながら communication という点では英語教師程乏しい族はないという現実に遭遇したのである。その理由はまさに J. Kirkup 氏が彼のエッセーの中に指摘するところである。“This is sometimes because they have nothing to say and are poor conversationalists even in Japanese: in order to talk, one must usually have something to talk about! But often their lack of fluency in English is the result of a kind of false modesty: they are unwilling to ‘show off’ their knowledge of English in front of other Japanese. Or they simply fear to make mistakes, and this fear prevents them from expressing themselves fluently.” 英語教師であるが故に、他の人々より一層、この fear が大きくなるとしたら、何と哀しき日本人英語教師であることよ。私たちよりも新しい英語教育の洗礼に浴した筈の若い教師達の英語を話す能力のお粗末さに驚いている昨今、一層私の夢は募るのである。英語教師は就任と同時に月2千円から4千円の掛け金で20年満期の海外研修保険なるものに自動的に加入するというのはいかがなものであろうか。

アメリカへの研修旅行へ出掛ける方々に、よく何を持って行ったらよいか、何を見たらよいか等と聞かれるのだが、私の答えはいつも一つである。「No preparation is the best preparation.」ただひたすら、そこで見たこと、体験したことを、そのまま、しっかりと胸に収めていらっしゃい。」

チャイコフスキーの「悲愴」が耳もとを流れている。まさしく、雪のバッファローの私の部屋にいつも流れていたその曲である。私の想いは、あの北の国バッファローへと馳せるのである。最近またニューヨーク州へと招へいされているが、残念なことにわか家の経済はそれを実現する余力はいまの所ない。

いつの日か、再びかの地に立つ日は来ると思う。しかし、その時、私が此の地での英語教師たり得る保障はどこにもないのである。

(聖ドミニコ学院高等学校教諭)





英國語学留学

合田さつき

1978年5月5日、28歳の誕生日の前日に、私は再び英国へ向かう飛行機の中にいた。北京を過ぎると、やがて眼下に茶褐色の砂漠地帯が地図を広げるように見えて来る。ようやく飛び立ったのだという実感がわいてきた。終業式の壇上で教え子らに向けて言ったことばが思いだされる。自分はイカロスになってしまってよいから飛び立ってみたいと。

勤続5年間の学校を去るにあたっては、随分迷った。一枚の紙切れの辞表がなかなか出せなかった。5年は私にとって長い年月であった。力量不足の私は精根尽き果てた気がしていたが、社会的に安定した職を捨てて宙ぶらりんの状態になるのが恐ろしかった。が、前年の夏、ELEC 主催の海外研修旅行に参加した際、イギリスのどこかな田園風景を見ながら、「自分はこれまでなんとあくせく生きてきたのだろう。今回の研修はこれで終わりだが、私はもう一度近いうちにこの上地に戻って来よう。」と固く心に誓ったことを思いおこし、3月のある日神田の British Council で留学の資料を調べようと思って入ったビルの階を間違えて、International Language Centre のオフィスを訪れてしまったのである。前年の研修も ILC のものであったこともあり、そこでいとも簡単に留学の手続きをとってしまった。とりあえず、2ヶ月間イギリス南岸の街ヘイストンズに滞在し、その後ケンブリッジかオックスフォードへ行き、秋には帰国して再度東京都の教員採用試験を受ける予定で、1年間有效的の往復の航空券を買ったのである。

そんないきさつも、飛行機が雪で覆われたヒマラヤ山脈の真上を飛んでいる頃には、もうどうでもよかった。

ヒースローの入国管理は思ったより以上にきびしかったが、私は、希望した4ヶ月の滞在許可だけはもらえた。

これから行く初めての家庭や学校に対する不安はあったが、2度目の渡英なので目的地まではなんとか行ける自信があった。そういうわけで、道中、同じ飛行機で来た19歳の男の子に頼りにされてしまった。

チャーリングクロスを発った列車が放牧風景を走り抜け、急に目の前が開けてドーバーの海が見えてきたときの感動は今も忘れない。下車駅ヘイストンズに着いたときの印象は、まさにイギリスの“熱海”という感じであった。起伏のある土地に軒を並べて家が建っている。ここはリゾートタウンであったが、この時期はまだ一般的な観光客はあまりなかった。

街のほぼ中央にあるアレクサンドリア・パークは南北に長い公園で、学校の帰りは一小時間程かけてこの公園を抜けて帰宅したものであるが、5月の初めは八重桜、そして大きなマグノリアの木の花がとりわけきれいであった。それから石榴花、やがて6月に入りバラが咲き始めるのである。公園の中でリスを時々見かけるが、よく人に慣れていて、ビスケットなどを見せてとそばに寄ってくるものもいる。5月の初めの天候は typical English weather で、曇りがちでうすら寒い日が多くかった（ストーブの要る日も多い）が、それも苦にならないほど、私はこの街が好きになり、1週間もたたないうちに、たった2か月でここを去るのはもったいないと思い始めたものだ。

さて、ホストファミリーの方は、訪ねて行くと、玄関で暖い握手で迎えてくれた。ジーンと御主人のフィリップ、それに2歳の坊やマシューである。もうすでに温かい夕食の用意がされてあった。イギリス料理が悪評高いことは後になってわかることがだが、奥さんの作ったビーフのワインソース煮は美味しかった。メインディッシュのあと、sweets はボリュームがあり閉口したが、とにかく残さずいただいた。ジーンに食事の量はこの位でよいかと問われ、曖昧に頷いたので、以後ずっとこの sweets で少々苦しむことになった。

隣家にステイしている日本人のショーア子と、バスで丘を越えて、海辺に面した学校へ通うことになった。停留所で降りて歩いて行く道ながら、ショーア子が、「イラン人の姿が見えてくると、もうすぐよ。」と言った。果たして International House の学生は、イラン人と日本人

とで半分以上を占めていた。

簡単な試験を終えて入ったクラスは、advanced classで、日本人は私を含めて3人、それに、スイス人1人、ノルウェー人1人という少人数クラスだった。そして3人の先生に三様に教えられた。毎朝30分受け持ったリチャードは、主にBBCニュースに関するoral practice、担任のマーチンは、文法、作文、討論、発音、その他を担当し、テスは、講読、語法などを指導してくれた。授業料は、週25時間、4週間で£160位であったと記憶する。授業料が倍以上もするIHのexecutive courseと生徒数は変わらないし、優秀なスイス人がいたせいか、内容的にもレベルが高かった。この2か月は、家庭生活も、学校生活も、充実していた。

結局、ヘイスティングズ滞在を延期することになるのだが、後半の思い出はあまりよいものではなかった。まず、7月に入り、ヨーロッパ大陸から夏休みを利用して若い学生がどっと押し寄せて来、私達のクラスも一気に10人余りの大世帯になって、授業内容が低下したこと(教授陣も全員入れ替わった)。ホストファミリーも、2か月しか契約ていなかつたので新しい所へ移ったが、あまりよい待遇を受けなかつたこと(食事のまづき、入浴制限などの節約を強いられ、また、御主人がshift workに従事しているので、物音等に気をつけなければならなかつた)。そんなわけで、イギリスの生活や英語の勉強だけという学校生活にfed upしてきたのであるが、退職までして渡英したことを考えると、帰るに帰れず、そのままズルズルと英国滞在を延長してしまうのである。

クリスマスも近くなつた頃、パーティで知り合つた人が、ロンドンのThe Polytechnic of Central Londonという公立学校に、Cambridge Proficiencyのコースがあることを教えてくれた。Cambridge Proficiencyは、ケンブリッジ大学が主催する英語の検定試験で、毎年、6月と12月に実施され、結果にはA,B,C,D,Eのgradeがあり、C以上が合格と規定されている。(尚、その下の段階のFirst Certificateの試験も行われている。)試験を受けようという気持はあまりなかつたのだが、英国滞在を延ばすには最低週15時間学校へ通わねばならず、そして、私立学校の授業料は長期滞在にはあまりに高かつた。そういうわけで、このポリテクニック(PCL)のfull-timeの入学試験を受け(週15時間のpart-timeのコースには空きがなかつた)、週25時間、1月から6月までのコースを取つた。授業料は、一括払い、約£300だったと思う。クラスに登録してある学生数は30人程いたが、實際でてくるのは半分位であった。内容的にはもうひとつぱつしなかつたが、とうとう1年間有効の帰

りの航空券も無にして、そのままイギリスに残り6月の試験を受ける羽目になるが、案の定、2か月後には不合格の通知を受けるのである。“Pass”ならもうけものという位の気持で受けたものの、やはり“Fail”的4文字を見るのは口惜しかつた。

試験はPaper I, II, IIIとOral testからなり、Paper Iでは3時間でComprehension 1題とComposition 2題、Paper IIでは1時間15分でvocabulary 40題とcomprehension 2題(いずれもmultiple choice)、Paper IIIではgrammar, usage, comprehension、それにdaily Englishに関する出題、Oral testではhearingとinterviewがある。通常日本人は、短時間で解答しなければならないPaper IIを最も不得意とするが、Paper Iのcomposition(各350字前後)も平生から訓練しておかないと、fluentにまとめられない。私の敗因も、御多分にもれず、主にこの2点にあったと反省している。

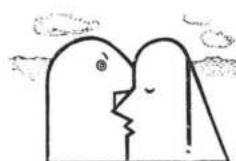
9月からは、full-timeより充実していると聞くpart-timeのコースに移り、再度12月の試験を目指すことになる。担任のMrs. Goodingは教職に就くために生まれてきたような女性で、面倒みがよく、毎日山のように宿題を出してくれた。私も、小学生に戻つたように、発破をかけられようやくエンジンがかかつたようであつた。そして、1月からは、Mrs. Goodingのおかげで、試験の結果を待たずにCambridge Diploma Course(授業料は、週15時間6か月で£320)に入れてもらえた。このコースはpart-timeで、主に文学を研究する外国人のための2年間のコースである。2年が終わると6月に卒業試験があるがProficiencyをB以上で通っていないと受験資格がない。先生はgrade Aはbilingualに近いが、grade Bは努力次第で、日本人にも充分可能性があると言わたが、實際は大変難しいことが、自分のことはさておいて他人の例をみてもわかる。

そして、今、私はこのコースの1年目を終了し、夏休みを利用して一時帰国という形で日本の生活にどっぷり浸つて『英語展望』に寄稿の筆を走らせてゐるのである。

(1980年11月6日)



ハワイ大学留学記(1)



消えたホームシック

日野 信行

私は現在、ハワイ大学大学院の Department of English as a Second Language (ESL) に留学しています。ハワイに来て 2か月半になります。日本では東京学芸大学大学院の英語教育学科に在籍しています。実は私の学部（大阪大学）における専攻は法学でした。半年前に法学部を卒業したばかりです。法学部の人間がなぜ英語教育をやることになったのかと驚かれる方が多いと思いますが、その詳しい話はまたの機会にさせていただくことにします。

とにかく私は阪大法学部在学中に東京学芸大学、筑波大学、大阪教育大学の大学院英語教育コースを受験し、運よくそのすべてに合格して念願の道にはいることが出来たのでした。それと同時に国際文化教育交流財団（経団連）の留学奨学生試験にも合格し、留学への道が開けました。そこで私は、「まず東京学芸大学大学院に進学し、半年後に休学してアメリカ留学」という計画を立て、ハワイ大学、ミシガン大学、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、ジョージタウン大学の M.A. program に apply してみました。そして幸運にも、すべての大学院から合格通知書をもらうことができたのです。

さてこの 4つの大学院のうちどこに留学するか、選択に大変苦労しましたが結局、独立した英語教育学部を持つハワイ大学に決めました。英語教育の linguistic aspects に関する講座だけでなく、pedagogical aspects に関する講座も充実している点が魅力でした。また、日本人の多いハワイなら日本の英語教育に密着した研究ができるのではないかという期待もありました。

私は一歩も外国に出た経験がなく、はじめての海外旅行がこの留学でした。お恥ずかしい話ですが、到着直後にはちょっとしたホームシックにかかってしまいました。着いた日にさっそくハワイ大学のカフェテリアで食事をしてみましたが、まわりは当然アメリカ人。グループでみんな楽しそうに話をしながら食べています。なんだか寂しくなってきました。ハンバーガーがのどを通らなくなりました。

日が暮れて、下宿の窓からホノルルの夜景を眺めていると無性に日本に帰りたくなりました。こんなことでこれから 1年も 2年もやっていけるのだろうかと心細くなりました。そこへ隣の部屋のラジオから流れてきたのがビートルズ、おなじみの曲を聞くとなぜかほっとしました。

次の日にキャンパス内にある郵便局に行くと、東洋系の実にかわいい女の子が応待してくれました。毎日切手を買おうと決心しました。銀行に行くと、またまたエキゾティックで美しい女性。毎日預金をしようと決心しました。ホームシックは早くも雲散霧消です。

授業が始まると友達もたくさんできて、孤独感は無くなりました。ハワイ大学といつても大学院生の多くは mainland 出身です。アメリカ英語のいろいろな dialect が聞けてなかなか楽しい。また、私の属する ESL の学生の多くは、すでに現場で教えた経験のある人々です。したがって年齢層もけっこう高く、22歳の私は例外的な存在です。最年少でしかも外国人の私には誰もが親切にしてくれます。日本で教えたことのある人もかなりいて、よく日本の話に花が咲きます。日本人は私のほかにあと 2人。ふたりともアメリカの大学の degree を持っています。留学生もアジアを中心に、マレーシア、香港、インド、フランスなど、各国から来ています。

さて授業の話ですが、幸い阪大で米人客員教授のクラスをたくさんとて、アメリカ式の授業のやり方には慣れていたので、まごつくことはありませんでした。現在、Syntax と Phonology と TESL (Teaching English as a Second Language) を受講しています。

Syntax を担当している Danny Steinberg 教授は、かつて広島大学で教えたことのある人です。授業の内容は変形文法の入門講座。基礎的なものなので、今のところさほど困難は感じません。うわさに聞いていた通り、アメリカ人学生は実によく質問します。日本では考えられないようなにぎやかなクラスルームです。

Phonology の Robert Krohn 教授は、英語テキスト

のベストセラーのひとつである *English Sentence Structure* (University of Michigan Press) の著者であり、私の advisor でもあります。授業は音声学の入門講座。Native speakers と一緒に音声学の授業を受けるのはなかなか面白い体験です。

たとえば先生が「[l] と [r]」の大きな違いのひとつは、[l] の場合は舌が歯ぐきにつくが [r] の場合はつかない。自分で発音して確かめてみなさい」と言う。アメリカ人学生は自分で発音してみて、「あっ本当」とか言って感心しています。舌の意識的な訓練によって発音を身につけた non-native speaker の私からみると、アメリカ人学生のこういった反応は興味深いものです。

Ted Plaister 教授の TESL は、この M.A. program の中心をなす授業です。Plaister 教授は TESOL (Teachers of English to Speakers of Other Languages) の主要メンバーであり、また滞日経験もあります。英語教授の諸問題に関する講義ですが、日本人に英語を教える場合の問題点がよくトピックにのぼります。ハワイなら日本の英語教育に役立つ勉強ができるのではないかという私のねらいはどうやたら的中したようです。とにかく知日家が多い。たとえば先日は Kenneth Jackson 教授と、日本の英語教育の歴史に関して議論をしました。Jackson 教授はかつて同志社大学の助教授をつとめた人です。

9月末には ESL Department の研修旅行がありました。これはなかなか勉強になりました。まず学んだことは、アメリカ人は本当にジョークが好きだということです。特に学科長の Richard Day 教授と前述の Krohn 教授は名コンビで、バスに乗るときからもう大騒ぎです。Day 教授がいちばん最後に乗りこんできたのですが、もう満員で座るところがありません。そこで Day 学科長は幹事の Krohn 教授に向かって、「金返せ。座席がないぞ」とわめきます。Krohn 教授は少しもあわてず、「あんたは chairman なんだから自分で chair を用意すべきだ」と応酬。終始こんな調子です。

この研修旅行には日本語学科の David Ashworth 教授が参加。Silent Way と Suggestopedia を使った日本語教授法を実演しました。実に興味深いデモンストレーションでした。Community Language Learning の実演もあり、ドイツ語・フランス語・日本語などいくつかの部会に分かれて行われました。日本語を担当したのは English Language Institute の所長である日系人の Mrs. Steinberg。私も少し counseling のお手伝いをさせていただきました。生徒の中には Jacobs-Rosenbaum の変形文法テキストで有名な Roderik Jacobs 教授もまじっ

ていました。

英語教育の諸問題についての討論会もありました。ここで私は思いきって問題を提起してみました。「日本の英語教育の現場では、今だに旧態依然の Translation Method が主流である。この現状をどう分析すべきか。」日本で教えたことのある教授や学生を中心に、いろいろな意見が出されました。それまで低調だった議論がにわかに活気を帯びてきました。

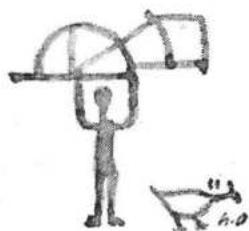
実はこの訳読式教授法の問題は私の最大関心事なのです。Translation Method はその使い方によっては有効な教授法となりうると思います。しかし日本のクラスマームでは、訳が理解のための手段でなくそれ自体目的となってしまっていることが多いようです。この結果、学生たちは「英語は常に日本語に訳すべきもの」という観念を無意識のうちに植えつけられてしまっているようです。これが彼らの英語力の進歩を著しく阻んでいるように思います。私はこれが残念でなりません。

さて、留学生はいわば民間の外交官でもあります。日本のイメージをよくするため、私も微力ながら努力しようと思います。とりあえず ESL の参考図書室の委員と、週1回開かれる ESL のミーティングの organizer を引き受けました。

ひとつ非常にうれしいことがありました。実は日本を発つ前に、私はラジオの「百万人の英語」という番組に出演を要請され、録音を済ませてきました。内容は、私が留学試験の TOEFL でどうやって650点をとったか、その勉強法についてしゃべったものです。國弘正雄先生との対談でした。しかし放送は9月ということでしたから、せっかくの自分の放送は聞けないものとあきらめっていました。ところが9月の終わりごろ、同じ下宿に住む日本人のラジオが偶然日本の短波放送、それも「百万人の英語」をキャッチ。私に知らせてくれました。私の録音は4回に分けて放送されたのですが、その最終回の前日でした。次の日私は、自分の出ている日本のラジオ放送をアメリカで聞くことができたのでした。実に幸運でした。いつもながら歯ぎれのよい國弘正雄先生の声に統いて、あほ丸出しの自分の声が聞こえてきたときは感激しました。

(ハワイ大学大学院在学)





アメリカの人種と民族(Ⅲ)

國 弘 正 雄

アメリカの人種と民族について、さいきん、当のアメリカとここ日本で、それぞれ興味ぶかい書物が出ました。

このテーマへの関心が高まっている証左とみられ、本稿を手がけてきた私としても、ほんとうに嬉しく思います。かつてある高名な日本の社会学者が、これから社会諸科学的一大共通目標は、民族性——国民性とややルーズにいってもよいでしょう——の実態とその由つて來たる所以を明らかにすることにある旨述べておられましたが、そういうことなのでしょう。

といつても本稿は限定的な目的に留まります。

アメリカ英語について、より彫りの深い立体的な理解をと目指しておいでのお読者を対象に、それに必要な限りの知識を、それも市井のアメリカ人の一般常識の範囲内で、*ephemeral literature* からの生きた用例を数多く掲げることで、ご紹介しようというわけです。

あまりに学問的だったり、街のアメリカ人の常識のわくを大きく越えるような専門的な事項は、原則として取り上げないつもりでいます。

逆に本稿で言及する程度のことは、大学卒業程度のアメリカ人なら、だれしもが知っている、とお考えいただいてよいでしょう。

それではこの2冊について簡単にご披露し、あわせて関連事項について私見を述べておこうと思います。

その1冊は実はまだ手にしておらず、紹介記事を近着のニュース雑誌で見てさっそく注文、その到着をいまや遅しと待ちかねているところです。

それはハーヴァードの歴史学教授 Stephan Thernstrom——ちなみにこの姓は北欧系、とくにスエーデンのそれです——が編者となって、同大学出版部から刊行された *Harvard Encyclopedia of American Ethnic Groups* という名のものです。『アメリカ民族集団事典』とでもいいましょうか。

とにかく1千頁を上まわる大冊で、値段は60ドル、ただし1980年いっぱいは45ドルの特価だそうです。

編者の Thernstrom 教授によれば、本書はアメリカ人とはなんであり、彼らもしくは彼らの祖先の出自はどこであるかを知るための手引き書で、類書ではなく、“we all need it.”のこと。

私の知る範囲でも、このテーマに関する事典的なものはまだ世に問われてはいないので、ユニークな参考書に違ひなかろうと、披見できる日をたのしみにしています。

編者によると、この作業をスタートするにあたっては、50か60くらいの ethnic group から成り立つアメリカ、というのがおよその通念だったんだそうです。でもいざ蓋を開けたところ、驚くなれ106にも達したのですが、この106という数字ですらが、些意的（ということは暫定的で内輪）なものだろう、ということです。

一つの国が最低106の民族集団からでき上っているというのは、少なくとも日本との比較では、めくるめく程の多様性で、melting pot, tossed salad, mosaic といづれの喻えを選ぶにせよ、この多様性というポイントに着目することなしに、アメリカとは何であるかに十分な回答を出すことなどできません。

ただ、ethnic group という概念が適確な定義のむずかしい、すこぶるつきの難物であるのは事実で、現にこの事典を紹介した『タイム』誌の記事も、次のようにいっています。

Part of the problem was that nobody has an airtight definition of what an ethnic group is. Basic differences of national origin, race and language are clear enough. But sometimes groups are distinguished from one another by other characteristics, such as food preferences or political affiliations in the homeland. As Sociologist Milton Gordon suggests, ethnicity may mean nothing more precise than "a sense of peoplehood." (Time: Oct. 6, 1980, p. 47)

(大意：困難の一端は、ethnic group とは何であるかについて、誰一人として水も洩らさぬ精緻さで定義しえて

ない点にあった。なるほど出身国や人種や言語次元での基本的な相違ははっきりしている。

でも、どんな食物を好むかとか、元の国でどのような政治集団に属していたかなど、の諸特色で区別がつく場合もないではない。

社会学者のミルトン・ゴードンも指摘するように、*ethnicity* というのは、せいぜいがある一つの人間集団が、感覚的に自分たちを「同一だと捉えている」という程度の、しょせんは曖昧なものなのかも知れぬ。)

いずれ本稿でも、*ethnic* という形容詞——ときには名詞にも転用されます——がどのような collocation や文脈で使われているか、実例をどっさり紹介することで、アメリカ人の民族集団の受けとめ方やその混在の実体をご理解ねがうつもりでいます。

実例にまさる説得力はないと思われるからです。

いま一つ、*Time* の同じ記事は、アメリカにおける*ethnicity* がどれほど重要な要素であるとしても、アメリカ化の契機の方がより重要だったとしています。積分化的のモメント、つまりは例の make the strange familiar——馴化と仮訳しておきました——の方向性の方が、微分化のモントより重い、というのです。

以下に原文を引用しておきます。

The encyclopedia's underlying premise, says the introduction, "is that *ethnicity* whether good or bad, has been and remains important in the American social fabric." Even so, Editor Thernstrom notes, "the assimilative powers of this society have been fantastic. The notion of being an American has had a powerful hold." (Time: Oct. 6, 1980, p. 47)

(大意：同事典の底を流れる基本的な前提は、前書きもいうように「アメリカ社会の構成要素の中で、*ethnicity* というのは善きにつけ悪しきにつけ重要性をもってきたし、それはいまも変わらない」という認識である。

とはいっても、編者によれば「この社会のもつ収斂志向にはおどろくべきものがあり、アメリカ人であろうとする思いは、彼らをしっかりと捉えてきた」のである。)

アメリカ化という収斂契機を重要視するか、それとも文化的多元主義——pluralism というのは最近の流行語です——に力点をおくかは、そういうがいに割り切れぬ大きなテーマで、各地域、各民族ごとの精査を必要とするようです。アメリカの標語が、あとで実例をご披露するように *e pluribus unum* (=one out of many), であることはご存じでしょうが、多様性つまりは *pluribus*

に重きを置くのか、單一性、*unum* に重きをおくのか、にわかには決めがたいのです。

それだけにこんごとも、大きな課題として残りつづけるものと思われます。

ところでいま一冊は、日本放送出版協会から出た『アメリカ民族集団』という書物です。文化人類学的研究とサブタイトルされており、筑波大学の綾部恒雄教授の編になります。

アメリカを構成する各民族集団が、たとえば Black is beautiful——黒人の場合は従来の定義に従うかぎり人種集団というべきですが——とか、Yellow Power という表現が示唆しているように、独自のアイデンティティーを求めては、自己主張をはじめ、とかく多元論に赴きがちなのが、いまのアメリカの風潮です。

この風潮を受け、日米の人類学や民族学の第一線にある計 7 名の研究者が、それぞれの集団内部に入りこみ、4 か月にわたって実証的な野外調査を行ない、それを文献的書斎科学的に補ったのがこの仕事で、労作というのまさにこのようなものをこそ指すのでしょうか。

内容は地味ですが学問的なレベルは高く、扱われている民族集団は、ポーランド系、スペイン=メキシコ系、黒人、イタリア系、ユダヤ系と多数にのぼります。

とくに巻末の、アメリカの民族集団、と題された座談会は、日本側の 5 人の研究者が、日本人によるはじめてのアメリカ社会の人類学的フィールドワークに際し、どういう苦労にぶつかり、どういう問題点に気づかされたかを、具体的に生々しく語った点、これだけでも一読の価値があります。

かつて今世紀最大の社会学者といわれるデビッド・リースマン（ハーバード大学）教授は、私に、日本の社会科学者がアメリカを野外調査することの必要と意義をくりかえし力説されたものです。あれは 1961 年の冬、雪の降りつもった New England は、ニューハンプシャー州ハノーヴァー所在の、ダートマス大学のキャンパスを一緒に散歩した折のことでした。

私が、Americana について用例収集をはじめ、これをカード化するきっかけはかくして与えられたのでしたが、私事はともかく、5 人のすぐれた第一線研究者がこれだけ精緻な実体調査をなしとげ、大冊に纏められたことに吾がことのような喜びを覚えるものです。

3,500 円と、いささか値段がはるるのが難ですが、アメリカ論ないしはアメリカ英語の背景や文脈を、人種民族問題とのからみで深めていくことを望まれる方々は、ぜひ一本を手許におかれようつよくお薦めします。

記述も一部専門的ですが、総じて readable で、とにかく勉強になるのです。

ところでこの本の数ある知見の中で、一つ興味ぶかく驚きにたえるのは、外国からの移住者がアメリカ化する過程で、一番かんたんに落ちるのが言語である、という事実です。

これは、イタリア系やポーランド系移民においてとくに顕著な現象らしいのですが、ことばに強い関心をもつお互いにあっては、正直いって驚かされる事実です。ガッカリなさる向きもおありかも知れません。

ことば以外の諸要素はもっと生きのびやすいのに、ことばは比較的あっさり消滅してしまう、というのですから、言語学徒や英学生にとっては心おだやかでないものがあります。

でも、移民が old country のことばを早くなくしてしまうのは、ことばのはたす役割の大きさを証明するのかも知れません。一日たりとなしで済ませないものだけに、新しい環境にあわせて、アメリカ英語を身につけることに懸命にならざるを得ないためにこそ、イタリア語（なりポーランド語なり）は2代3代と時が経つごとに泡のようにはじけとんてしまう…。こういう推論も成り立つうのではないでしょうか。

アメリカが、少なくとも比較的さいきんまでは、共通語としての英語教育に重点をおき、old country の言語を忘れさせるよう組織的意識的にしむけてきたことも、いま一つの原因といえましょう。

Bilingualism の必要が教育の場で真剣に取り上げられ、それへの評価が高まったのは、ごく昨今のできごとのことです。

それはとにかく、綾部恒雄教授は言語のもつ凝集性（の妙なさ）に関し、他の諸要素との比較において、次のように述べておいでです。

昭和54年11月15日の『朝日新聞』夕刊への寄稿から一部引用させていただきます。

民族のアイデンティティーの構造をこのように分析してみた結果みられた特色のひとつは、アイデンティティーとの関係における宗教=価値体系の強さと、言語のもろさであった。言語は食事の習慣や民族組織体への加入率よりも早く崩れていくものであるらしい。異民族との通婚は、相互に同じアメリカ人であるという国籍上の共通項を有していても、なお障害となっていることが多かった。

このようにみると、民族のアイデンティティーの構造は、私の分析した右の5項目に関する限り、価値観、

食物、婚姻、社会組織、言語の順に保守=凝集性をもっているということがほぼいえそうである。言語や食物に関して固有のものをほとんど残していないアイルランド人を結びつけているのは、アイルランド系カトリック教会の存在と、子どものしつけをも含む伝統的価値観である。

言語よりも宗教的信条や食文化などのほうが生きのびやすい、というのは、それ自体おもしろいテーマを提供してくれます。

宗教については、日本人はとかく宗教音痴のかたむきがあります。日本が世界でもっとも早く、しかも徹底的に世俗化（secularize）した社会であること、日本が外部世界に門戸を開き、彼らの文物の吸収につとめたときには、当の欧米自体すでに（ニーチェもいったように）「神は死んで」、科学的な世俗の価値や機構が上り坂にあったのとは逆に、既成宗教はその勢威を弱めていたこと、それに、神仏習合など、よくもあしくも日本人が昔から宗教的に寛容（もしくは無関心）を通してきましたことなど、いくつかの理由から、欧米流の宗教という定義にしたがうかぎり、日本人の宗教音痴ぶりには相当なものがあります。

それだけに、大新聞ですらが、新教の聖職者を神父、その礼拝をミサ、とあやまり呼ぶなど、宗教にヨワイ日本人といつても、過言ではないようです。新教と旧教の差異にすら昏いとするなら、ユダヤ教とキリスト教、さらにはイスラム教との相互関連などは、日本人の常識を大きく超えるといえそうです。

その、われわれがとかく苦手な宗教が、アメリカにあってはいまだに大きな意味をもち、外国人移民がいつまでも母国から受けついで信仰や儀礼を保ち残している、ということになると、よほどの意識的な努力を払わないかぎり、この苦手を克服できないことになります。

それだけに本稿では、民族集団と宗教とのかかわりについて意図的にかなりのスペースを割くつもりにしています。

他方、民族集団ごとの飲食物の嗜好については、さいきんの日本ではかなり知識が拡がっているようですし、食文化（food culture）ということばが一般化していることからも察せられるように、食物やその材料、加工法、分布などをもって文化の重要な一環とみなす文化人類学的なみかたも、ずいぶん普及しました。

同じことは飲料品に関してもいえます。

本稿は、飲食物と民族集団とのかかわりについても触れています。幸い、食べることに興味があり、食文化

を知的関心の一部とする私は、この分野についても相当量の用例をもっていますので、ご紹介にはこと欠かない筈です。

何しろ、たとえばニューヨーク市の市長選の立候補者が一週間のメニューを発表、金曜日を肉なしデーとしてもっぱら魚料理を食することでカトリック教徒のご機嫌を伺うほか、月曜から日曜まで、それぞれ各民族集団の伝統的な食餌を摂ることで、それぞれの ethnic group から one of us だと思わせるべく、涙ぐましい努力を払うあの国のことです。

そんなメニューを食品名ごとに具体的に描いた用例もあります。

きっと楽しんで、しかもアメリカの人種と民族について、多くを知っていただけのことと、いささか自負しています。

さてアメリカが *e pluribus unum* というラテン語をその標語としていることはすでに触れました。多数中の統一、ということです。

実はこの手の国はアメリカ以外の国にもしばしば見られるので、インドネシアもそうです。

あの国の独立以来のモットーは、インドネシア語で、ビン・ネカ・トルガル・イカ、といい、これは多様性の中の統一、という意味です。一方、インドの憲法は、ひとつの国民・言語への統一、を国家目標として明記しています。かつての自豪主義のオーストラリアも、いまでは1,450万の人口のうち、350万が戦後の移住者という位で、多民族多文化国家になっています。

日本のような高度の単一性が、世界的には例外でしかないこと、それだけにわれわれの常識が、国際的にはしばしば不常識——あえて非常識とはいいますまい——であることを、痛い程知らされます。

それはとにかく、このラテン語のモットーを、79年現職としてはさいしょにアメリカを正式訪問したいまの法王さまが、スピーチの中で何回となく引用、アメリカ人の一体性を説いたことが思い起こされます。

たまたまその時アメリカにいた私は、ふかい感銘を受けたのでしたが、以下の引用例をごらん下さい。

He wanted to speak as an evangelist about the unity of the Catholic church, he said, but also about the unity of the American people. For all their diversity, all their multifaceted complexities, Americans have had a common purpose, the pope said: "One nation formed of many people, *e pluribus unum*." Three times he gave that Latin refrain to sum up

his understanding of the meaning of America, and ended that part of his message by saying:

"Again *e pluribus unum*: you became a new entity, a new people, the true nature of which cannot be adequately explained as a mere putting together of various communities."

So, too, he said, is the Catholic Church "composed of many members and enriched by the diversity of those making up the one community of faith."

(*The Washington Post*: Oct. 6, 1979)

(大意：統一体としてのカトリック教会について、宗教家として語りたいのだ、と法王はのたもうた。そして、アメリカ人についても同じ次元で語りたいとして、多様性の大きさと、多面的な複雑多岐さにもかかわらず、アメリカ人が共通の目的を抱いてきた事実を指摘された。

「多くのくにびとから成る一つの国民、これがアメリカなのです」と法王は例のラテン語の標語を三たびくりかえすことで、ご自身が理解なさっている限りのアメリカの意義を要約されたのだった。

そして、いま一度例のラテン語の成句を引き「皆さんのが新しい存在、新しい国民となったことの本当の意味づけは、単にいくつかの地域社会を物理的にいっしょにした、ということでは説明しつくせないので」と述べ、アメリカについての発言部分を手じまいされたのである。

そして再びカトリック教会に言及、「多くの信者から成るカトリック教会は、信仰は一つでありながらその構成要員のもつ多様性のおかげで、それだけ豊かな存在となった」と述べられた。)

いかがでしたか。

なおこのラテン語のモットーは、法王さまやカトリック教会の占有物ではありません。お手許のアメリカ硬貨をごらんになれば、この文字がちゃんと刻まれてあるのに気づかれるでしょう。

もちろん多様性は必ずしも統一を生むとはかぎらず、むしろ混乱や矛盾の母胎になりかねません。なにせ最低106の ethnic group というのですから、気が遠くなるほどです。

はたせるかな Walt Whitman(1819-92) はその *The Leaves of Grass* の "Song of Myself" の中で、いみじくもこう誦っています。『草の葉』が公刊された1855年というと、南北戦争の勃発を6年後に控え、ようやく物情騒然としてきたころでした。

Do I contradict myself?

Very well then I contradict myself.
I am large, I contain multitudes. (51)

(大意：われは矛盾なりや
げにわれは矛盾なり
その身巨きく、多くを含むがゆえに)

一方、故ケネディ大統領のように、多様性を世界大で追求していくことをその理念とした指導者もありました。

歴史家のシェレシンジャーは次のようにケネディを特長づけます。

Wilson was the great champion of the self-determination of small nations, Franklin Roosevelt the great enemy of Empire, John Kennedy the eloquent advocate of a world of diversity.

(Arthur M. Schlesinger, Jr.: *The Passing of the Superpowers*, p. 53)

(大意：威尔逊は小国による民族自決の偉大な旗手であり、フランクリン・ローズベルトは帝国主義の巨大な敵対者であり、ジョン・ケネディは多様性から成る世界の、雄弁な唱導者であった。)

現に、浅野輔教授もその R. ヒルズマンの名著『ケネディ外交』のすぐれた訳者まえがきで、ケネディ外交の特質は、多様性の追求にあった、と断じておられます。

アメリカのもつ多様性について的一般論はこれで打ち止めとして、まず人種の多様性について話を進めていくことにします。

人種という概念については、すでに第1回の本稿で触れておきました。

本来、あいまいな概念であること、そしてそのあいまいさ、非科学性、もあって、たとえばヒトラーのような男に悪用されたこと、ただし人類学や人種学の通念としては、ヒトをその生物的肉体的特色で分類するときに用いられるものであること、ヒトは3大（もしくは4大）人種に分けられ、30近くの亜種を立てることもあること、日本人と（たとえば）朝鮮人は、同じ蒙古人種ないしは黄色人種に属するので、日本人の朝鮮人に対する偏見や差別に人種的という名を冠するのは厳密には正しくないこと。

だいたい以上のようなことをすでにご説明したように思います。

ただえて脱線してかくなら、日本語におけると同

様、アメリカ人も race ということばなり概念をややルーズに、民族などの意味で用いることはあるので、科学的な厳密さをいつも期待できると思うとアテがはずれることはたしかです。

次の用例はこのあたりの事情を明らかにしてくれます。

They were peopled by so-called new races—Irish, French, Italian, Polish, some Jews and Eastern Europeans, and Negroes.

(Paul Hackett: *Obscenity Trial*, p. 9)

(大意：それはいわゆる「新人種」——アイルランド系、フランス系、イタリア系、ポーランド系、若干のユダヤ系と東欧出身者——と黒人で占められていた。)

このような誤用ないしはルーズな使い方は別として、race もしくはその派生語の racial, racism などがもともひんぱんに用いられるのは、やはり黒人、つまり Negroid に関するです。蒙古人種——アメリカ・インディアンやわれわれ東洋人——についてもこれらの用語が適用されてしかるべきなのですが、実際は比較的稀です。やはり総人口の1割以上を占める minority の中の多数派、黒人と、文学どおり少数派の minority とでもいうか、全部足しても総人口の1%に充たない蒙古人種とのちがいでしょうか。

では race とその派生語が黒人に関して用いられている実例をいくつか掲げ、ご一緒に検討しようと思います。

まずは南部のコチコチの黑白統合支持論者の発言です。

I speak for the majority. The Caucasian and the Negro have never been integrated in our land. Racial segregation is, and has been since the founding of this country, a pervading characteristic of American life. In the South this is accomplished by social separation of the races; elsewhere it is accomplished by their geographical separation and other devices which are not always acknowledged.

(“Race in America: The Conservative Stand” by William J. Simmons in *The Search for America*, edited by Huston Smith, p. 54)

(大意：私は多数派の声を代表して意見を述べているのだが、コーカソイドと黒人とがこの国で統合したことなど、たえてない。建国このかた、人種的な分離こそがアメリカの普遍的な特色だったので、それはいまも変らな

い。

南部では白人種と黒人種を分けることでこれが実行されているが、南部以外の地域では地理的に分けるとか、それ以外の手立てが講じられている。にもかかわらず、その存在は必ずしもありて認められてはいない。)

つまり北部などでは、事実上の (de facto) 分離や差別は敵存するのに、皆がみてみないふりをしているだけだ、というのです。

この保守主義者はまた次のようにも申します。うそぶいている、というべきでしょうか。

If Washington, D.C. wants to adopt an integrated school system that runs white families out of the District, it's their business. If the big cities of the North want political machines based on irresponsible, purchasable bloc votes, it's their business. If they wanted to integrate with buffaloes on the western plains, it would still be their business. We might have our opinions, but we'd keep them to ourselves.

But if we in the South want to have a bi-racial social system, that's *our* business.

(*Ibid.*, pp. 60-61)

(大意：もしワシントンが黑白共学を採用、白人家族をワシントン特別区から追い出したいなら、どうぞご勝手に。北部の大都市が、無責任で買収に応ずるような集団票の上に、自分たちの政治機構を作り上げたいというのなら、これまたご勝手にだ。)

そして西部の平野部で、仮りに野牛との統合というのであれば、これまたご勝手にといいたいところだ。もちろんわれわれにも言いたいことはあろうが、自分たちの胸にとどめておくつもりである。

でも、南部に2人種並存の社会組織を作りたいというわれわれの希望については、他人のおせっかいは一切ご免蒙る。)

挑戦的な言辞ではあります。でも、南部は南部で、地域の人々の意志でことを動かしていくのがアメリカ流の草の根民主主義 (grass roots democracy) なので、遠くはなれたワシントンの連邦政府の容喙など、民主主義の破壊にしかつながらない、というのがあの国の保守主義者の考え方だったのでした。

なおさいきんに至り、この手の保守主義がまたぞろ息を吹きかえしつつあるのは、ご存じのとおりです。

ところで保守派の白人が黒人ととの共学に頑強に抵抗してきた一つの理由は、血の純潔が失なわれるのではとい

う怖れだった、といいます。これはシュレシンジャー教授（前出）の説ですが、性的にますます早熟化しつつあるいまのアメリカでは、故のない怖れとは言い切れぬのかもしれません。

同教授は、アメリカの黒人解放運動は、黑白共学よりもむしろ投票権の確保に焦点をあてるべきであった、そうすれば雑婚 (miscegenation) への恐怖をかきたてることもなかったのに、と述べていました。

もっともこの説も、公民権 (civil rights) 運動が大きな成果をあげた今日では、いまは昔、ということかもしれません。

でも「お前は自分の娘（なり妹）なりを黒人にめあわせるか」というのは、差別論者が差別反対の白人によく投げかける科白として、どれほどリベラルな白人でも、にわかに Yes とはいがたい、というジレンマがあるのです。黒人とかなんとかいうのでなくとも、結婚というのはやはり似たもの同士がうまくいくので、不釣合は不縁のもとですからね。英語ではこれを like-to-like, and age-to-age などといいます。

以下の用例はそのあたりの機微を伝えてくれます。

"Nan, I ought to go in there and say to that ol' colonel, 'You wants me to go back south, eh?' and he says, 'That's right, boy,' and I says, 'You gonna let me vote?' and he says, 'That's right, boy, vote all you want, just so long you don't cast no ballots,' and I says, 'You gonna let me marry yo' daughter —"

(Chester Himes: *Cotton Comes to Harlem*, p. 80)

(大意：そうだ、俺があそこにいってあのオッサンに「南部に戻らせたいんだろう」といったら、「そうだその通りだ」っていう。

そしたら「じゃ投票所に行かせるか」って聞いてやるんだ。そしたら「ああ、行きたいだけ行けや。投票さえしなけりゃな」っていいやがる。だから「あんたんとこの娘を嫁っこによこすか」といってやるんだ。)

黒人と白人の老大佐——ただし Southern Colonel とか Kentucky Colonel とかいって南部ではしばしば名誉称号——とのやりとりを、黒人が勝手に想像、独りごちているところです。

投票所に行ってもいいけど、投票はするなよ、というのはむろん意訳ですが、往時の南部の voter registration のひどさを思い出させます。

「ホワイトハウスには窓がいくつあるか」というような質問を出され、政治学の学位をもった黒人までが、知

的に投票権を行使できる能力なしと判定され、有権者として認めてもらえなかった、というたぐいの実話は珍しくもなんともなかったからです。

いま一つ、白人が黒人排除のときに採用する表現をいくつか。

And the reasons for both defensive reactions and extreme solutions are symbolized by remarks such as, "They're taking my job," "They're moving next door to me," or, "Do you want your daughter to marry one?"—extremely effective sentences because they can be personalized.

(Harry Kitano & Daniel Okimoto:

American Racism, p. 9)

(大意：言いわけがましい反応と、極端な解決策がなぜ出てくるかの理由については、「連中はおれの仕事を取ろうとしている」とか「すぐとなりに引っ越してきやがった」とか「娘をあの連中のところに嫁入りさせたいか」というたぐいの発言に象徴されている。

一般論でなく、個人個人にかかるだけに、この手の科白はものすごい効果を生むのである。)

ついでながら南部では異人種どうしの結婚はmiscegenation という名で卑やしめられ、州法によって禁止されてきました。おどろくべきことですが、白人の純血という例の論理が背後にあったといえます。

In Virginia, as in 15 other states (the number was once as high as 30), there is a law barring white and colored persons from intermarrying. The Lovings could have avoided the sentence simply by leaving the state, but they eventually decided to fight the Virginia anti-miscegenation law "on the ground that it was repugnant to the 14th Amendment." In rare unanimity, all nine Supreme Court Justices agreed last week that is was repugnant indeed.

(Time: June 22, 年代ページ不明)

(大意：ヴァージニア州は他の15州——かつては30州の多さにのぼった——と同様、白人と有色人種との通婚を法律で禁じている。ラビング一家もこの州を離れさえすれば判決を逃れることができた。だが、彼らはヴァージニア州の異人種通婚禁止法に挑戦することを決意した。憲法修正第十四条と不整合、との理由によってである。

めったにないことだが9人の最高裁判事は先週、全員一致で彼らの訴えを認め、憲法修正第十四条との不整合を言いわたした。)

いま一つ、われわれ非白人にとては不愉快きわまりないことばですが、mongrelization というのがあります。人種間の通婚の結果、雑種化し、劣等化する、ほどの意味で、むろん劣悪になるのは白人、という前提です。

以下は日系人について用いられた例です。

The general Anglo attitude towards the Japanese-American personality was expressed in a 1920 hearing before the Senate Committee on Immigration and Naturalization, when the then Senator Phelan stated that "Japanese are an immoral people... (who lead) California toward mongrelization and degeneracy."

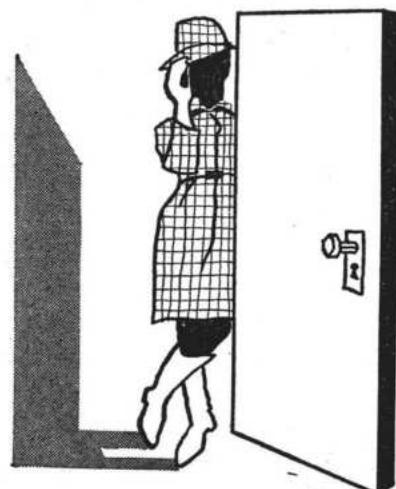
(Dennis Ogawa: *From Japs to Japanese*, p. 13)

(大意：日系米人に対する白人の一般的な態度は、1920年の上院の移民・帰化委員会でのフェラン上院議員（当時）の以下の発言に集約されている。「日本人というのは不道徳な連中で、カリフォルニアを雑種化と退廃に向わせようとしている。」)

排日運動が、レーガン次期大統領ゆかりのカリフォルニアを中心に燃えさかったときの話です。

はたしてこの手の prejudice や bigotry がまたぞろ息を吹きかえすことはないのか、とかく浪高しを伝えられる日米関係だけに、こちらとしても息をひそめて見守りたく思うのです。

(国際商科大学教授)





漱石のロンドン（その8）

22. パリの万国博覧会

漱石が留学期間中に経験した出来事の中で、当時の世界の動きと直接つながるものが少なくとも4つあった。今回はそれらを取り上げてみよう。

まず最初は、ロンドンへ来る前、パリで見てきた万国博覧会である。今から10年前の1970年に大阪で開催された「万博」と同じもので、1851年にロンドンで開かれたのが第1回であるが、それはヴィクトリア女皇朝の大英帝国の繁栄を全世界に示したものであった。その後、ロンドンでもパリでも何回か開かれた。1862年のロンドン万国博では初めて日本物産の展示場が設けられ、たまたま条約改訂のため訪欧中の幕府の竹内使節団一行（この中には福沢諭吉もいた）が開会式に列席した。1867年のパリ万国博には、將軍名代として徳川昭武が正式に訪れている。1889年のパリ万国博の際にはエッフェル塔が建てられた。そして、漱石たちが見物したのは、1900年を祝賀して、4月14日から11月3日まで開催されたもので、36か国が参加、入場者は4,700万人を越えたという。漱石は会期も終り近い10月22, 25, 27日の3回会場を訪れている。

その会場で漱石が何を見、何を感じたかは明らかではないが、アメリカ人ヘンリー・アダムズ（1838～1918）にとっては、この博覧会が彼の世界観を変えた。物理学者のS.P. ラングレーの案内でダイナモ（発電機）を見た彼は、来るべき20世紀には「人類は、世界を爆破することによって、自殺をするかもしれない」（『ヘンリー・アダムズの教育』第25章）と予感した。人間は神を放逐することによって力の拡散をつづけ、ついにダイナモに象徴される多様なメカニズムの世界に直面するにいたった。その前に立って、人間は専門家にしか分からぬ力の世界に立ちすくむ無力な存在になるほかないのではないか。

伊村元道

漱石がこれから2年間を過ごそうとしている西ヨーロッパは、このような懷疑と絶望の中にあった。そして、アダムズの予言は十数年後の第1次世界大戦で現実となる。

23. 南アフリカ戦争の帰還兵

パリを去ってドーバーを渡ると、そこはヴィクトリア女王治世の最後の年のイギリスであった。実際それは、60年以上にも及ぶ長い長い治世であった。それを福原麟太郎氏は2期に分ける、「1870年以前の英國と、それ以後の英國である。明治以来、われわれの慕いあこがれた紳士の國はその前半の英國なのである。後半の英國は、いろいろの社会的・思想的矛盾や破綻に悩み苦しむ英國だ。それをどうにかヴィクトリア朝は持ちこたえていた」（「ヴィクトリア女王の長い治世」）

国外に目を向ければ、ユニオン・ジャックに太陽の沈むことなし、と全世界にまたがる植民地を誇ってきたが、それも次第にイギリスの独壇場ではなくなり、ヨーロッパ列強の植民地分割の焦点は今やアフリカにあった。フランスはサハラ砂漠を通る横断計画を、イギリスはエジプトを起点とする縦貫鉄道による南進・北上政策を進めていた。北上を目指す南アフリカのイギリス人はオランダ系移住者の子孫であるボア人と衝突する。1881年の第1次ボア（南ア）戦争では英軍が大敗を喫した。（Boerはボア、ブーア、ブルーなどとも書く。）

1899年から第2次ボア戦争が始まっていた。英軍は再び大苦戦であった。マフェキングという所で英軍が包囲されたが援軍の到着によってやっとのことで救われた。1900年5月18日のことである。5月28日にイギリスはオレンジ自由国の、9月3日にはタンスヴァール共和国との併合を強引に宣言したが、戦争は1902年まで続く。漱石がロンドンに到着した翌日、10月29日の日記に「……倫敦市中ニ歩行ス。方角モ何モ分カラズ。且ツ南



晩年のヴィクトリア女王

亞（南アフリカのこと）ヨリ帰ル義勇兵歓迎ノタメ、非常ノ難踏ニテ困却セリ」と書いているのは、この戦争からの帰還兵の出迎え風景であった。

24. ヴィクトリア女王の崩御とその葬儀

ヴィクトリア女王が崩御されたのはそれから3か月後の1901年1月21日であった。21日の日記に漱石は「女皇危篤ノ由ニテ衆庶眉ヲヒソム」と書き、22日には「The Queen is sinking.」と新聞の見出しをそのまま写す。この日午後6時45分逝去、皇太子はロンドン市長に対して、「敬愛してやまない母君、女王陛下は、只今、子孫に見守られながら、昇天されました」と通告する。セント・ポール大聖堂の弔鐘が2時間にわたって打ち鳴らされ、悲報はただちに全世界に伝えられた。こうして長い長い彼女の治世は終りをつけた。

これより3年前の1897年、在位60年祭の行列を見に行ったチップス先生には、「あの伝説的な老婦人は、さながら崩れ落ちそうな木製の人形のように馬車に乗っていましたが、それが女王御自身と同じく、終焉の時期が迫っている数多くのことを象徴しているようで印象深かった」。（J. ヒルトン『チップス先生さようなら』第10章、菊池重三郎訳による）亡くなったとき女王は「81歳、その治世は63年に及び、今までの英国王のどれよりも長かった。退屈するほど長い治世であったとは言ひなが

ら、国民はこの大女王の崩御に肅然とした」と福原氏は書いている。

以下、漱石の日記からこれに関する記事を拾う。

1月23日 昨夜6時半女皇死去ス at Osborne. Flags are hoisted at half-mast. All the town is in mourning. I, a foreign subject, also wear a black tie to show my respectful sympathy.

“The new century has opened rather inauspiciously,” said the shopman of whom I bought a pair of black gloves this morning.

1月24日 Edward VII �即位ノ Proclamation アリ。(新国王はすでに60歳、漱石の4番目の下宿のあったトゥーティングに今王の大きな立像が立っている。
——引用者)

1月26日 女皇ノ遺骸市内ヲ通過ス。（これは新聞の女王葬儀の行列の予定を報じた記事を、漱石が取り違えたものらしい。）

1月28日 昨日ハ女皇死去後第1ノ日曜ニテ、諸院（教会のこと）皆 Handel の Dead March (葬送行進曲ならべートーベンかショパンであろう) ヲ奏シ、muffled tolls of Bells (消された鐘の音) ヲ響カス。コノ夜モ鐘声シキリナリ。

2月2日 Queen の葬儀ヲ見ントテ、朝9時 Mr. Brett ト共ニ出ズ。… Hyde Park ニ入ル。サスガノ大公園モ人間ニテ波ヲ打ツツアリ。園内ノ樹木ミナノ実ヲ結ブ。ヨウヤクシテ通路ニ至ルニ、到底見ルベカラズ。宿ノ主人余ヲ肩車ニ乗セテクレタリ。ヨウヤクニシテ行列ノ胸以上ヲ見ル、柩ハ白ニ赤ヲモッテオオワレタリ。King, German Emperor ナド従ウ。

当時の新聞記事を調査された出口教授によると、葬列はヴィクトリア駅から、ビカデリー通り、ハイドパーク・コーナーからパーク・レインを北上し、エッジウエア・ロードからバディントン駅へと進み、そこから列車でウィンザー城へ向かい、葬儀はそのセント・ジョージ教会で行なわれることになっていた。

したがって、ハイド・パークも樹木に人が鈴なりになっていたのは東端のほうで、日記にある「通路」はパーク・レインだったはずで、その葬列通過時刻は12時15分と予定されていた。

葬列には、王様が5人、馬に乗って供奉していた。新王エドワード7世の後は、甥にあたるドイツ皇帝ヴィルヘルム2世、第1次大戦でドイツが敗けた後、廃位され

た最後のカイザーである。

東京の友人たちにあてた手紙の中では、この日の模様を次のように報じている。

先達ての女皇の葬式は見た。ハイド・パークといふ所で見たが、人波を打って到底行列に接する事が出来ない。その公園の樹木に猿のようにのぼってた奴が枝が折れて落ちる。しかも、鉄柵で尻を突く、警護の騎兵の馬が蹴られる、大変な雑踏だ。僕は仕方がないから、下宿屋のおやじの肩車で見た。西洋人の肩車はこれが始めての終りだろうと思う。行列はただ金モールから手足を出した連中がつながって通ったばかりさ。
(2月9日付)

また、高浜虚子に対しては、2月23日付で俳句7句を寄せているが、その中に女王の葬儀を詠んだのが4句ある。

女皇の葬儀はハイド公園にて見物致し候。立派なものに候。
白金に黄金に柩寒からず

屋根の上などに、見物人が沢山居り候。妙ですな。
風の下にいろとも吹かぬなり

棺の来る時は、さすがに静肅なり。
風や吹き静まって喪の車

熊の皮の帽を戴くは何という兵隊にや。
熊の皮の頭巾ゆゆしき警護かな

こえて2月14日の日記にはこうある。

2月14日 今日ハ Edward VII ガ始メテ国会ヲ開ク、開院式デ大騒ギダ。コノ間ノ Victoria ノ葬式デ閉口シタカラ行カナイ。

25. 日英攻守同盟条約の調印

ヴィクトリア女王が亡くなった当時の首相は、3次15年にわたって内閣を率いてきたソールズベリ侯で、日本との攻守同盟条約の締結が彼の最後の仕事になった。自ら外相を兼ねることも多かったこの保守党党首の外交方針は、平和を維持しつつ帝国主義政策を推進することであったが、それもボア戦争の長期化、泥沼化によって

破綻を来たしつつあった。そこで、「光栄ある孤立」(Splendid Isolation)と呼ばれた超然主義の政策を放棄して、極東の有色人種国日本と結んだのが日英攻守同盟条約であった。

中央アジアから宝庫インドの背後をうかがうロシアに危険を感じていた英國と、ロシアの満州占領に脅威を感じた日本との利害が一致したのである。日本は最初ロシアと結ぶかイギリスと結ぶか迷ったが、結局後者を選んだ。これ以後日本は2年後の日露開戦に向かって傾斜していく。(すでに1901年4月22日の日記に、漱石は下宿の主婦が「アライヤナ、ロシヤハアンナ大キナリヲシテ、日本ト戦が出来ナイナンテ」と言った、と記している。)

条約調印までの経緯は、当時の駐英公使（当時はまだ大使はいなかった）林董（だいとう）（1850—1913）の「日英同盟の真相」にくわしい。今日林の名を知る人は少ないが、彼は司馬遼太郎氏の『胡蝶の夢』の主人公松本良順の実弟で、明治時代の代表的な外交官であった。

林は1900年2月駐英公使に任命され、漱石より少し早くロンドンに来ていた。当時のイギリスの対日感情について、林はこう述べている。

この年〔明治33年5月〕、北清事変が起り、北京の各国公使館が、団匪〔義和團〕のために包囲され、各国から救援のために出兵することになったが、当時英國は南阿戰争に忙殺されていて、極東へは思うように手が伸びず、全国の人心洶々（きょうきょう）たる折から、日本が大兵を出したということを聞いて、大いに我を徳とした。

我輩が、7月10日国書捧呈のため、ウィンゾル宮〔ウィンザー城〕で故女皇に謁見したときも、またその後バッキンガム王宮の園遊会で謁見したときも、そのつど女皇は、我が天皇陛下が、北京における災厄を救助するために尽力し給うことを感佩する旨を、こまごまと仰せられた。されば、当時英國における親日思想は、上女皇より下僻陬の人民にまで普及したと言つてもよかろう。

というわけで、漱石の次のような孤立感、疎外感は、あくまでも個人的経験、個人的感情であった、と考えておいたほうがよさそうである。

倫敦に住み暮らしたる2年は、もっとも不愉快の2年なり。余は英國紳士の間にあって、狼群に伍する一

四のむく犬の如く、あわれなる生活を営みたり。

倫敦の人口は500万と聞く、500万粒の油のなかに、一滴の水となってかろうじて露命をつなげるは、余が当時の状態なりとい事を断言してはばからず。清らかに洗い濯げる白シャツに一点の墨汁を落したる時、持主は定めて心よからざらん。

墨汁に比すべき余が乞食の如き有様にてウエストミンスターあたりを徘徊して、人工的に煤烟の雲を張らしつつあるこの大都会の空気の何千立方尺かを2年間に呑呑したるは、英國紳士のために大いに氣の毒なる心地なり。……（『文学論』序）

ついわき道にそれたが、日英同盟の交渉経過に話をもどす。林（と漱石）が英國に来た翌年、1901年4月、ロンドン駐在のドイツ代理大使から、日英独の三国同盟を結んではどうかという提案がなされた。ヴィクトリア女王の葬儀に参列するため訪英したトイツ皇帝と新英國王との間で英独同盟についての話合いがあり、今ここで日本から英國に提議があれば三国同盟が実現する見込みは十分にある、というのである。林は、これを本国政府に取り次いだ。

4月16日、林だけの責任で、日本政府に累を及ぼさないような方法で、英國政府の意向を探ることができるならば、打診してみてもよろしい、という返事が届いた。林が英國外相に会って話してみると脈がありそうである。

5月になると、伊藤内閣（第4次）が総辞職して後継首班が1か月も決まらないで、話は中絶した形になった。ちなみに、この内閣で内務省の地方局長をしていた漱石の岳父中根重一はこの政変で浪人してしまう。当時は内閣が変わると局長級まで一斉に更迭されたらしい。林のほうはそのようなこともなく、新外相小村寿太郎の下で全権を与えられ、10月からはいよいよ本格的な条約締結交渉に入る。その後も、ロシアを訪問した伊藤博文が日露協商を主張したりして元老間の意見が分かれたこともあった。英國との交渉も、韓国における日本の利益保護の条項を最後に、すべて合意に達し、1902年1月30日午後5時、英國外務省でラスダウン外相とわが林公使との間で記名調印された。

26. 漱石は日英同盟をどう見たか

林はこの功によって子爵を受けられ、2月から3月にかけて、ロンドンでも東京でもいくつか祝賀会が催された。ロンドンの在留邦人たちは公使に感謝するために記

念品を贈ることにし、漱石も一枚加わった。3月15日付の義父宛の手紙にはこうある。

日英同盟以後、歐州諸新聞のこれに対する評論一時は引きもきらざる有様に候いしが、昨今はようやく下火と相成り候ところ、当地在留の日本人共申し合わせ、林公使斡旋の労を謝するため物品贈与の計画これあり、小生も5円程寄付致し候、きりつめたる留学費中、ままかくの如き臨時費の支出を命ぜられ、はなはだ困却致し候。

新聞電報欄にて承知致し候が、この同盟事件の後本国にては非常に騒ぎあり候よし。かくの如き事に騒ぎ候は、あたかも貧人が富家と縁組を取結びたる嬉しさの余り、鐘太鼓を叩きて村中かけ回るようなものにも候わん。もとより、今日國際上の事は、道義よりも利益を主に致しおり候えども、前者の発達せる個人の例をもって、日英間の事を例えんは妥当ならざるやの観もこれあるべくと存じ候えども、これ位の事に満足致し候ようにては、はなはだ心もとなく存じ候が、如何の思召しにや。

高級官僚だった岳父への返事であるためか、漱石は珍しく真正面から天下国家を論じている。長くなるが、もう少し先を読んでみよう。

國運の進歩の財源にあるは申すまでもこれなく候えば、御申越しの如く、財政整理と外国貿易とは目下の急務と存じ候。同時に國運の進歩はこの財源を如何に使用するかに帰着致し候。ただ己のみを考えるあまたの人間に万金を与え候とも、ただ財産の不平均より國歩の艱難を生ずるおそれあるのみと存じ候。

歐州今日の失敗は明らかに貧富の懸隔はなはだしきに基因致し候。この不平均は幾多有数の人材を年々餓死せしめ、凍死せしめ、もしくは無教育に終らしめ、かえって平凡なる金持をして愚なる主張を実行せしめる傾きなくやと存じ候。幸いにして、平凡なるものも今日の教育を受ければ一応の分別生じ、且つ耶蘇教の惰性と仏國革命の殷鑑遠からざるより、これら庸凡なる金持共も、利己一遍に流れず、他のため人のために尽力致し候形跡これあり候は、今日失敗の社会の寿命を幾分か長くする事と存じ候。日本にてもこれと同様の境遇に向かい候わば（現に向かいつつあると存じ候）、かの土方人足の知識文字の発達する未来においては由由しき大事と存じ候。

（p. 54へつづく）



TWO ENGLISH DIFFICULTIES

Archibald A. Hill

Professor Emeritus, University of Texas

For the Japanese learner of English, the traps and pitfalls are easier to identify than to avoid. Some, however, are not identified everywhere, and consequently are worth speaking about, even if only briefly. One of the principal causes of difficulty is the differing rhythms of the two languages. English pulls out and greatly lengthens the forms which receive heavy stress, squeezing together the weakly stressed syllables and forms. Japanese, on the other hand has a relatively regular succession of syllables, without variation geared to stress. A Japanese speaker may be able to reproduce all the vowels and consonants of English, and still may sound strange, if the rhythm is not right.

A second difficulty not always recognized, is that sounds may be essentially the same in the two languages, but the sequences quite different. Japanese has sounds like the initial of English *wail* and a vowel like that of *pull*, but does not permit a combination like /wu-/. The result is that a catch such as one often given to American children is a major problem for the Japanese learner. Here it is:

How much wood would a woodchuck chuck,
if a woodchuck would chuck wood?

By way of explanation, a woodchuck is a wild American rodent. If the catch is perfectly pronounced, it is understandable. If the /wu-/ sequences are absent, the result is nonsense.

Here are a few recent books on language and linguistics, which seem to me of some importance. I give them in no particular order.

1. Allerton, D. J. *Essentials of Grammatical Theory: A Consensus View of Syntax and Morphology*. London and Boston: Routledge & Kegan Paul, 1979.

Not much information on phonology, but a

good guide to recent views on syntax.

2. Langacker, Ronald W. *Language and Its Structure: Some Fundamental Linguistic Concepts*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, Inc., 1967.

Langacker is one of the ablest of the followers of Chomsky, and is quite independent.

3. Robins, R. H. *General Linguistics: An Introductory Survey*. Bloomington, Indiana: Indiana University Press, 1965. London: Longmans, Green & Co., 1964. 3rd ed. London: Longman Group Ltd., 1980.

A good guide to recent British work.

4. Jacobs, Roderick A. & Peter S. Rosenbaum. *English Transformational Grammar*. Waltham, Massachusetts: Blaisdell Publishing Company, 1968.

An introduction to post-Chomskyan grammar.

5. Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech & Jan Svartvik. *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman Group Ltd., 1972. New York: Harcourt Brace Jovanovich, Inc., 1972.

An indispensable tool for written English.

6. Barnhart, Clarence L., Sol Steinmetz & Robert K. Barnhart, ed. *The Barnhart Dictionary of New English Since 1963*. Bronxville, New York: Barnhart/Harper & Row, Publishers, 1973.

A good dictionary of new words, including technical terms and slang and taboo forms.

(付記)「どのような原稿でも結構ですので、ELEC Bulletinに執筆して下さいませんか。」とお願いしたところ、快諾して下さったのがこの“Two English Difficulties”である。7月21日テキサス大学オースティン校にある Hill 名誉教授の研究室での会見記は次号で報告したい。(県立静岡女子短期大学助教授 瀬川俊一)

アメリカン・フォークロア (5)

——ユーモア話 1825年～1855年——

倉田(ダイケストラ)好子

このような暦の創作は、1829年、テネシーの山男、クロケットが国会に出てからずーっと急テンポで発展し、その伝説はますます広がっていったのである。クロケット自身、ユーモリストであり話し手でもあったが、彼は、たちまちにして、彼の登場する自伝と日刊紙に出てくる数多くの逸話の主要人物になっていった。一番良く知られているのは、酒場で飲むたびに酒代の代りにあらい熊の毛皮をやるという、おなじみのヤンキーのトリックを使ったものである。

これら笑い話の基になるものは、まぎれもなく民権党や民主党によって政治的に鼓舞された多数の新聞話に載っており、それが1830年から40年にかけて、クロケットの名を家庭内の話題にのぼらせたのである。これらこよみの話は、英雄伝説の普遍的パターンに従っていて、時たまはっきりと口伝承との関係をあらわしている。

1840年のクロケットのことよみは、「クロケット大佐や熊、つばめ (Col. Crockett, "the Bear, and the swallows")」の話をのせている。クロケットは、つばめたちは、秋に飛び去って、白いカシの木の葉がねずみの耳位の大きさになる春にもどって来る、という迷信についての議論からはじめている。彼は、つばめ達がくさった古いスズカケの木のうつろの中で、冬を過していくことをよく知っていた。ある初春に、テネシー河岸で猟をしていたクロケットは、雷のような音を聞き、スズカケの木から、つばめの大群が飛び出して行ったのを見た。様子を調べようと木に登った彼は、思わずその木のうつろの中に落ち込み、つばめの糞の山に尻もちをついた。暗やみをまさぐっているうちに、中で冬眠していた熊の毛に

さわった。そこで彼は、熊の尻尾を歯でつかみ、肉切りナイフで熊の尻を突っつき、それで熊の力を借りて、急な穴から這い上ったという。背景は、テネシーの開拓地で写実的なのが、話そのものは、ヨーロッパの民話で、熊の尾を掴んで「木の穴から出て来た男の話」に依っている。

こよみにおけるもう一つの特徴ある話は、クロケットが、ワシントンにおいて、ある上院議員にもてなされている時の話で、クロケットは、シガーを吸っていて、じゅうたんの上に、ペッペッと唾をはいていた。そこで黒人の召使は、彼が唾をはいた場所場所へと痰壺を置いて行つたが、それを見て、しまいにクロケットは、怒り出し、もし召使がもう一度痰壺をクロケットの行く手に置いたなら、その中に痰を吐いてやろうと怒鳴ったという。

この話は、Vance Randolph がオーザク人の間から採集したものであり、クロケットに関するものより以前にできていたのである。というのは、1831年に、ケンタッキー州の『ザ・ウェスタン・シチズン・オブ・パリス (The Western Citizen of Paris)』紙が、それより6年以前に無骨なケンタッキー州長、ジェームス・レイが、ラファイエットをもてなした時にその話をしたと載せているからである。

またクロケット暦は、自慢話と名射撃者としてミシシッピー河沿いの町々に知られて1820年代にあらわれたオハイオとミシシッピー河の伝説的船頭、マイク・フィンクについて、二、三の話を載せている。フィンクの伝説は、年1回の贈呈用本や、新聞に出るバイオニア達の想い出話等、色々の経路を通じて印刷されるに至った。こよみでは、彼は勇ましい半神としてのクロケットのライバルであり、実際に射撃においてもクロケットを負かしている。

演劇——1825年から1855年の最盛期には、評判ものの演劇は都会の聴衆に土くさい土着のユーモアを伝えるメディアとして人気を呼ぶ新聞と競っていた。旅まわりの劇団を通じて、劇の舞台は、ブロードウェイを出て全国津々浦々の町でくりひろげられた。そっちこっちの町々で、ずるがしこい東部人、豪語するケンタッキ一人や、しゃれを飛ばすボワリの乱暴者がメロドラマや笑劇に活躍していた。赤いかつらに鐘型の帽子、しまの上着にズボンといういでたちの「本物の生きているヤンキー」が、舞台の上をとびまわっていた。

クロケットの舞台での代表者、ニムロッド・ワイルドファイアは、あらい熊の毛皮の帽子に、ふさ飾りのつい鹿皮のズボンをはき、長い銃と火薬の入った角製の入

れ物をひっさげて自慢話を披露する。またニューヨークの火消し、人気者のモーズは、筒型の帽子に真赤なシャツ、パールのボタンのついた厚地のジャケットに、ズボンの端をまくり上げてブーツに押し込み、ちょっとかたむけたパイプをブカブカ吹かしながら、舞台を大またで我がもの顔に歩いていた。

生活も芸術もフォークロアも皆これらコミックな舞台の主人公達の中に交り合っていた。旅回りの芸人相手に、てっとり早い作品を提供するのに慣れていた職人風の劇作家達は、型にはまった役者と協力して、聴衆にそれとわかる土地土地の実在の人物を反映しているおなじみの役を演じさせた。劇作家、コメディアン、聴衆と民間伝承がともに創作に加わっていったのである。

このような雑種交配的傾向は、1831年に、ニムロッド・ワイルドファイアという名で、クロケットのイメージを舞台に打ち出して行き、かの有名なコミック・ドラマ、『西部のライオン』にはっきり認められる。

当時有名だったヤンキーの俳優、James H. Hackettが、自分が西部の砲哮者を演じられるような劇のために賞品を出した。その賞品の獲得者、ジェームズ・ケー・ポールディングは、昔彼自身が直接知っていた南部育ちの半馬半鶴の知人（クロケット）について描いたのであった。ハケットの許で、2人の劇作家がその台本を書き、その劇の公演20年間に4本の脚本が使われた。そこには、クロケットについての伝説と口承民話との密接な関係が見られる。その劇中、ワイルドファイアが、ミシシッピー調でやるおどしや、自慢話を取りかわしながらやる口げんかは、これも新聞に出たクロケットごよみ（1837年）の話のくり返しであった。外にもニムロッドは、ケンタッキーの土壌は、人が下をくぐって旅行できる程肥沃で豊かだと言ってイギリスのウォロップ夫人を驚かせた。彼はまた、沼沢の中で帽子を見つけた時の話もし、その帽子の下には、立派な馬に乗っているのだから助けはいらないと言いはる、泥だらけの旅人がいたと語った。ここでもまた、ニムロッドは、アメリカのおなじみのほら話をしたわけである。

これと同じような進展のし方をしたのは、ボワリの「ボーイ」、モーズで、彼は、1848年にニューヨークで幕上げし、全国的に嵐をまき起こした「ア・グランス・アト・ニューヨーク（A Glance at New York）」の爆発的人気の主人公であった。俳優のChanfrouは、「ボーイ」と呼ばれるおなじみの火消し、無為のしゃれ男を舞台で演じようと思った。彼がワシントン夫人と呼ばれるエンジン番号40番の消防ポンプとともに走るモーズ・ハンフリーを、そのモデルに選んだのはもっともなこと

であった。

Benjamin A. Bakerは、チャンフローのために、都会の恐ろしい裏面を写したあるロンドンのメロドラマに基づいて筋を考え出して行った。モーズは、奥地のならず者や虫けら供をやっつけたクロケットのように、べてもや詐欺師を征服してボワリ中を威張って歩いた。「グランス」はその最初の成功によって、から威張りの「ボーイ」をボワリからカリフォルニア、フランス、アラビアへと連れ出し、モーズの小茶番劇のシリーズを多数出した。それと同じように、こよみのクロケットもとうきび煙をぬけ出して、ブラジルや南洋、はたまた日本へまでやって来た。ボワリの浮浪者達は、今世紀になってその劇が舞台にもう出なくなった後もずっとモーズについての法外な話を語りつづけて行った。

1829年、Sam Patchはナイアガラの滝の上を飛んだがその直ぐ後で、ロチェスターのギネシー滝をとびそこの死んだという。その次の年、ロードアイランドのボタチットからの紡績工についてのほら話や、冗談や滑稽談等が続出した。「サム・パッチにはまちがいない」とか、「他のことと同様、何かできるはず」等と公言する曲乗り飛びのパッチの伝説は、舞台の上で最高潮に達したものだった。1836年に、有名なヤンキーの俳優、Dan Marbleは、「サム・パッチ」や「ダーリング・ヤンキー」中の向う見ずの役をやり、それについて、「フランスにおけるサム・パッチ」という続編もやった。実在のサムの如く、舞台上のパッチは、小道具のナイアガラの滝を公演のたびに勢いよく飛び越えていた。

多量のヤンキー劇が出たにもかかわらず、長い間、まがいの英雄タイプ以外、ヤンキーの眞の英雄イメージというものは出なかった。1787年の「ザ・コントラスト（The Contrast）」の無骨な召使にはじまって、1827年の「行商人（The Pedlar）」中の野卑な役柄に至るまで、ヤンキーは、舞台の上では常に、いなか者か与太者としてしか扱われなかった。それがしかし Jonathan Ploughboyが「森のばら（The Forest Roses）」に主役として登場してから、ヤンキーは次第に英雄的なイメージを有し始めた。その長い放浪の旅中、ヤンキーは、彼の生れ故郷、ニューイングランドを離れてフランス、イギリス、キューバ、ポーランド、アルジェリアとスペイン、中国にまで行っている。彼は、キャブテン・キッドと共に出航して、ロシアを相手にポーランドの自由のために戦い、キューバの館において、アルモンド伯の毒手から、セニヨリタ・ミラルダをすくい出した。そういう時には、ジョナサンは、あらい態の尻尾がぶら下った帽子をかぶった砲哮者のように誇り高に話した。

1840年の C. A. Logan の「ヴァーモントの毛織商人」の中で、ヤンキーの役をやるドーテルノミー・デューティフルは、「お前ら、十把ひとからげでひっぱたいてやるぞ。おれを怒らしてみろ、雷鳴嵐だってひとなめだ」等とわめきたてた。Morris Barnett の「ヤンキー行商人(The Yankee Pedler)」中、ヒラム・ドッヂは、例のクロケットごよみ調で、「お前の所のニグロの1人を、そいつの頭に油を塗って耳を後向きにピンでとめてくれたら、一飲みしてやるよ！」等と自慢している。

こうして、ヤンキーの役者たちは、舞台の喜劇と口承ユーモアの間に生きた橋をかけて行ったのである。人気コメディアンの George H. Hill やダン・マープル等は、舞台上でも舞台裏でもヤンキーを演じ、劇の幕間にカーテンの前に出て来て、東部の方言で、ヤンキーの話を朗読したものだった。ヒルの書いた *Yankee Stories and Reciter's Own Book of Popular Recitations* が、クロケット暦や他のコミックな暦を出版したターナーとフィッシャーによってポケット版で出された。「ヒル氏によって書かれ朗読されたイーチャボルドの新年、ヤンキー話 (Ichabod's New Year, a Yankee Story, Written and Recited by Mr. Hill)」というのは、印刷されたヤンキー話の通例のテーマ、大都会における青二才の冒險をあつかっている。他の2話、"Simon Slav's Visit to Boston" と "Ben's First Visit to the Theatre" 等は、右のテーマからちょっとそれた人気のあるもので、初めて劇場をおとずれる青二才のおどろきを扱っている。

ヒルはまた、その伝記の中で、ニューヨークのある町で、笑劇をやったが、聴衆から一つも笑い声の聞かれなかつたことを語っている。わびしい思いでホテルの部屋に座っていた彼のもとへ、やせた土地の男がやって来た。ヒルはその男に彼のやった劇が面白かったかどうかと聞いたたら、その男が言うには、「誓っていゝが、面白かったと思うよ。今だから言うが、一生けんめい笑いをこらえていたので、わしの口は、向こう1か月位真すぐにならないだろうよ。全く、まわりに御婦人方がいなかつたら、会場一杯、鼻をならして大笑いしただろうよ。」大衆向け新聞は、最新の“良い話”をヒルとマープルのものとして出したが、これは彼らをくろうとの話家と認めたことである。“カリフォルニアの風土”という見出いで、1849年、1月15日付の『ニューオーリンズ・ウイクリー・デルダ』紙は、“祝福された土地”的驚異について語るカリフォルニアから戻って来たばかりのカリフォルニア人とダン・マープルとのきびきびした会話を載せてている。

カリフォルニアでは、山頂に登った猿人が、連発銃

で、一方の谷で冬期の獲物を、もう一方の谷で夏期の獲物をうち取ったが、残念なことに、彼の犬は、頭を夏側の谷に向いているうちに、冬側に向いていた尻尾が凍ってしまったということだった。少なくとも、『スピリット』紙をふくめて3つの新聞が、1849年に、Yankee Hill の “The Yankee Fox Skin” という話を出したが、その中で、東部の商人が、毛皮を売ろうとして、もとの狐は、よくあぶらののったつやつやしたものであったということと、また非常にスマートなものであったことを交互に話して、その毛皮の質を絶賛している。当時のマープルとヒルの伝記には、あらゆる場合に語られたひょうきんな話が載っていて人気をほくしたが、事実、彼ら自身、それぞれ舞台で東部の田舎者をまねて演じるヤンキー一族の見本となってしまったのである。

(関西外国语大学教授)

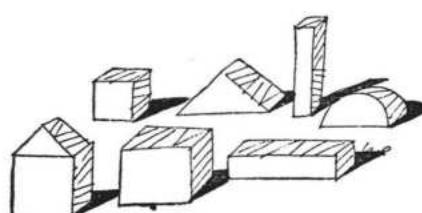
(P. 49 よりつづく)

いものである。

上の作成例は、シラバスのごく一部で、for example, that is to say, thus で導かれる ('coherence') の関係で結ばれたパラグラフの展開を示したものである。ほかの単元では、又別の 'coherence' の関係を焦点にしたパラグラフの展開を扱い、その後の単元ではパラグラフの連絡に進むのである。

Widdowson の考えるシラバス作成法は、階層的にだんだんと大きな構造となるディスコースを作っていくように言語的やりとりの能力を伸ばすことを目ざした方法である。ディスコースの各段階で、'coherence' の関係に焦点をあて、各単元はパラグラフの類型に焦点をあて、それよりあとの単元でパラグラフの連結を扱い、究極的にはシラバスを作成するために用いたテキストの基底構造 ('coherence' の関係で表わした構造) を簡潔に表わすような文章を作っていくのである。

(南山大学助教授)



Harry Houdini と John Hancock

よく使われる人名のいくつか(その4)

矢野文雄

Harry Houdini

Since it was Saul, the chances were that he already had a taxi parked down the block, but even so...

"I can take the sedan," I suggested, "and run Orrie over to Saul, and I'll lay back with the car. We three could hang on to **Houdini**."

Orrie gulped his beer down, stood up, and rumbled, "Let's go."

"I suppose so." Wolfe was frowning.

(*The Golden Spiders* by Rex Stout, 1954)

百貫デブ探偵ネロ・ウルフの助手であるアーチー・グッドウィンが「ソールとオーリーと自分の3人が一緒になればかのフーディーニにだってしがみついていられるさ」と言っているところである。

優秀な探偵である3人が束になってからねばならないフーディーニとは何者かと言えば、辞書にも名を残しているほど有名な奇術師なのである。Webster's Biographical Dictionaryによれば、

Harry Houdini

Real name Ehrich Weiss. 1874—1926. American magician, born Appleton, Wis., of Hungarian-Jewish parentage. Took name Harry Houdini after French magician Houdin. Known for his ability to extricate himself from handcuffs and locked and sealed containers of all kinds.

ということである。

とにかく、鍵を掛けた上に封印したさまざまな入れ物から抜け出すことを得意にした希代の奇術師である。そこで、Houdini の名前が奇術師の代名詞のように使われ、また、よく引き合いに出されるようになった。

Played Partner! was the tale of Lord Gerald Derreval, known to West End clubland as a wealthy idler, *dilettante*, and sportsman; but known to Scotland Yard under the enigmatic and terrible pseudonym of The Will-o'-the-Wisp. As a gentleman burglar, Lord Gerald was hot stuff. His

thrilling escapes from captivity under heavy guard made Mr. Harry Houdini look like a bungler who had got out of clink only with a writ of *habeas corpus*. (*The Blind Barber* by John D. Carr, 1934)

ジェラルド卿はフーディーニも顔色無からしめるほどの破牢の名人だったというから大変な夜盗紳士、ということになる。

ところで、フーディーニの名前を引き合いに出す時にはフルネームではなく、単に Houdini とするのが普通だ。

"Well, it's all very mysterious," said Gally. An idea seemed to strike him.

"He wasn't a midget, was he?"

"No, sir."

"I thought he might have been hiding behind one of the flower pots, which would have accounted for our not seeing him. Then I must confess myself baffled. How he managed to get out of that shed is beyond me. Door locked, no other exit. It's the sort of thing Houdini used to do."

(*Galahad at Blandings* by P. G. Wodehouse, 1965)

フーディーニは密室からの脱出を得意としたからそのような場合に引用されることが多いのはもちろんだが、奇術の名人の代名詞でもあるので高度なトリックが使われたのではないかと考えられる場合にも引き合いに出されることが多い。

さらに進んで Houdini だけで「フーディーニらしい見事なトリック」のような意味に用いられることもある。

"The bullet Storm extracted from King's chest didn't get there by osmosis or the mumbling of three sacred words. It was in King's chest and Storm took it out of King's chest—I saw him do it, and he wasn't pulling a **Houdini** when he did it, either. He really dug it out. That means the bullet was part of a cartridge that was fired from a gun. Whose gun? Which gun? Fired where?"

(*The King Is Dead* by Ellery Queen, 1952)

キング・ベンディゴが射たれ、確かに銃弾も摘出され

たが、どの銃でどこから射たれたのかまったく分からぬ。ストームが応急手術をすると見せかけてフーディーにばりのトリックを用いたはずもない、というわけである。

次の例では、後手に縛られたフェン教授がほどくのはそんなに難しくないだろうといったので「フーディー君、やって見せてくれ」とからかわれている。

“Where are we?”

“I think we’re in the cupboard at the end of the passage where they attacked us. I’m an idiot not to have taken more care. Are you tied up?”

“Yes.”

“So am I. But it must have been rather a hurried job, and it ought to be easy enough to get loose.”

“All right, **Houdini**, get on with it.”

(*The Moving Toyshop* by Edmund Crispin, 1946)

フーディーが死んですでに50年以上たつというのに、いまだに引き合いに出されるのだから、フーディーが奇術師中の奇術師であった、少なくとも一般的にそう思われていることは確かであろう。

Without his having been aware of it, she had opened the halter. Instead of closing over cloth, his fingers were electrified by her smooth, warm flesh and hardening nipple. In a single, gliding motion she was out of the shorts, leaving only her white bikini underpants, which she removed with a **Houdini**-like deftness.

(*Closing Circle* by Edward Wiley, 1980)

こんな場合にも引き合いに出されては、フーディーも墓の中できぞや苦笑していることだろう。

John Hancock

“You don’t sound unhappy,” Shayne said. He reached for a pen. “Purely as a matter of interest, if you don’t believe this statement, what do you think the truth is?”

“I’ll tell you after I see your **John Hancock** on it.”

The redhead laughed shortly and scrawled his name across the bottom of the sheet. Painter checked to make sure he had used his own name and not a pseudonym.

(*Target: Mike Shayne* by Brett Halliday, 1959)

私立探偵のマイク・シェインが供述書に署名させられているところ、この John Hancock が署名の意味で用いられることは常識である。それなのに『ランダムハウ

ス英和大辞典』でさえ説明していないのは理解できない。

William & Mary Morris の *Dictionary of Word and Phrase Origins* は次のように簡潔明瞭に解説している。

As every schoolboy knows, the biggest, boldest and most defiant signature on the Declaration of Independence was scrawled by John Hancock of Massachusetts. So completely did it overshadow the autographs of the other founding fathers that the term *John Hancock* has become synonymous with “signature” and each of us at one time or another has spoken of “putting his **John Hancock**” at the bottom of a document.

これで人名の John Hancock がなぜ署名の意味で用いられるようになったかが分かろうというのだ。

ところが、この John Hancock が指紋の意味でも用いられることがあるらしい。次にその用例を挙げておこう。

The phone rang. It was Dalligan from Fingerprints.

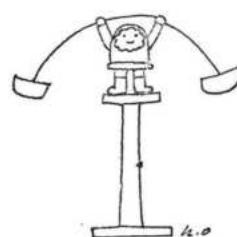
Joan Chambeau had left her **John Hancock** on the pearl brooch found behind books in the cupboard in the living room of the Montgomery house on Wildwood Road. There were no one-finger classifications in the bureau at Centre Street, but Dalligan said, “It’s the McCoy, all right, Inspector.”

(*Ding Dong Bell* by Helen Reilly, 1958)

指紋班のダリガン判事がマッキー警視に「真珠のブローチに彼女の John Hancock が見つかった」と言っているのだから、この John Hancock は当然指紋を意味している。

一般の辞書やいくつかのスラング用語辞典にも載っていないところからみて、警察関係者の間だけで用いられるスラング用法だと考えられる。

(英語／ミステリー研究家)



トークショーエ

木戸英晶

"We are very fortunate this afternoon in having with us a distinguished guest in the person of..."といった言い回しも、國弘先生のお蔭ですっかりお馴みになったが、トークショーの歴史も考えてみれば、1971年1月のNHK番組まで遡ることになる。当時としては、世界の頭人達を迎えてこのトークショーは画期的なものだったと思う。なにしろ第1回目のゲストは、今は故人となった元米国副大統領のH.ハンフリー氏だから驚かされる。

このテレビのトークショーは再放送分を含めて1977年まで数年にわたり続けられ、私を初めとして多くのファンを獲得した。正に、英語による対談番組の走りだったと言えよう。この國弘先生のショーが大勢の人々に惜しまれながらテレビの画面より姿を消してから後、その期待の声にあたかも応えるかのように登場したのが、ELECの企画による公開トークショーであった。

この企画は対談を目のあたりすることができる上に、Q&Aを通じて対談に直接参加することが可能であることから、毎回沢山のaudienceを集めている。筆者も職業がら残業が多いにもかかわらず、このトークショーのある日は6時の退社時早々にELECに足を向けることにしている。(ただ、毎回ウイーク・デーに開催されることはいかにも残念な気がする。)

さて、我々ビジネスマンにとってのトークショーの効用は一言で言え

ば、英語を通じて見聞をひろめることができる、という点につくるだろう。取り上げられるテーマは、しばしば非常に密接に仕事と関係のある場合がある。又、直接関係のない時でも、ビジネスマンとして知らないでよいテーマは殆んど皆無と言ってよい。(あえて言わせてもらえば,)国際社会に働く職業の者にとり、知識は即英語で表現できることが不可欠となる。しかし、英語でinputされていない知識は英語で表現できない。従って、英語で「知的水準の高い」テーマが語られるのをじかに聞くことは、すなわち無意識のうちに英語で知識を吸収していることになる。

よくこの種の対談を聞いていても、読書をしても、英語の表現のみに関心が傾いている人がいるが、不思議なもので、表現のみに余り注意しすぎると、表現力も内容の吸収もできぬという、虻峰とらずに終ることが多い。注意したいものである。そもそも表現力(expressiveness)とは内容に付隨して身につくもので、切り離して体得できるものではないはずである。

筆者は國弘先生を師と仰ぎ、長年、先生の対談マナーを真似てきたお蔭で、商談をしていて時折、固くて格調の高い所謂「國弘英語」が口をついて出て嬉しくなることがある。

我々ビジネスマンに「英会話」という次元の英語はさほど必要ではない。打合せでも契約nego. でもbookishでよいから、しっかりととした英語を話すことの方が相手をより

信頼させることができると見えよう。ビジネスの世界で行なわれる商談は、目的と利害の明確ないわば説得ゲームである。トークショーも本来ショーという名からは程遠い知的give-and-takeと考えてよい。

その場で求められるのは、自分の情感だけを発作的に点的に表現する「英会話」とは一味違った表現力であろう。

その意味で、正にトークショーは自らの立場と知性をいかに論理的に説得力をもって相手に訴えるかをdemonstrateしてくれる貴重な場として評価できる。しかも、語られる内容が、各界を代表する人々の生の意見となれば、この機会を利用しない手はない、と思うのである。

性懲りもなく薄っぺらな英会話論のまかり通っている(going unchallenged)中で、トークショーを企画する主催者と、何にも増して國弘先生のご炯眼、並びにご努力に敬意を表したい。

尚、今後この紙面をお借りして今迄の(或いはこれから)トークショーの感想を何度かにわたり個別に発表させていただくつもりである。

(伊藤忠商事勤務)

1980年10月1日に開催された第11回トークショーにはThe New Yorker誌極東主席特派員のRobert Shaplen氏をゲストとして迎え、「The Japan-U.S. Partnership after the U.S. Election」と題して行なわれ話題となった。

なお、トークショーの録音テープは、ELEC CASSETTE LIBRARYに収められ、1巻¥2,000で頒布されているので、購入希望者は〒101千代田区神田神保町3の8 ELEC宛申し込まれたい。



英語の諺(その13)

—金 錢 (4)—

戸 田 豊

A rolling stone gathers no moss.

あまりひんぱんに住居を変えるのはよくないとする諺が Three removes are as bad as a fire. (転居3回は丸焼け1回も同然)である。文字どおり直接的に転々とすることを戒めている。ところが、A rolling stone gathers no moss. (転がっている石には苔はつかない)には、出世できるかどうか、金銭的に成功できるかどうか、ということについて、まったく相反する2つの意味がある。転々とする石には苔が生えるいとまはない。苔をよいものと見れば、ひんぱんに職業、住所を変えることは、成功にも金持になることにも結びつかないということになる。OEDには、used to imply that a man who restlessly roams from place to place or constantly changes his employment will never grow rich (転々と絶えず住所を変えたり、仕事を変える人はけっして金持にはならない)とあり、この諺から moss (苔) は時に money (金) という意味で用いられる、と記している。

この諺にはもう一つの意味、つまり、ある所に定着したり、一つの仕事にじっと取り組んでいたのでは成功はおぼつかない、という意味が生じている。目下のところ英米の辞典でこの意味を記載しているものは見当らない。わが国ではじめてこの意味の発生を指摘したのは My Wordbook (『基本英語百科事典』研究社刊、1964年)であろう。その解説は次のようにになっている。「(ことわざ) 転がる石に苔は生えない。【いつも商売を変えていては財産もたまらず、信用もつかない、要するに、商売変えは損、という意味。ただし、最近では、逆に、同じところにじっとしていると愚鈍になる、人間は活潑に動きまわっている方がよいという意味に解されることも多い。】」

この諺の持つ2つの意味をめぐって、『英語教育』(大修館刊、1968年4月号)に次のような一文を投稿したこ

とがある。

「A rolling stone gathers no moss. という諺には相反する2つの意味がある。このことについてはすでに『英語青年』1963年4月号の「編集雑記」で S.T. 氏が触れられ、change of calling does not pay (商売変えは損) (COD, POD) という伝統的な意味にとてかわって、「転石」は良いもの「苔」は悪いものという見方もある旨記されている。これを裏書きするように『英語青年』同年6月号「Corners」にはアメリカの大学生162名のこの諺に対する反応調査の結果が報告されていて、3分の2の学生が「成功するためには、積極的で、活動的であれ」という意味にとったと記されている。また『現代英語教育』1964年4月号でも外山滋比古氏が「諺の意味」の中でこの諺について述べられている。

a rolling stone の意味は Webster 3版では a person who changes his habitation, business, or pursuits with great frequency: one who leads a wandering or unsettled life とあり、イギリス系の辞書も内容は同じである。gathers no moss の部分は Webster 3版には記述なく、will not succeed in life (ALD, ISED), will not prosper or gain wealth (UED), does not become rich (The Kenkyusha Dictionary of Current English Idioms), will never gain a steady, established position (V. H. Collins; A book of English Proverbs) と多彩な表現がとられているが、本質において変わらないものである。ACD と RHD には全くなんの記載もない。こうみると辞書的な意味ではまだ「新しい意味」はその片鱗も示されていないことになる。アメリカ人のもつ mobility という性質によって「新しい意味」が自然発生的に生じたのか、それとも moss 自体にもともとなにか陰湿な不活潑な image を与えるものがあるためであろうか。

ところで、The Oxford Dictionary of English Pro-

erbs には1917年の類例として、A rolling stone gathers no moss, but a tethered sheep winna get fat. があり、これと In Surrey and Sussex we have the addition:—'And a sitting hen never grows fat.' から判断すると、「転々とする」のも「ぐっと構えている」のもともに好ましいことではなさそうだ。

山岸直勇氏の報告(『英語教育』大修館、1977年2月号)によれば、アメリカの辞典編集者の中には、この新しい意味を 'a counsel to more vigorous activity'/one who keeps his independence and refuses to become part of the establishment will escape the mossy growths of conservatism and stuffiness' として認める人もいるとのことである。比較的新しい英和辞典には、「アメリカでは「活動家には悪いコケなどは付かない」の意味にも用いる」、「常に活動している人は沈滯しない」という意味で用いられることがある」、「精を出せば凍る間もない水車」といった解説が見られる。

なお、この諺には、気まぐれにひんぱんに恋愛沙汰を引き起こすような人は眞の長続きする愛情は得られない、という意味もある。

A penny saved is a penny gained.

とかく金のない人に限って大恩ふるまいをしたり、大恩のふりをする。せめてたまには日頃のうきを晴らそうとするこんなか、やけのやんばちか、ふところのさびしさを他人様に知られまいとするのか、はたで見ていてはらはらする。持てる者はどっしり構え 持たざる者はとかく持っているふりをする。持てる者は持てば持つほどますます持ちたくなるから、出費には気を配る。一見けちである。持たぬ者は、どうせ小銭をけちけちしてもたかが知れていると思うために、江戸っ子の氣前よさ、から元気が身についていて、その日暮しの使いぶりである。

さて、持たぬ者には警句であり、持っている者には先刻承知の諺が Take care of the pence, and the pounds will take care of themselves. (ペンスに気をつけよ、そうすればポンドは自分で気をつける) である。pence が表わしているものは小銭であり、pounds が表わしているのは大金である。大金には普通程度の注意を払っていればよいが、問題は小銭である。少額の金には細心の注意を向け、むだに使わずに貯えていけばそのうちに大きな額になる、ということである。ある程度の貯えがあれば、さらに貯えたくなる人間心理をついたものである。

この諺は、イギリスの政治家、書簡文の名家であった

Lord Chesterfield (1694—1773) の息子に宛てた手紙(1750年2月5日付)によれば、17世紀末から18世紀初頭に大蔵大臣であった Mr. Lowndesのことばである。Lowndes は、このことばどおりに実践し、2人の孫に莫大な財産を残した、とのことである。この諺は金銭から転じて、小事に気を配れば大事はおのずから成る、という意味を持つにいたる。この諺のもじりが Take care of the sense and the sounds will take care of themselves. (意味に注意すれば音調おのずからととのう) であり、詩作への忠言である。

少額の金はとかく軽視されがちである。たかがこれしき持っていて何になる、とか、「安物買いの銭失い」に走り、大金の元である小銭を気軽に浪費してしまう。このような性向を戒め、儉約をすすめる諺は多い。その代表的なものが A penny saved is a penny gained [got, earned]. (節約した1ペンスは儲けた1ペンス) である。1ペンス節約すれば1ペンス儲けたも同然である。小銭でもいざ儲けようとするとなかなか儲けさせてくれないのが世知辛いこの世である。まずは儉約がかんじんということである。A penny spared [saved] is twice [twopence] got. (1ペンスの節約は2倍〔2セント〕の儲け) を身上にしたらだれもが金持になれそうである。Sparing is the first gaining [getting]. (節約は第一の所得である)/Frugality and good husbandry is an income [estate]. (儉約とやりくり上手は収入〔財産〕に等しい)/Of saving comes having. (節約から富が生ずる) などもまた同工異曲である。Every little helps. (少しづつが役に立つ) は、小銭を大切にすればやがては富となる、ということと同時に、みんなが少額でも出し合えば大きな目的も達成することができる、という意味もある。さらに金銭のことだけではなく、時間でも、努力でも、いくら少しづつでも積もりつもって大きなものになっていくことをも表わしている。「ちりも積もれば山となる」に当たる諺にはさらに Many a little [pickle] makes a mickle./Every little makes a mickle [muckle]. (少しづつがたくさん集まれば大量になる) がある。スコットランドでは Many a mickle makes a muckle. である。m という文字の音がこの諺を口に乗せ易くしている。(このことは Money makes the mare to go. についても言える) Little and often fills the purse. (少しづつ何回もが財布を満たす) は、少額でもひんぱんに入れば巨額になることを示している。あせらずあわてず小銭をあなどらず日銭を貯めよ、ということである。商人が座右の銘とするに格好である。Light gains [winnings] make heavy purses./Light gains

make a heavy purse./Small winning makes a heavy purse. (小さな利益が重い財布を作る) は小利も積もれば富となり、薄利多売が産を生む、ということになる。薄利多売に当たる句が small profits and quick gains である。bargain sale の標語としてうってつけである。なお、a heavy [fat, long, well-fed, well-lined] purse は wealth を意味し、それに対して、a light [slender, lean, cold, ill-lined] purse は poverty を表わしている。

Penny-wise and pound-foolish.

節儉を尊ぶ諺ばかり続くと、イギリス人とはなんともまあ thrifty な連中かと思いたくなる。しかし、彼らの平衡感覚は健全である。けちを諫める諺もたしかにある。A penny saved is a penny gained. に対してはすかさず Sometime a penny well spent is better than a penny ill spared. (1ペニーを下手に節約するよりも上手に使うほうがよいことがある)/Every penny that is saved is not gotten. (節約したペニー貨の全部が全部収入になるとは限らない)/All is not won that is put in the purse. (財布に入れられるものはかならずしもみな所得になるとは限らない) がある。少額を惜しんであとで大金を払わなければいけないようなことも起こる。「一文惜しみの百損」「安物買いの銭失い」に当たるのが penny-wise and pound-foolish/penny wise and pound foolish (わずかな金を惜しんで大金には間が抜けている) である。金銭だけではなく、とるに足りないことにこせこせするくせに、大切な事柄に関しては不注意である場合にも用いられる。A penny soul never came to twopence. (1ペニーにこだわる人が2ペンスを手にしたためしがない) は、けちな了見の人には成功も出世もないということである。船にほんの少しのタールを塗るのを惜しんで船を台無しにすることもある。Never spoil a ship for a ha'porth of tar. (半ペニ一分のタールのために船をだめにするな) という。

むだ使いとぜいたくを戒めているのが Waste not, want not. (むだをしなければ不足することはない)/Extravagance begets all kinds of misery. (ぜいたくはあらゆる不幸を生む) である。金でも物でもいたずらに使うことを慎めば困ることはない。余力はいつかの日に取っておくのがよい。訪れるかもしれない不幸、貧困に備えよという意味を表わすのが Keep something for a rainy day. (雨降りの日のために少し取っておけ) であり、さらに迫り来る老齢に備える意味を含むのが Keep something for the sore foot. (足が痛むときに備えて少し取って置け) である。ぜいたくの報いは貧困である。

日本でも「気ままにやって泣く貧乏」という。英語では、Wilful waste makes woeful want. (気ままな浪費は欠乏の憂き目を招く) とも、ただ Waste makes want. ともいう。

金銭についてもやはり Extremes meet. (両極端は一致する) である。行きつくところは、両極端の中を取るかの如き Spend not where you may save, spare not where you must spend. (節約できる場合には使うな、使わなければいけない場合には使い惜しみするな) という諺が穩健である。何事も時と場合を考えないといけない。There is a time to spare and a time to spend. (僕約すべき時と使うべき時とがある) を心得ていれば金に執着することもなくなる。Know when to spend and when to spare and you need not be busy, you'll ne'er be bare. (金を使うべき時と僕約すべき時をわきまえよ、そうすればあくせくする必要もなく、無一文になることもない) がまとめの諺である。

節儉、吝嗇 (ひそ), 浪費、奢侈 (ヒキ) の諺を順に見てくると、一つ一つは真実であり、時と場合に応じて的確な表現となるが、諺相互間には矛盾があることが分かる。一文でも惜しめ、と説きながら、けちけちしては大損をする、ともいう。むだとぜいたくを慎しんでまさかの時に備えよ、ともいう。諺は一面的真理しか表わしていない。諺の世界は矛盾の世界である。それはまた人間世界の矛盾をも表わしているといえる。諺表現の力強さは一面的真理を一方的に押しつけてくるところにある。右でもない、左でもないとためらっているような諺は諺らしくない。

(静岡県立清水東高等学校教諭)

►原稿募集

『英語展望』では読者からの原稿を募集しております。教材・教授法に関する実践研究や語法研究など内容は自由ですが未発表のものに限ります。分量は原則として400字詰原稿用紙20枚以内で、掲載分には所定の原稿料をお贈りします。

なお応募原稿はお返しできませんので、コピーをご用意下さい。

►年間予約購読のおすすめ

本誌の年間予約購読をおすすめいたします。購読を希望されるかたは年間購読料2,300円を添えてELEC宛直接お申し込み下さい。

Communicative Approach と その適用



ELEC 情報・資料の収集および分析研究グループ

玉崎孫治

本誌 No. 61 (1978) の拙稿「社会言語学と言語教育」において C. Criper & H. G. Widdowson の社会言語学的に定義されたコミュニケーションのための言語教育論を取り上げた。しかし、そこではそれが教材や教育の現場にどのような形で反映するかについては言及できなかった。今回は、Widdowson の論文集 *Explorations in Applied Linguistics* (Oxford University Press, 1979) の中から、“Notional Syllabuses”, “The Communicative Approach and its Application” の 2 編を取り上げて、Widdowson の考え方をもう少し掘り下げてみたい。前者は Wilkins らの提案している Notional Syllabus (伝達内容別シラバス)¹⁾ の原則を批判した論文で、後者は前者の批判論文の内容を要約的に述べながら、更に意思伝達能力 (Communicative Competence) を伸ばすためにディスコースを提示する具体的方法を模索した論文である。

コミュニケーション中心のアプローチは、言語を単に概念や機能で表わすばかりではなく、目標言語によってディスコースを具現化する能力を習得させることを目的としている。よくディスコースを文より大きい言語単位であると考えている人がいるが、Widdowson のディスコースという概念は、複数の文から成る言語形式²⁾のことではなく、what is said と what is meant and done の結びつき、即ち言語の表現形式と“非表現的行為” (illocutionary act³⁾——たとえば、依頼、命令、約束等) の結びつきを指すものである。このアプローチを探る理由は、かつてあったような理論的研究の成果（ここではコミュニケーションの性格の理論的研究の成果を指す）を言語教育にも応用すべきであるという議論のためでもなく、又学習者の学習目的と必要に応じて言語を教えるなければならないが、その学習目的是コミュニケーションの点から明確に設定すれば一番良いという理由でもない。このアプローチを探れば、学習者自身に実際に言語を運用する言語経験から遊離しない言語が提示できると

いう理由からである。仮にコミュニケーションの理論的解明が進んだところで、それと言語教育との関連は改めて明確にされなければならないし、又学習目的をコミュニケーションという観点で明示できたとしても、学習すべき内容を教材として組み、明示的に教えなければならないということには必ずしもならない。学習の進歩を促すのに、目標となる学習内容と全く別のことを教えることもありますからである。

特定の目的のために言語を教える場合、その目的を定めることができが第 1 の仕事である。しかし学習者の目的が必ずしも直接に教える内容や教え方を決めるとは限らないのであって、学習目的が定まつたら、その目的に到達する最良の方法を考え出さなければならない。学習者の目的や必要を特定しても、それは教育に対する理論的方針づけをしてくれても、教授方法を決定するものではないからである。たとえば、冶金学の本を読む必要があるという特定の目的のために英語を学ぶ学生に、その専門書から直接とった内容のものを読むことだけを目的とした授業計画をたてる場合がこのような直接的方法である。

このコミュニケーション中心のアプローチがどのようにしたら実行可能になり得るかははっきりしないが、このアプローチの特質と原則を究明して、教授法に

1) 本誌 No. 70(1980) に石田雅近氏の Notional Syllabus の解説が載っているが、石田氏はこのシラバスに特に詳しい批判を加えておられない。むしろ基本的に支持する立場である。「新教材論：Notional Syllabus の意味するもの」 pp. 20-1.

2) Widdowson はこれをテキスト (Text) と称し、ディスコースと区別している。

3) イギリスの分析哲学者 J. L. Austin は発話行為 (speech act) を 3 つの行為に分けた。これはその 1 つで、文を発することがそのままある行為を行なうというもので、これを非表現的行為 (illocutionary act) と称した。「私はこの船をクイーン・エリザベス号と命名する」という文を発すると、この文がそのまま命名という行為を行なったことになる。訳語は安井稔編『新言語学辞典』(研究社) による。cf. J. L. Austin, *How to Do Things with Words*. London: Oxford University Press (1962).

効果的に適用できるようにしなければならない。どのようにしたら、それが可能になるか、以下において、この問題を考える。

◆Notional Syllabus に対する批判

コミュニケーション中心のアプローチの1つの見方をとっているものとして Wilkins (1972, 1974, 1976) の *Notional Syllabuses⁴⁾* と Van Ek (1975) *The Threshold Level for Modern Language Learning in Schools⁵⁾* によって提示されている Notional Syllabus (以下、NS と略す) がある。このシラバスは学習者の目的と必要を特定することに基づいたもので、実際の言語運用はただ文を発するのではなく、文を発することにより概念を表現し、コミュニケーションの機能を果たすものであるという認識から生まれた。このシラバスの言語材料は structural syllabus (文法項目別シラバス) にみられるような統語構造や語彙の形式的要素ではなく、言語形式が伝える概念とそれが果たす機能によって決められている。Wilkins はこのような概念や機能を “notions” と称して分類し、その目録を提示した。Wilkins が言語形式よりも言語によって行なう行為 (非表現的行為) を重視したことは評価できる。しかし、Wilkins が文法項目別シラバスや場面別シラバス (situational syllabus) に比べ、NS が優れているとして挙げた理由は、NS が文法的、場面的要因を無視せず、始めからコミュニケーションの言語事実をとらえているから、学習者の動機づけを持続させることができるというものである。しかし、問題となるのは、Wilkins の “notions” の目録がコミュニケーションの基本的事実をとらえているかということである。コミュニケーションは概念や機能をコンテクストから遊離した意味の単位として表わす言語表現によって行なわれるものではない。言語形式は Halliday の考え方には潜在的意味を持つもの (meaning potential) であるが、特定のコミュニケーションにおいて、言語項目の様式化された意味とコンテクストによって条件づけられ、その潜在的意味は顕在化するのである。NS の教材目録はディスコースの構成素ではあるが、実際のディスコースのコンテクストから遊離した、抽象化された (即ち、理想化された) 構成素を集めたものであって、ディスコースそのものではなく、コミュニケーションの正しい言語事実をとらえていないのである。Wilkins の記述は、ディスコースにおける言語的やりとりに關係する意味的、語用論的規則をただ部分的に、しかも不正確に記述したものに過ぎない。そのような記述は実際のコミュニケーションにおける規則適用の手順について何も説明していない。

ない。伝達能力の習得は、言語単位を記憶することではなく、言語運用のコンテクストの中で言語形式の意味的価値を顕在化させる創造の方略を習得することである。換言すれば、自然なディスコースに参加できる能力を習得することであるが、Wilkins の NS はディスコースの創造的過程をとらえていないので、意思伝達の能力を習得させると考えるには無理がある。

◆コミュニケーションの言語事実

言語で行動する能力の習得を第1目標とするコミュニケーション中心のアプローチは、ディスコースに最も注意しなければならない。ディスコースには以下のようない本的事実がある。

文が運用され、それが普通のコミュニケーションのコンテクストで理解される時、ディスコースの中のいろいろな関係が活性化し、その文の潜在的意味は特定の意味となって顕在化する。概念は既出の命題 (前の文で表わされた命題) と連けいし、特定の命題として表出される。ここにみられる連けいが Halliday & Hasan の ‘cohesion’⁶⁾ という関係である。これは、複数の言語形式を連結してテキスト (Text) を作るために形式的連結を指す概念である。もう1つ、‘cohesion’ と区別すべき関係がディスコースにある。これは ‘coherence’ という関係で、ディスコースの規則に従って自然な言語的やりとりを作っているかどうかを定義する概念である。例えば、次の2つの対話 (話し言葉のやりとり) をみよう。

1. A: Can you go to Edinburgh tomorrow?
B: Yes, I can.
2. A: Can you go to Edinburgh tomorrow?
B: B. E. A. pilots are on strike.

(1) の対話には、B が Yes, I can go to Edinburgh tomorrow. の短縮形を使ったもので、cohesion の関係がみられる。(省略は ‘cohesion’ の関係を示す手段である。) 一方、(2) には cohesion はない。(2) の B には A の言語形式に対する形式的連結はみられないけれど

4) D. A. Wilkins (1972). "An investigation into the linguistic and situational common core in a unit of the credit system." Strasbourg: Council of Europe.
——— (1974) "Grammatical, situational and notional syllabuses." Papers of the 3rd A.I.L.A. Congress.

——— (1976) *Notional Syllabuses*. London: Oxford University Press.

5) J. A. van Ek (1975). *The Threshold Level*. Strasbourg: Council of Europe.

6) M. A. K. Halliday and R. Hasan (1976). *Cohesion in English*. London: Longman.

ど、Bがエジンバラに行く手段としてBが考えている手段がストライキで使えないから行けないと言っているのであり、この質問・応答のやりとりは不自然ではない。このやりとりにみられる関係を‘coherence’と呼び、‘cohesion’と区別する。次に書き言葉のディスコースの例をみてみる。

One of the important mechanisms by which the individual takes on the values of others is *identification*. The term is loosely used to sum up a number of different ways in which one person puts himself in the place of another.

この文章では、第2文の‘the term’と第1文の‘identification’の間に前方照応的な関係があり、‘cohesive’な文となっている。しかしこの‘cohesion’の関係が2つの文を連結している唯一の関係ではない。上例中のthe individual takes on the values of the othersとone person puts himself in the place of anotherの2つの表現は、概念的に同じであり、第2命題は第1命題の解説的な言い換えとみることができる。このような命題間にみられる関係（上例の言い換えの関係）も‘coherence’の関係としてとらえる。この関係は命題のもつ非表現的行為としての機能が結合して更に大きなディスコースの単位を作るのに必要な関係である。

以上の‘cohesion’と‘coherence’は、命題と非表現的行為の間にある関係としてとらえた。このような関係は単なるテキスト(text)にあるのではなく、ディスコースの中の言語運用者間のやりとりによって確立するものである。従って、この2つの関係は、コンテクストの中の文が表わす‘relationship of interaction’(やりとりの関係)という、もう1つの関係に依存している。文が發せられる時、その文の書き手（あるいは話し手）によって、読み手（あるいは聞き手）が命題的意味と非表現的行為としての意味を把握する手がかりが与えられる。そのような手がかりの1つは文の命題的内容の配列において伝達行為の発信人と受信人が共有している既知の情報は先に現われ、発信人にしか解っていない新情報は後に現われるというような配列の仕方である。この手がかりについて上の例文で検討すると、‘identification’が新情報として提示されている。このことが‘identification’に関する情報が更に後続することを読み手に知らせている。もし、第1文の新情報、既知の情報の順を反対にして、次のようにすると、

Identification is one of the important mechanisms by which the individual takes on the values of others.

読み手はこの‘identification’についてもうこれ以上の言及が後続するとは予測しない。このように読み手は情報の配列順に従って、次に後続する命題を予見することができる。

次に、ディスコースの基本的な性格を2つ挙げる。まずその1つは、ディスコースは根本的に発信人と受信人の間のやりとりであって、その間には意味の流れが伴う、ということである。もう1つの性格は、言語的なやりとりは命題と非表現的行為が次第に大きなコミュニケーションの単位となって行き、階層構造を作る、ということである。

◆コミュニケーション中心のアプローチの適用

学習者の目的を特定することは、それに合ったアプローチが意思伝達能力の発達を促すことを目的とするアプローチであることを示すものである。又この能力はディスコースのやりとりの階層構造を処理する能力として定義される。仮に、扱う言語材料をアカデミックな内容をもつディスコースにすると、このアプローチを採り、かつ学習者の要求を満たす方法はどんなものになるであろうか。

まず、ディスコースの階層構造的性格がシラバスにおける言語材料の段階づけ（提示順序）を示唆し、又言語的やりとりの性格は言語材料の提示の仕方を示唆すると考える。この2つの性格は基本的な教授法の原則に変えられなければならないのである。次に、この原則がどのように働くかについてみてみよう。

シラバスを作成する場合、我々の目標は、教材となる言語項目を徐々に大きなコミュニケーションの単位となるように順序づけることである。シラバスの各セクションの単位をパラグラフとすれば都合がよく、各セクションには新しい‘coherence’の関係を導入する段階があり、これらの‘coherence’の関係にそれぞれ名称をつけておく。たとえば、for exampleは‘exemplification’, that is to sayは‘restatement’, howeverは‘concession’, on the other handは‘contrast’といふうにつける。これらの名称は、前後の命題を結ぶいろいろな‘coherence’の関係を表わすものである。このようにして、文法構造とか場面とか概念を単に集めたシラバスではなく、まず1つのパラグラフを作り、だんだんと、パラグラフの連結した大きなディスコースを作り、究極的に学習者が取り組まなければならないような文章（読本）となるような、‘coherence’の関係の連鎖したシラバスを作成する。

シラバスの具体的作成例として、ここでは社会学専攻

の学生を対象とした読本用シラバスの一部を挙げる。仮にここでのディスコースを ‘exemplification’ の関係を表わすものから始めてみる。たとえば、次のような(1), (2) の文を学生に提示する。(これらは、社会学の専門書から抜粋した文である。)

(1) The child takes the same attitude towards himself that others take towards him.

(2) Children take the same attitudes towards their environment that adults take towards them.

その次に、いくつかの文を提示し、(1), (2) の命題の例証となる命題の文をえらばせる。例えば、次の(3), (4) の文がえらばれる。

(3) If the average child does not steal, it is because he takes the same disapproving attitude towards such behaviour that others take towards it.

(4) The little girl who is spanked by her mother may in turn spank her dolls.

これを、(1), (2) の文に連結するとそれぞれ次のような文になる。

(5) The child takes the same attitude towards himself that others take towards him. If the average child does not steal, for example, it is because he takes the same disapproving attitude towards such behaviour that others take towards it.

(6) Children take the same attitude towards their environment that adults take towards them. The little girl who is spanked by her mother, for example, may in turn spank her dolls.

次の段階では、これらのディスコースは、更にこれらの命題を支える命題で拡大されるように、学習者にいくつかの文を提示し、その中から, that is to say とか, in other words とかの言い換えを表わす語句で導くことができる文をえらばせる。次の文をえらんだとする。

(7) She acts towards her dolls as her mother acts towards her.

この(7)をこれまでにできあがったディスコースに連結する。例えば、(6)に連結すると(8)になる。

(8) Children take the same attitude towards their environment that adults take towards them. The little girl who is spanked by her mother, for example, may in turn spank her dolls. That is to

say she acts towards her dolls as her mother acts towards her.

次の段階でも、更にいくつかの文を提示し、これまでにできあがったディスコースから引き出せる結論となる文を選ばせる。提示した文の中に、次の(9), (10)を含めておく。

(9) She identifies with her mother according to her experience of what a mother does and feels.

(10) He identifies with the adult point of view, and the thought of stealing prompts feelings of guilt.

この(9), (10)を結論を導く thus を使って、前の段階までにできあがったディスコースを拡大すると次の(11) (12)となる。

(11) The child takes the same attitude towards himself that others take towards him. If the average child does not steal, for example, it is because he takes the same disapproving attitude towards such behaviour that others take towards it. Thus he identifies with the adult point of view, and the thought of stealing prompts feelings of guilt.

(12) Children take the same attitude towards their environment that adults take towards them. The little girl who is spanked by her mother, for example, may in turn spank her dolls. That is to say she acts towards her dolls as her mother acts towards her. Thus she identifies with her mother according to her experience of what a mother does and feels.

以上の例で意図したことは、次のようなディスコースの(基底)構造を持つパラグラフ展開の言語運用に学習者を参加させることである。

主陳述
(Main Statement)

+ 支えの陳述
(Support)
例示(exemplification)
説明(clarification)
結論(conclusion)

すなわち、このパラグラフは ‘topic sentence’ とも呼ばれる主陳述と支えの陳述の2つの部分から成り、支えの陳述は3つの行為(‘act’)からなる。これらの行為を仮に exemplification, clarification, conclusion と称する。最後の行為である conclusion は、主陳述の概括に近(p. 39へつづく)

Silent Way は今…

瀬川俊一

一世を風靡した Oral Approach のように決定的な指導理論・方法もないままに過ぎ去った'70年代は，“the period of uncertainty”¹⁾ではあったが、新たな突破口を求めての提案がなされていた時期でもあった。Silent Way²⁾も、その一案である。

かつて C.C. Fries は、新教材の導入後の教師の発言は授業時間の 1/7 以下でなければならないと主張した³⁾。生徒に口頭練習の機会を多く与えるためである。一単位時間 50 分の約 14.3% すなわち約 7 分の時間内で導入を終えることを意味する。Silent Way では、教師の発言は 10% 以下を大原則としているから、Fries の考え方を更に徹底しているといえる。練習量を増やすために生徒に多くの時間を与える Fries の考え方と、内発的な発言を重視するので、思考に要する時間を少しでも多くするために教師の発言を必要最少限に抑える Silent Way の考え方には、本質的な差はあるものの、授業中の教師の役割を考えるのに誠に示唆的である。

今のところ Silent Way の全容を詳述した書物は本邦にはなく⁴⁾、実践報告もない。しかし「…、「新しい direct method」とも言える Silent Way,…」⁵⁾は、新たな視点を提示しているように思える。

Vol. 18, No. 3 (July 1980) でタイ国 Chombung Village Teachers College の T. Todd Diemer, Opart Panya の両氏は “What We Learned by Using the Silent Way” で、以前に全く英語を習ったことのない 9 歳から 12 歳の 6 名の生徒（男女 3 名ずつ）に Silent Way を用いて指導を行い、その反省に基づき幾つかの傾聴すべき意見を述べている。

まず、授業では教師が中心であるとする伝統的な考え方から学習者中心の考え方へ転換するという基本原則に基づいて、①教師は始めてモデルを提示するにとどめて、反復を避けること、②教室で活動するのは生徒であるように習慣づけること、③生徒に出来るだけ考えさせるため、教師は生徒の間違いにはヒントを与えるにとどめること、④生徒が未習の文型を創造して、間違いを恐れずに使うように仕向けること、に留意しながら指導が行われた。

そこから得られた提案のうち幾つかを拾い出してみよ

う。①教師の人柄が占める役割は大であるが、指導技術が学習効果に及ぼす影響も大である。②生徒が誤りを恐れずに自信を持って発表できるような雰囲気を学級内につくりあげること。③4 技能に加えて thinking を 5 番目の技能として位置づけたい。④いつも生徒の学力向上に併せて指導内容・指導方法を決定する。⑤完璧主義に陥らないで、学習が進むにつれて徐々に学力が身につくように、段階を経て指導する。⑥Silent Way で指導する際には、特に、練習の時間を確保すること及び学習事項に常に生徒の意識の焦点があたっているように仕向けることが重要である。生徒の意識が教師に注がれるような指導は避けたい。

明確な動機と興味が学習者にあれば、学習効果は上がるが、Silent Way による指導では次の 3 点で生徒の動機づけに効果があった。①生徒が学力が向上しているという充実感を持って、喜々として打解けた状態で学習に参加したこと。②生徒が自分達の力で協力しあいながら困難を克服して学習を継続したこと。③生徒がお互いに話しあい、助け合う機会を授業中にもてたこと。

〈学習者中心の英語教育〉へと発想の転換がなされつつある今日、Silent Way は、特に入門期の指導の際一考に値するように思える。（県立静岡女子短期大学助教授）

- 1) Akira Ota, "Methods," *ELEC Bulletin*, Nos. 55 & 56 (Autumn 1976), p. 52.
- 2) 田中春美「外国语教育はどこへ行く」『英語文学世界』(英潮社) Vol. 10, No. 5 (1975年7月号), pp. 18-21. /森戸由久「第9回 TESOL 大会と最近の英語教授法」『英語教育』(大修館書店) Vol. 24, No. 7 (1975年9月号), pp. 54-55. /森戸由久「アメリカの新しい外国语教授法——サイレント・ウェイ」『現代英語教育』Vol. 12, No. 12 (1976年3月号), p. 55. /佐藤秀志「ハワイで受けた型破りの授業——Dr. Stevick の "The Silent Way"」『英語教育』(大修館書店) Vol. 26, No. 10 (1977年12月号), pp. 79-80. cf. Caleb Gattegno, *Teaching Foreign Languages in Schools: The Silent Way*, 2nd ed. New York: Educational Solutions Inc., 1972.
- 3) Charles C. Fries and Agnes C. Fries, *Foundations for English Teaching* (Tokyo: Kenkyusha, 1961), pp. 182 & 341.
- 4) アール W. ステヴィック (著)・石田敏子 (訳)『新しい外国语教育——サイレント・ウェイのすすめ』(ブリタニカ出版, 1979), pp. 165-181.
- 5) 田中春美「教授法の回顧」本誌 No. 60 (Winter 1978), pp. 37-38.



『日英語表現辞典』

最初フミ編著、研究社出版刊

新書版、vi+453pp.、¥2,800

鹿野 力

本書は最所女史の旧著『日本語にならない英語』及び『英語にならない日本語』(正・続)を大幅に改訂・増補の上、合冊したもので、英和・和英の2部より成っている。

「英和の部」では約500の日本人には分かりにくい語句がとりあげられ、類似語句との微妙なニュアンスの違いや用法などについて、例文をあげながら行き届いた解説が加えられている。編著者の言うように、なかにはミニ・エッセーの体をなしているものも少なくなく、引く辞書というより読む辞書の楽しきがある。しかも、その内容は普通の英和辞典には見出しえないものを含んでいる。といふのも、解説が日本人の犯し易い誤り(e.g. "intimate")、あるいは、かなり英語を知っている人たちの間にもよく見られる誤解(e.g. "deep")等を念頭において書かれていると、選ばれた語句の文化的・社会的背景に関する編著者の該博な知識に裏づけられて、単なる語法解説の域を超えた一種の現代文化論・社会論(e.g. "ethnic")になっているからである。

「intimate=親密な」という辞書の定義を鵜呑みにして、"I want to become an intimate friend of yours."と汽車の中で会ったアメリカ人女性に話しかけた学生がいたそうだが、本書のpp.85-86には"intimate"のimplicationsが"close"との比較において分かり易く解説されている。本書には、この種の初步的なものから"exploit"や"idiiosyncrasy"といった高度な、日本人には使いにくい語句にいたるまで、多くのいわゆる semi-natural wordsが網羅されているので、中級以上の英語学習者はもちろん、日常業務の中で英語を使う立場にある実務家や教育者、翻訳者にとっても、示唆に富む辞典となっている。

私のような日本の社会科学文献の英訳に長年携わってきた者にとっても、実はこの「英和の部」の方が教えられるところが多く、かつ楽しく読ませていただいた。邦語文献の英訳においては、伝達すべき思想内容の正しい理解がすべての出発点であり、次いで、理解した内容を、日本語の字句に捉われることなく、naturalな英文に表現しなければならない。その場合、できるだけ和英辞典に頼らず、完全に自分のものになっている表現を使うことが望ましい。Naturalな英文を書くためには、そういう自家薬籠中の表現をできるだけ多く貯えておく必要があるわけであるが、その点、本書の「英和の部」をcasualな気持で繰り返し読むことによって、言語に対するより豊かなfeelingを養うことができるであろう。

ただ、typoが若干見出されるのと、例文の中にいくつかstrangeないし dubiousなusageが含まれているのは残念である。例えば、"consummate"の項の最初の例文は論理的に矛盾があると思われるし、"carte blanche"の項の例文の"to create"の用法にも疑問がある。相当教養のある英語国民でもこう文章を書くことはあるが、決していい文章とは言えない。しかし、これらは「英和の部」の全体としての価値を低めるものではないし、数から言っても僅かにすぎないが、「和英の部」には、はるかに多くの問題が含まれている。

英米人に分かりにくい日本語表現約2,000を収録する「和英の部」は、日本語の字句にとらわれていてはnaturalな英語の表現になり得ないことを、多くの具体例を通して示している点で評価に値するが、一方、定義や例文の隨所にtypoやgrammatical errorsやunnatural expressionsが見出され、そのため「英和の部」にくらべて、質的に劣っているとの印象を免れない。いちいち具体例を挙げる余裕はないが、私が気づいただけでも、各ページに平均二、三か所の問題点がある。英語力の未熟な学習者がそれらを無批判的に会話や英作文に使う可能性が大きいだけに、刊行の前にいま一度しかるべきnative speakers of Englishのcareful editingを求めるべきではなかったろうか。編著者多年の努力の集大成であり、普通の和英辞典にはないうまさが感じられるだけに、なおさら最後のツメの甘さが惜しまれる。改訂版の発行の一日も早からんことを願うものである。

「和英の部」は、日本人よりも、むしろ日本語を学ぶ外国人学生や邦語文献の英訳に携わる外国人翻訳者にとってusefulであろう。もっとも、辞典で見つけた表現がそのまま翻訳に使えることはめったにないが……。

(The Japan Interpreter 編集長)

『異文化間コミュニケーション』

——カルチャー・ギャップの理解——

ジョン・コンドン著、近藤千恵訳
サイマル出版会、四六判、263頁、¥1,500

刀根 健 誌

異文化間コミュニケーションという言葉がもてはやされて久しくなるが、その実体を示し、効果的なアプローチを提供しうる学績は残念ながらまだ稀である。

高度経済成長の波に乗って、貿易、研究、技術導入、外交の目的で「外」に大きく目を向け始めた1960年代、そして、さらに一層の貿易、研究の推進、技術協力、その他政府、民間両レベルでの海外への進出にともない、異文化のよりきめ細かな吸収が必要とされた70年代を経てきた。これらの年代は我国の経済的、政治的地位の向上という大義名分もあり、ある程度、「カルチャー・ショック」の不消化が許された時期であった。

80年代に入り、日米自動車戦争、イラン・イラク紛争、アメリカの政権交代など、異文化を踏まえた上での相手方の立場の十分な理解と、こちらの立場のきめ細かな伝達が要求されるとともに、もはや不可欠な時代にさしかかっている。

本書はこのような時代的要求に応えることが出来る数少ない書物の一つである。「異文化」の認識が何たるかを具体的に示してくれる格好の入門書である。著者のコンドン博士は、現在、米国サンディエゴにある「異文化間コミュニケーション研究センター」の所長を務めており、コミュニケーションの分野では、アメリカでも有数の専門家である。これまで博士はコミュニケーションに関して数多くの本を物された。1975年に出版されたF. ユーセフとの共著、*An Introduction to Intercultural Communication*は、のちにアメリカの大学で教科書として使用されるようになったほどである。

1969年から1979年まで国際基督教大学で教鞭をとられたこともあり、幅広い日本通でもある。日本での学績として特記すべき事項としては、1972年と76年に、E. T. ホール、土居健郎、中根千枝、加藤秀俊など、いずれもこの道一流の学者を迎、日本で初めての異文化間コミュニケーション国際会議を主催した中心人物の1人であるということだ。

先のF. ユーセフとの共著に、これら日本での業績、日常の日本人との触れ合いの原体験を織りませ、コミュニケーションを学ぶ者だけでなく、広く実社会の人々にも読まれるように、情報理論、文化人類学、哲学、倫理学、論理学、宗教、生活信条といった数多くの分野からの識見が平易に展開されているのが強みである。

著者の鋭い指摘の一例を挙げよう。誠意、親切心さえあればわかつてもらえると思って取る行動がしばしば誤解されることがある。それが、異文化の認識の欠如が原因であるということが案外軽視されていたり、気がつかないことが多い。たとえば、仲介者の役割に対する考え方の違いがそれである。日本ではビジネス、結婚など人間生活の多岐にわたり仲介者の機能が重視されている。だが、アメリカ人から見れば、仲介者を立てて円滑に物事をすすめたり、対立を避けようとしていることは、不都合、おせっかい、弱さのしるし、勇気の欠如と受けとめられることすらある、と著者は指摘している。これは一見、異文化の表面的な差異の指摘としか受けとられないかもしれないが、実は重大な示唆が含まれている。会社やその他の職場で次のようなやりとりを見聞きする。「今度、課に入ってきたA君は、他人との協調ベースを考えず、やりすぎるので困る。熱意はわかるので、本人には言わず、彼の上司にそれとなく話しておいたのだが……」。A君の上司にそれとなく伝え、上司に仲介者となってもらうことで、注意した本人、A君、上司の3人とも対立なく円滑に事がおさまるが、ここに欧米人が関与すると事態は一変する。特にA君が欧米人の場合、言い分があれば何故、直接本人に言わないのか、他人にこそそそぐなんて卑怯な、という印象をもたれかねない。「上司を仲介に穩便に……」という誠意が誠意として通じず、コミュニケーション上重大なわだかまりを生じる逆効果となりうる。

本書の内容にこのような個々の日常の場面をあてはめてみると多くの貴重な示唆があることに気づく。本書を有効に活用するためにも、せめてこのくらいの反省と応用を読者側にも持つてもらいたいものである。

国際関係がますます複雑化、緊迫化すると考えられる1980年代、「カルチャー・ショック」を受けたままでは済まされない時代に入っている。本書は、個人としても集団としても国際的にかかわりをもつすべての人に是非、通読、活用をおすすめしたい一冊である。

(ケミカル・バンク勤務)

* * *



■ Japanese and the Japanese

H. Passin 著

本書はアメリカ人の視点から、日本語と英語、日本文化と西洋文化を対比することにより日本語を通して日本人の心性ないし心情を探ろうとしたもの。「人の呼び方／敬語／外来語と和製英語／日本人の諾否・方向感覚・視線恐怖症・ゼスチュア」等が取り上げられている。以下にその「さわり」を2~3つ紹介する。

①日本語の「愛」は伝統的に「崇高」な響きをもつ（親ノ愛／愛国心など）。だから「愛文」とはいわず「恋文（こいぶみ）」という。また「愛」は同等者間のものであるより、上位者の下位者に対する一方向性をもつ（子供ヲ愛スル etc.）。そしてその逆方向は「敬愛」ないし「敬イ」とおきかえられる。ところが一般的に西欧的「愛」とは、中世騎士の宫廷愛に象徴されるようにその方向が正に逆であった（愛とは下位者が上位者に献上するものだった）。また英語の‘love’はその対象に対する献身・愛着・自己放棄等の観念／一般に、積極的なカセクシス（精神的エネルギーが或る特定の人・物・観念に向って集中すること）

の観念を含む。かくて love は人間（特に男女）関係に止まらず、広く神も、全人類も、プロ野球試合もゴ馳走もその対象となし得るのである。ちなみに ‘lovely’ とは love に倣する属性をもつというニュアンスをもつ。

②吉田首相の有名な「バカヤロー」発言問題は外国人には理解し難い（単なる謝罪ですむ所だ）。「バカモノ」が重大な侮辱語たり得るほど日本語は（世界的に見ても）「ののしり言葉」が極端に少ないということである。かくてその6つの原則「宗教／セックス／身体の各部…」が詳細に分析され、西洋人の心の世界を覗かせてくれる。

その他、When Strong Men Weep（男泣き）の章での「人前で涙を見ること」への是非をめぐる考察など、紙数の都合で紹介できないが興味深い指摘もある。行文平明、読了後、その「日本語・日本人論」もさることながら、欧米人の心に数歩近づいた感じのする一書である。

（〒101千代田区神田神保町3の21、金星堂刊、四六判、154頁、¥1,600）

（宇都宮大学教授 石川衛三）

■『英語教育の歩み

—変遷と明日への提言』

伊村元道 共著
若林俊輔

本書は2部から成っている。第1部では、日本人はどうにして外国语を学んできたかを、来日最初の英人三浦按針に始まり、英学の地固めをした蘭学、英学のきっかけを作ったフェートン号事件から始まる草創期からベルリ来航につづく英学の全盛期を経て、国家体制も整い、学校教育も軌道にのってきた明治中期に始まり太平洋戦争終結までの英語

教育の変遷を扱っている。福沢諭吉、ヘボン、外山正一、夏目漱石、岡倉由三郎、バーマーらの英語教育へのかかわり方や英語教育観を豊富な資料を綿密に手際よくまとめて展開している。これらの先達の見解の中には今日でも傾聴に値するものが多い。また、古くは中浜万治郎の英会話書、蕃書調所の辞典、明治、大正にかけて日本人に多大の影響を与えたナショナル・リーダーの詳細な内容紹介、戦時下の教科書の紹介など興味深いものがある。

第2部は、太平洋戦争から現在までを、「英語教科書形態論」と「英語授業学」という著者独特の観点から扱っている。教科書の構成の中で、言語材料や題材内容以外の、従来一般におかしいと思われてはいても論議の対象とはならなかった判型、製本、レッスン、タイトル、彩色、さし絵、活字の大きさや書体、新出語、ページ数などに関して、現在のあり方について疑問を投げかけ、望ましい教科書のあり方について問題提起がなされている。

「英語教授学」では、教科書の内容のうち、題材内容、発音記号、短縮形、キー・センテンス、音節など言語材料にかかわる問題に焦点をあてて現行教科書を分析し、学習指導の効果をあげる教科書のあり方についての著者の主張が述べられている。従来、とかく文型・文法中心主義になっていた英語教育が、内容理解、伝達を前面に出した言語活動中心のものへと転換が要請され、学習指導にも指導者の創意工夫と発想の転換が求められている。今日、本書にはこれから進むべき方向について多くの示唆に富んだ提言がなされている。

（〒101千代田区西神田2-3-16 中教出版刊、A5判、258頁、¥2,000）

（武蔵野美術大学教授 吉富一）

■『日本語の生態』

水谷修著

——「電車が遅れたにしても、もう来るころだ。」

これは外国人向け（日本語）中級教科書の中に実際に出てる話しことばの用例である。この例文を与えられた外国人生徒の多くは、文中の「来る」は何が来るのかという質問に対して「電車」と答えてしまう。それは誤りであるといつてもなかなか納得しない。——

本書は、こういった具体的な例を豊富に挙げながら、特に英語との対比を多く使いながら、日本語とは本来どのような性格をもった言語なの

かを解明しようとしている。著者は外国人に対する日本語教育の第一人者であり、信子夫人との共著になる、『ジャパン・タイムズ』誌に連載中の「日本語ノート」は外国人向けには違ひないが、言語現象に興味をもつ日本人にとっては、その実際の経験をふまえた問題の捉えかたが、常に津々たる興味を喚起してやまない好著である。本書も、我々門外漢に快い驚きを次々と提供してくれる。

「こんなちは」と「おはよう」の違いは必ずしもその使われる時間の差だけではなく、むしろ人間関係による使い方の差に日本独特の意味があるという指摘や、日本語のいわゆる「コソアド体系」は必ずしも英語のthis, it, that……に厳密に対応するものではなく、そこにもやはり日本の内社会・外社会意識と生活習慣が

からまっており、日本語がすぐれて人間の相対関係を意識してなりたっている言語であることを明らかにしていることなど、興味ある記述に満ちている。

私たち英語の教員は英語のむずかしさをいやといふほど知っている。その同じ次元での日本語のむずかしさ（そして、おもしろさ）にも眼をひらいていることは、教室での大きな戦力になる。世の英語教員に一読をおすすめしたい好著である。

本書には、「内の文化を支える話しことば」という、一語一語に非常に豊かなメッセージをもった副題が与えられている。

（〒101千代田区三崎町1-3-12 創拓社刊、四六判、232頁、￥1,200）
(東京都立駒場高等学校教諭)

田村泉)

(p. 35よりつづく)

ここでいう「不平均」は、今なら「不平等」と書くところであろう。この手紙を書いている漱石は、4年後に『野分』を書くときときわめて近い心境にあった。

カール・マルクスの所論の如きは、単に純粹の理屈としても、欠点これあるべくとは存じ候えども、今日の世界にこの説の出するは当然の事と存じ候。小生はもとより政治経済の事に暗く候えども、ちょっと氣炎が吐きたくなり候間、かような事を申し上げ候。「夏目が知りもせぬに」などとお笑いくだされまじく候。

ちなみに、マルクスは1849年以来イギリスに住んで、毎日ブリティッシュ・ミュージアムへ通って研究し、1867年『資本論』第1部刊行、1883年死去、ロンドン東北部のハイゲート墓地に葬られた。第2部と第3部は死後の'85年、'94年にエンゲルスの編によって出版されたのであった。漱石の蔵書には1902年（つまりこの手紙を書いた年）に出版された英訳本が残されている。

このほか、1900年8月25日にはニーチェ（56歳）が亡くなり、11月30日には世纪末文学の驍将オスカー・ワイ

ルド（46歳）が死去している。翌年日本では高山樗牛を中心にニーチェ主義が喧伝された。樗牛は漱石たちとともに留学を命じられたが、病のためはたさず、1902年12月に没した。

*

漱石がロンドンに住み暮らした2年間は、以上述べたような時代であった。

(完)

(玉川大学助教授)

(追記) 今回は次のものを参考にさせていただいた。

1. 芳賀徹『大君の使節』(中公新書 163, 1968)
2. 谷口陸男『アメリカの若者たち』(岩波新書 425, 1961)
3. 福原麟太郎「ヴィクトリア女王の長い治世」(『福原麟太郎著作集』第11巻、研究社、1968)
4. 出口保夫「漱石とヴィクトリア女王の死」(『毎日新聞』1979年1月26日付夕刊)
5. 林董「日英同盟の真相」(『後は昔の記』東洋文庫 173、平凡社、1970)

なお、引用文はいずれも現代表記に改め、句読点などを補つてある。

☆

☆

☆

★『英会話オールラウンド教本』向謙次郎著、国際教育研究所編、研究社出版（〒162新宿区神楽坂1—2）刊、210×180mm、269頁、¥2,000

各課とも英絵単語のイラストにはじまり、①英文の導入 ②会話 ③暗誦会話 ④比較文化学習 ⑤発音練習 ⑥日英転換練習 ⑦口頭英作文練習 ⑧豆知識 ⑨会話 II ⑩討論という構成になっている。一家族のアメリカ滞在を中心に、その生活の中で生きた英語を学ばせようとする意図のもとに書かれている。比較文化学習欄の読み物には、学習者の心すべき内容が盛られている。このように英語の教科書の中に読み物的な色彩を取り入れた点はユニークであり、文化面の配慮が見える。誤植 p. 49 sil→s'il, p. 76 studium→stadium, p. 172 ㉖㉗㉘イラストの標示番号の訂正, p. 184 midow→widow, 消火栓, なお Oral Composition の解答は自習者の便宜のために全部巻末につけておいてほしい。

★『まちがえやすい英語』小島義郎著、日本放送出版協会（〒150渋谷区宇田川町41—1）刊、B6判、175頁、¥800

外国语としての英語を学ぶとき、言葉のもつニュアンスのちがい、connotation の内包する範囲にはずいぶん悩まされるものである。本書は large と big のような易しい言葉の持つ差異について、わかりやすく説明している。初学者のみならず現場の先生方にも教える立場から是非一読してもらいたい。

★『英会話あと一步』Marsha Krakower著、光文社（〒112文京区音羽2—12—13）刊、新書版、234頁、¥600

バイリンガルの著者が日本で育った体験から、どうしたら英語がうまくなるかを説明している。①耳と目と全体で覚えたものはけっして忘れない ②重要なことは辞書をひくこと、声を出して言ってみること、③日常はどうせたわいもない話題が多いのだから Simple English がよく通じる。④あまり上品な顔をしないでユーモアをまじえて話すことなどを主張している。教える立場の教師には参考になることばかりである。

★『知っておきたい英語の諺』矢野文雄著、三友社出版（〒112文京区水道1—7—1）刊、B6判、¥1,200
英米ミステリーを中心にして、使われている諺の応用

例をあげ、日英両語の共通点、相違点などを明快にしている。読者は著者の読書量に圧倒され、引き込まれてしまう。相当手ごだえのある作品である。

★『私説英語教育論』中村敬著、研究社出版（〒162新宿区神楽坂1—2）刊、B6判、¥980

戦後の英語教育が歩んだ道が、そのまま我が国の社会文化史の一環としてとらえられている。英米一辺倒に終始した従来の英語教育が、今転換期を迎え、眞の意味の人間教育としてのレゾンデートルを持つべきであることを切々と訴えている。その意味で拍手を送り、英語教師のみならず、すべての識者に是非広く読んでいただき、眞剣に対処すべき英語教育論であり、決して私説にとどめおくべき性質のものではない。

★『米語表現クリニック』G. Strickers・荒磯芳行共著、旺文社（〒162新宿区横寺町55）刊、新書版、230頁、¥500

日本人のおちいりやすい堅苦しい変な英語を、180の例にもとづき、矯正することを試みている。例えば、「父は私を叱りました」は My father scolded me. と言うかわりに、My father bawled me out. という方が自然であるという。また最後に Quiz を載せている点も親切である。目にとまった誤植, p. 126 a male chauvinist, p. 195 a year separation→a year separation. 値段も手頃であり、高校生には最適、教員にも益するところがあるはずである。

★『アメリカ口語会話』G. Strickers・根本政則共編、株式会社語研（〒101千代田区猿楽町2—7—17）刊、B6判、261頁、¥1,200、テープ¥6,000別売

Colloquial expression というものは、ひとつずつ体験してはじめて身につくものようである。しかし最近はテープのおかげで別に外国に行かなくても、聞きとりの練習ができるようになった。本書は特に Role-playing ができるように工夫してある点で、自習にも最適である。Practice のための sentence が2つある場合は、少しもつかしいが、日本文を見ながら repeat できるようになっている。一般人向の会話教材だが高校生あたりにも適している。

★『追悼 石橋幸太郎先生』「石橋幸太郎先生追悼文集」編集委員会編、大修館（〒101千代田区神田錦町3—24）刊、四六判、333頁、非売品

追悼文の中には、いつも故人のエピソードがある。ひとりの人間がドカッと座っていて、それを語りかけてくれる。読者はそこに故人の顔を見ることができる。希望者は直接大修館に申し込まれたい。（送料とも実費¥2,500）



◆ELEC 日本語教師養成講座冬学期

期 間 昭和56年1月9日（金）—4月3日（金）
 授業日時 水・金 6:10—7:50 p.m.
 講 師 Prof. Noah S. Brannen (国際基督教大学教授)・入谷敏男氏 (東海大学助教授)・川上榮氏 (国学院大学助教授)・倉又浩一氏 (東京電気大学教授)他
 受 講 料 50,000円
 申込み・問合せ 〒101東京都千代田区神田神保町3-8
 (電) 03-265-8911 ELEC 英語研修所

◆イングリッシュ・ギャラクシー

〈第1部〉
 期日 昭和56年3月27日（金）—30日（月）3泊4日
 対象 中・高・大学生、一般
 場所 静岡県御殿場・YMCA 研修所東山荘
 講師 マーシャ・クラッカワー氏 (NHK 英会話出演)、ジョン・マイルズ氏 (埼玉大学講師)、トニー植松氏 (玉川大学教授)他
 費用 39,000円

〈第2部〉

期日 昭和56年5月3日（日）—5日（火）2泊3日
 対象 小学生及び主婦（親子の参加も歓迎）
 場所 静岡県御殿場・YMCA 斎藤記念会館
 講師 ジョン・マイルズ氏、トニー植松氏他
 費用 39,000円

申込み・問合せ 〒151東京都渋谷区代々木2-23-1、ニュー・スティート・メナー1358、トニー植松語学センター、(電) 03-374-5055

◆第2回英語による仏教研究発表会出場者募集

日 時 昭和56年2月21日（土）1:30—5:00 p.m.
 会 場 麻布六本木 国際文化会館
 テーマ 仏教または日本文化と仏教に関するもの
 参加費 1,000円

発 表 英語により7分以内

申込み 1月31日までに発表するレジメを添えて、
 〒162東京都新宿区新小川町3-17牛込グレースマンション501 仏教英語研究会宛郵送にて
 申込むこと。

◆太平洋コミュニケーション学会第11回年次大会

期 日 昭和56年6月20日（土）、21日（日）
 場 所 長崎日本大学高等学校
 問合せ 〒157東京都世田谷区砧5-2-1日本大学商学部内 太平洋コミュニケーション学会

◆関西 ESS クラブ勉強会

関西 ESS クラブでは毎週日曜の午後、英語についての勉強会を開催している。参加希望者は、50円切手貼付返信用封筒同封のうえ、〒532大阪市淀川区木川東3-9-1泰山荘内 中川美和宛問合せられたい。

◆ELEC 同友会副会長の選出

5月26日に開催された第37回 ELEC 同友会理事会において、次の3氏が副会長として選出された。
 伊藤 健三 (立教大学教授)
 名和雄次郎 (国士館短期大学助教授)
 下村勇三郎 (東京学芸大学付属竹早中学校教諭)

『編集後記』

■偶然のなりゆきで町内の神社のお祭りに生花を奉納することになり、祭りばやしの響く境内へと足を運んだ。社務所にはすでに神官をはじめ町内会の世話役が詰めており、食器のふれあう音、煮物の良い香りなど、幼い日を過した田舎の秋祭りが想い出されてなつかしく、その時生じた心のぬくもりはその後数週間にも及んだ。人と人とのつながりがますます稀薄になってゆく昨今、この種の行事の必要性が改めて感じられたできごとであった。

■1979年春号以来8回にわたって連載した「漱石のロンドン」は本号で終了することとなりました。2年間休まず執筆いただいた伊村元道先生に心からお礼申し上げます。

(美光)

英語展望 (ELEC Bulletin)

第72号

定価 580円 (送料200円)

昭和56年1月1日 発行

◎編集人 朱牟田夏雄
 発行人 松本重治
 印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 ELEC (財団法人英語教育協議会)
 東京都千代田区神田神保町3の8
 電話 (265) 8911-8917
 振替・東京 3-11798

ELEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC